山形県埋蔵文化財センター調査報告書第84集

中台4・5遺跡

発掘調査報告書

2001

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

中台（なかだい）4・5遺跡

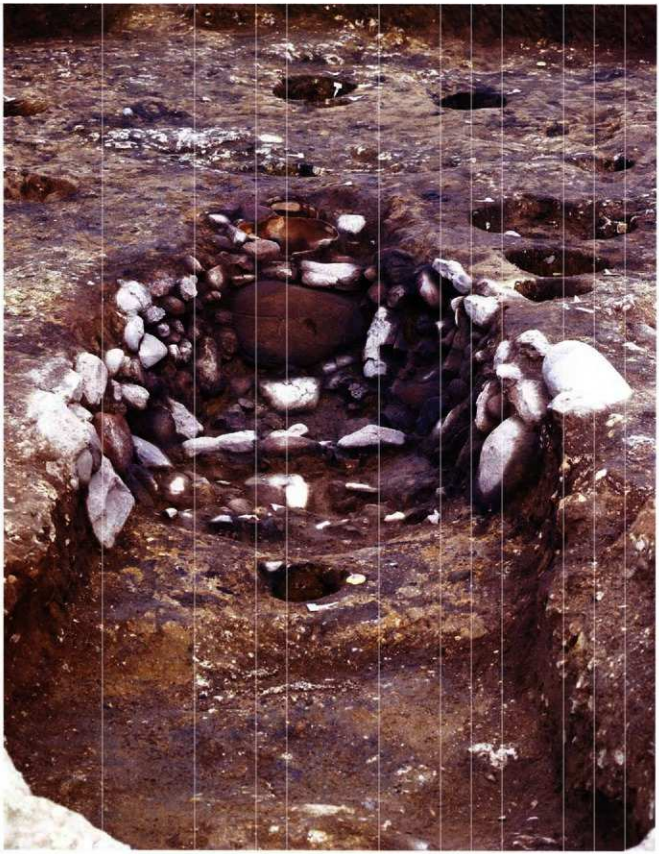
発掘調査報告書

平成13年3月

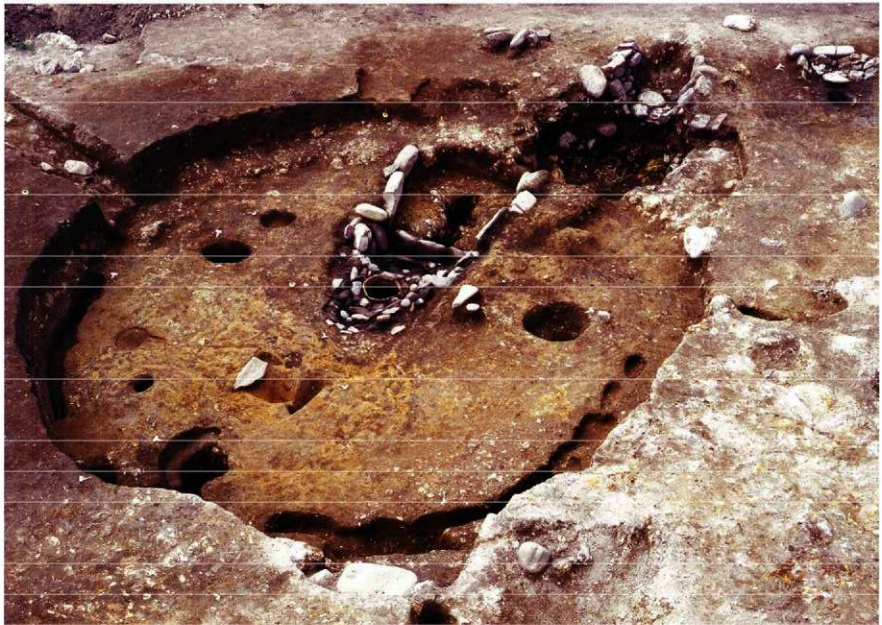
財団法人　山形県埋蔵文化財センター

中台４・５遺跡近景（南から）

中台４遺跡ST57（東から）



中台 4 遺跡 ST57EL78（北から）



中台４遺跡 ST58（東から）

中台４遺跡 ST58 EL102（西から）

中台４遺跡ST51（西から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、中台４・５遺跡の調査成果をまとめたものです。

中台４・５遺跡は、最上郡の最北に位置する真室川町に所在します。中台遺跡群は、神室山系から流れる塩根川の河岸段丘上にあり、中台１～６遺跡まで確認されています。付近には国の重要文化財に指定されている縄文晩期の土偶が出土した釜淵Ｃ遺跡を始めとして、縄文時代の遺跡が数多く点在しています。

この度、県営ほ場整備事業担い手育成型（八敷代地区）に伴い、中台遺跡群の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代中期末葉に特有の複式炉を備えた竪穴住居跡が見つかりました。遺物は、魚捕りの網に用いられた石錘が多数出土しています。

近年、高速自動車道やバイパス工事、農業基盤整備事業、その他開発が進み、これに伴い発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は、県営ほ場整備事業担い手育成型（八敷代地区）に係る、「中台４遺跡」「中台５遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は山形県農林水産部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	中台４遺跡	遺跡番号　平成10・11年度登録
	中台５遺跡	遺跡番号　平成10・11年度登録
所在地	山形県最上郡真室川町大字釜淵字中台	
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受託期間	平成12年４月１日～平成13年３月31日	
現地調査	平成12年５月８日～平成12年９月22日	
調査担当者	調査第一課長	野尻　侃
	主任調査研究員	黒坂　雅人（調査主任）
	調査員	豊野　潤子

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県農林水産部、新庄土地改良事務所、真室川町農林課、真室川町教育委員会にご協力いただいた。

5　本書の作成・執筆は、黒坂雅人、豊野潤子が担当した。編集は須賀井新人、多田和弘が担当し、全体については野尻侃が監修した。

6　委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測	株式会社シン技術コンサル
遺物実測	株式会社アルカ

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居跡　　ＳＫ…土坑　　ＳＤ…溝跡　　ＥＬ…カマド跡

ＥＰ…遺構内柱穴　　ＥＫ…遺構内土坑　　ＲＰ…登録土器　　Ｓ……礫

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3　報告書執筆基準は下記のとおりである。

(1)　遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示す。

(2)　グリッドの南北軸は、Ｎ－30°－Ｗを測る。

(3)　遺構実測図は1/40～1/200他の縮尺で採録し、各々スケールを付した。

(4)　遺物実測図は1/3、1/2で採録し、各々スケール付した。

(5)　遺物計測表中の計測値の（　）は復元による推定値、［　］は残存値、－は計測不能、空欄は計測不要を示す。また単位は特に断りがないかぎりmmを使用している。

(6)　遺物図版は俯瞰は約1/3、1/2立写は任意の縮尺で採録した。

(7)　土層断面図中の色調の記載は、1987年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2

Ⅲ　調査の経過 …… 4

Ⅳ　遺跡の概要
　1　中台４遺跡の概要 …… 6
　2　中台５遺跡の概要 …… 7

Ⅴ　中台４遺跡の遺構と遺物
　1　竪穴住居跡 …… 9
　2　河川跡 …… 20
　3　土　坑 …… 20
　4　遺物包含層 …… 30
　5　縄文土器 …… 31
　6　石　器 …… 70
　7　土製品・石製品 …… 75

Ⅵ　中台５遺跡の遺構と遺物 …… 109

Ⅶ　調査のまとめ
　1　検出遺構について …… 112
　2　出土遺物について …… 113

報告書抄録 …… 114

表

表1　土坑観察表（1）……27
表2　土坑観察表（2）……28
表3　土坑観察表（3）……29
表4　縄文土器観察表（1）……64
表5　縄文土器観察表（2）……65
表6　縄文土器観察表（3）……66
表7　縄文土器観察表（4）……67
表8　縄文土器観察表（5）……68
表9　縄文土器観察表（6）……69
表10　石器計測表（1）……104
表11　石器計測表（2）……105
表12　石器計測表（3）……106
表13　石器計測表（4）……107
表14　石器計測表（5）……108

挿　図

第1図　遺跡位置図……3
第2図　調査区概要図……5
第3図　中台4・5遺跡土層柱状図……7
第4図　中台5遺跡遺構配置図……8
第5図　ST50……12
第6図　ST49……13
第7図　ST57（1）……14
第8図　ST57（2）……15
第9図　ST58・59・60（1）……16
第10図　ST58・59・60（2）……17
第11図　ST51……18
第12図　ST54……19
第13図　SG1土層断面図……21
第14図　土坑（1）……23
第15図　土坑（2）……24
第16図　土坑（3）……25
第17図　土坑（4）……26
第18図　縄文土器（1）……35
第19図　縄文土器（2）……36
第20図　縄文土器（3）……37
第21図　縄文土器（4）……38
第22図　縄文土器（5）……39
第23図　縄文土器（6）……40
第24図　縄文土器（7）……41
第25図　縄文土器（8）……42
第26図　縄文土器（9）……43
第27図　縄文土器（10）……44
第28図　縄文土器（11）……45
第29図　縄文土器（12）……46
第30図　縄文土器（13）……47
第31図　縄文土器（14）……48
第32図　縄文土器（15）……49
第33図　縄文土器（16）……50
第34図　縄文土器（17）……51
第35図　縄文土器（18）……52
第36図　縄文土器（19）……53
第37図　縄文土器（20）……54
第38図　縄文土器（21）……55
第39図　縄文土器（22）……56
第40図　縄文土器（23）……57
第41図　縄文土器（24）……58
第42図　縄文土器（25）……59
第43図　縄文土器（26）……60
第44図　縄文土器（27）……61
第45図　縄文土器（28）……62
第46図　縄文土器（29）……63

第47図　石器（1）…… 76
第48図　石器（2）…… 77
第49図　石器（3）…… 78
第50図　石器（4）…… 79
第51図　石器（5）…… 80
第52図　石器（6）…… 81
第53図　石器（7）…… 82
第54図　石器（8）…… 83
第55図　石器（9）…… 84
第56図　石器（10）…… 85
第57図　石器（11）…… 86
第58図　石器（12）…… 87
第59図　石器（13）…… 88
第60図　石器（14）…… 89
第61図　石器（15）…… 90
第62図　石器（16）…… 91
第63図　石器（17）…… 92
第64図　石器（18）…… 93
第65図　石器（19）…… 94
第66図　石器（20）……95
第67図　石器（21）……96
第68図　石器（22）……97
第69図　石器（23）……98
第70図　石器（24）……99
第71図　石器（25）…… 100
第72図　石器（26）…… 101
第73図　石器（27）…… 102
第74図　石器（28）…… 103
第75図　中台5遺跡出土石器（1）……110
第76図　中台5遺跡出土石器（2）……111

図　版

巻頭図版1　中台4・5遺跡近景
巻頭図版2　中台4遺跡ST57
巻頭図版3　中台4遺跡ST57EL78
巻頭図版4　中台4遺跡ST58
巻頭図版5　中台4遺跡ST58EL102
巻頭図版6　中台4遺跡ST51
図版1　調査前の状況・調査区近景
図版2　トレンチ調査・表土剥取他
図版3　遺構検出状況
図版4　ST49・ST49EL37
図版5　ST50・ST50炉跡
図版6　ST51調査状況
図版7　ST51EL48土層断面他
図版8　ST57調査状況・床面検出状況
図版9　ST57EL78土層断面他
図版10　ST58床面検出状況他
図版11　ST58EL102埋設土器内の礫他
図版12　ST59・60完掘状況他
図版13　ST60EL106土層断面他
図版14　ST54調査状況・完掘状況
図版15　SG1完掘状況
図版16　SG1中央ベルト土層断面他
図版17　南崖遺物包含層調査状況他
図版18　EU63土層断面他
図版19　SK12完掘状況・SK19土層断面
図版20　SK38土層断面・完掘状況
図版21　SK43土層断面・完掘状況
図版22　SK53土層断面・SK56完掘状況
図版23　SK55土層断面・完掘状況
図版24　SK125土層断面・完掘状況
図版25　SK129土層断面・完掘状況
図版26　SK137土層断面・完掘状況
図版27　遺構集中区域完掘状況
図版28　調査区完掘状況

図版29　縄文土器（1）
図版30　縄文土器（2）
図版31　縄文土器（3）
図版32　縄文土器（4）
図版33　縄文土器（5）
図版34　縄文土器（6）
図版35　縄文土器（7）
図版36　縄文土器（8）
図版37　縄文土器（9）
図版38　縄文土器（10）
図版39　縄文土器（11）
図版40　縄文土器（12）
図版41　縄文土器（13）
図版42　縄文土器（14）
図版43　縄文土器（15）
図版44　縄文土器（16）
図版45　縄文土器（17）
図版46　縄文土器（18）
図版47　縄文土器（19）
図版48　縄文土器（20）
図版49　縄文土器（21）
図版50　縄文土器（22）
図版51　縄文土器（23）
図版52　石鏃
図版53　石錐
図版54　石匙
図版55　石篦（1）
図版56　石篦（2）
図版57　掻・削器（1）
図版58　掻・削器（2）
図版59　掻・削器（3）
図版60　掻・削器（4）
図版61　石核（1）
図版62　石核（2）
図版63　石核（3）
図版64　石核（4）
図版65　石錘（1）
図版66　石錘（2）
図版67　磨製石斧
図版68　打製石斧・敲石
図版69　凹石（1）
図版70　凹石（2）
図版71　凹石（3）
図版72　凹石（4）
図版73　中台5遺跡調査前の状況
図版74　中台5遺跡SK2検出状況
図版75　中台5遺跡SK3検出状況
図版76　中台5遺跡トレンチ2土層断面他
図版77　中台5遺跡トレンチ5土層断面他
図版78　中台5遺跡調査区完掘状況
図版79　中台5遺跡出土遺物（1）
図版80　中台5遺跡出土遺物（2）

Ⅰ　調査に至る経過

今回の中台４・５遺跡の発掘調査は、山形県農林水産部が計画した「県営ほ場整備事業担い手育成型（八敷代地区）」の工事に先立って実施された緊急発掘調査である。

ほ場整備事業にかかる八敷代地区およびその周辺地区は、平成10年度に山形県教育庁文化財課によって最初の分布調査が行われた。事業予定地である中台地区では、３カ所の埋蔵文化財包蔵地と４ヶ所の遺跡可能性地が抽出され、前者は中台１～３遺跡として登録された。

平成11年５月に行われた２度目の分布調査では、前年度の調査で抽出された可能性地のうちの２ヶ所が埋蔵文化財包蔵地であることが明らかとなり、中台４・５遺跡として登録された。また、事業区域の北端部で縄文土器や石器・剥片等が採集される、新たな埋蔵文化財包蔵地が見つかり、中台６遺跡として登録された。

その後、山形県教育庁文化財課によって、平成11年10月４日から同月８日の日程で、より具体的な遺跡内容を把握するための試掘調査が行われ、中台１～６遺跡は縄文時代中期を主体とする集落跡であることがわかった。

この結果を踏まえ、ほ場整備事業の工法について見直しがなされ、中台１・２・３・６遺跡については盛り土により遺跡の現状保存が可能となったが、中台４・５遺跡については切り土が免れないことから、記録保存のための発掘調査を行うことになった。

以上のような経過で、財団法人山形県埋蔵文化財センターは、山形県農林水産部からの委託を受け、平成12年５月８日から９月22日までの期間で、中台４・５遺跡の発掘調査を実施するに至った。

発掘調査に至るまでの協議等は、以下のとおりである。

◆山形県農林部長より、財団法人山形県埋蔵文化財センター理事長あてに「県営圃場整備事業担い手育成型（八敷代地区）の実施に伴う地区内埋蔵文化財発掘調査」の依頼（H12／２／４）

◆山形県農林部と財団法人山形県埋蔵文化財センターとの間で「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結（H12／４／１）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

真室川町は山形県最上郡の北端に位置する町である。町域の80％を山林が占める山間地で、秋田県との県境沿辺は奥羽山脈・神室山地・丁岳山地などの高峰が連なり、神無山県立自然公園に指定されている。町域を流れる川のほとんどが県境の山々から流れ出し、町の東部を流れる真室川と、西部を流れる大沢川に集まり、やがてこの２つも合流し鮭川となる。

最上郡は内陸性の気候であるが、寒冷多湿でとりわけ冬季の降雪量は全国的にも多い。年間の根雪期間は100日を超え、日照時間も県内の他地域に比べ短い。このような厳しい気象条件のもと、農業は水稲・畑作がほとんどで、くだもの王国として知られる山形県では例外的に果樹栽培が難しい地域といえる。代わって、豊かな山林から得られる良質の杉材を利用した木材加工業や、キノコ栽培・山菜加工業、サケ・アユ・ニジマスといった清流魚のふ化放流や養殖業など、自然環境を生かした地場産業が盛んである。

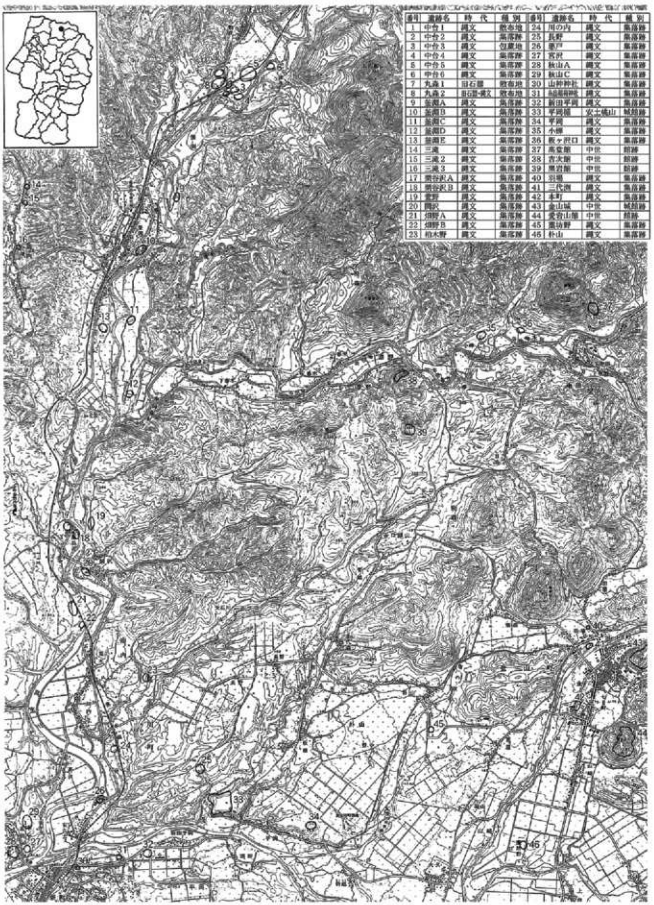
中台遺跡群は、真室川の上流である塩根川によって形成された右岸の河岸段丘上に、中台１遺跡から６遺跡まで点在している。中台１・５・６の各遺跡は標高160mの第３段丘に、中台２・３・４の各遺跡は標高150mの第２段丘に立地する。高く険しい山あいを激しく蛇行する塩根川の流域は深く狭い峡谷を形成しており、大きく浸食された谷壁には硬質の岩層が随所に露出している。生活・農耕の場は川沿いの河岸段丘と沖積地に限られる。段丘の地目はすべて水田で、付近一帯は昭和50年代初めに最初のほ場整備が行われている。

2　歴史的環境

真室川町は中世には鮭延郷と称され、戦国期に入ると鮭延氏が真室川沿岸に鮭延城を築き城下町をつくった。周辺には庭月館・平岡館・差首鍋館ほか、城館跡も多く存在する。

真室川町内で確認されている約70遺跡のうち、50遺跡以上が縄文時代の集落跡であり、その多くが川沿いの河岸段丘上に分布している。縄文前期の遺跡では、東町遺跡で大木２型式、秋山遺跡で大木６型式の土器が出土したとされているほか、悪戸遺跡は水田耕作時に大木５型式の土器が発見され、昭和32年に山形大学の柏倉亮吉氏が簡易な調査を行っている。縄文中期の遺跡は最も多いとされており、片杉野遺跡・砂子沢遺跡で石組を有する炉跡が見つかっている。さらに中期を主として後・晩期にわたる複合遺跡が多いことも特徴的である。しかし、これらの遺跡のほとんどは昭和30年代以前に、偶然見つかった遺物によってわかった遺跡で、いずれも本格的な発掘調査がされていないため詳細不明である。

釜淵地区には、釜淵遺跡群として縄文時代晩期を中心とする遺跡および遺物出土地点のＡからＦまでの６カ所が見つかっている。釜淵Ｃ遺跡は別称「五郎前遺跡」とも呼ばれ、大正４年（1915）に縄文時代晩期の土偶が発見された場所とされている。この土偶は国の重要文化財に指定され、現在は真室川町新町の正源寺が所蔵している。その後昭和60年（1985）に釜淵Ｃ遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代中期末から晩期末の土器・石器が多数出土している。



番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	中台1	縄文	敷布地	24	川の内	縄文	集落跡
2	中台2	縄文	集落跡	25	長野	縄文	集落跡
3	中台3	縄文	包蔵地	26	東戸	縄文	集落跡
4	中台4	縄文	集落跡	27	宮沢	縄文	集落跡
5	中台5	縄文	集落跡	28	秋山A	縄文	集落跡
6	中台6	縄文	集落跡	29	秋山C	縄文	集落跡
7	丸森1	旧石器	敷布地	30	山神神社	縄文	集落跡
8	丸森2	旧石器・縄文	敷布地	31	結城神社	縄文	集落跡
9	金岡A	縄文	集落跡	32	新田平岡	縄文	集落跡
10	金岡B	縄文	集落跡	33	平岡屋	火土橋山	城館跡
11	金岡C	縄文	集落跡	34	平岡	縄文	集落跡
12	金岡D	縄文	集落跡	35	小畑	縄文	集落跡
13	金岡E	縄文	集落跡	36	飯ヶ沢口	縄文	集落跡
14	三滝	縄文	集落跡	37	高堂館	中世	館跡
15	三滝2	縄文	集落跡	38	吉次館	中世	館跡
16	三滝3	縄文	集落跡	39	黒岩館	中世	館跡
17	黒谷沢A	縄文	集落跡	40	羽場	縄文	集落跡
18	黒谷沢B	縄文	集落跡	41	三代渕	縄文	集落跡
19	堂野	縄文	集落跡	42	本町	縄文	集落跡
20	岡沢	縄文	集落跡	43	金山城	中世	城館跡
21	畑野A	縄文	集落跡	44	愛宕山屋	中世	館跡
22	畑野B	縄文	集落跡	45	黒谷野	縄文	集落跡
23	柏木野	縄文	集落跡	46	仲山	縄文	集落跡

第1図　遺跡位置図 (国土地理院発行2万5千分の1地形図「及位」「羽前金山」を5万分の1に縮小)

Ⅲ　調査の経過

今回の発掘調査では現地調査を平成12年５月８日から同年９月22日の実働92日間にわたって実施した。調査面積は中台４遺跡が3,000m²、中台５遺跡が2,350m²の計5,350m²である。

現地調査は、５月８日に器材の搬入を行い、５月９日には調査を開始するにあたって、新庄土地改良事務所・真室川町農林課・真室川町教育委員会の来賓を迎えて、鍬入式を行った。

５月10日から同月23日までは、重機械を導入しての表土剥ぎ取り作業を行った。この間、剥ぎ取りが終わった部分から人手による粗掘・面整理を行い、遺構検出していった。中台４遺跡では、遺構検出面の大部分が多量の大礫・中礫や風化礫が入り込んだ礫層で、スコップ・ジョレンを使用しての粗掘作業に困難した。一方、中台５遺跡では、昭和40年代後半から50年代初めのほ場整備の際に、調査区縁辺部を除くほとんどが削平されていたため、作業は縁辺部に限られたが、調査区のすぐそばを奥羽本線が通っていることと、外縁が急な斜面でその下の沢に雪解け水が激しく流れていることなど、作業中の安全面に留意した。

業者委託による基準点測量は５月22・23日に実施した。また、１回目の空中写真撮影を５月30日に行い、遺構検出状況および遺跡遠景を撮影した。

遺構精査は５月30日から開始した。ほ場整備の工事順により、中台５遺跡を先に行った。調査区縁辺部にトレンチを13カ所設定して掘り下げた。遺構は縁辺部において土坑４基が検出されたにとどまった。６月14日には中台５遺跡についての完掘状況撮影のため、２回目の空中写真撮影を行い、６月23日に、新庄土地改良事務所整備課長立ち会いのもと、現地において引き渡しを済ませた。

中台４遺跡の遺構精査は６月13日から開始した。作業は最も大きな土量を排出するSG1河川跡から入り、２m×２mのグリッド毎に遺物を取り上げながら掘り下げていった。６月下旬からSG1精査と平行して土坑精査に入った。６月いっぱいでSG1精査が終わり、７月から西側崖際部分の精査とSG1の流路だったと思われる区域で検出した土坑・竪穴住居跡・複式炉等の精査に入った。また、調査区中央部の16～22－31～39について面的に掘り下げ、遺構の有無を確認するための精査を開始した。７月中旬に、今回の調査での最大の成果となったST57・58他の竪穴住居跡を検出し、精査に入った。竪穴住居跡の床面検出まではそれぞれ１週間程度を要し、土層断面観察のためベルトを除去した後、８月１日からST57－EL78と竪穴住居跡内で見つかった柱穴について、翌２日からはST58－EL102と柱穴についての精査に入った。竪穴住居跡の精査と平行して、調査区南域の①16～21－16～22、②18～23－24～25、③24～27－22～25の３つの区域を面的に掘り下げ、遺構の有無を確認した。①の区域からは40基近くの土坑が検出され、精査を行った。８月下旬は残りの西側崖際を精査し、８月31日には中台４遺跡の完掘状況を撮影する３回目の空中写真撮影を行った。

９月５日には現地において調査説明会を開催し、地元の小中学生をはじめ平日にもかかわらず250人を超える見学者が集まった。９月22日には発掘調査の全行程を終了した。

第2図　調査区概要図

Ⅳ　遺跡の概要

1　中台４遺跡の概要

中台４遺跡は真室川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡ののる段丘面は低位から２段めにあたり、標高152m前後を測り、河床面から約17m、最低位の段丘から約７mの比高差をもつ。隣接する中台２遺跡および中台３遺跡とは同じ段丘面上に立地するが、中台３遺跡との間には幅約20～30m、比高差１～４mの低位面が南北方向に観察された。これは旧河川あるいは沢筋とみられる。

本遺跡の規模は東西約120m、南北約70m、面積約8,000m²を測る。このうち今回の圃場整備によって削平を受ける遺跡南西半部2,800m²が調査区として設定された。調査区内の基本層序は、以下のようになる。

Ⅰ層　　暗褐色粘土質シルト：耕作土で約15～25cmの堆積。

Ⅱ層　　暗灰褐色粘土：小礫が多量に混じり硬くしまる。水田の床土。

Ⅲ層　　黒色粘土：遺物包含層。

Ⅳ層　　褐色粘土質シルト：遺構確認面。５～50cm大の礫を多量に含む。

遺構確認面までの深さは40～80cmを測るが、東から西に向かって深くなる傾向がみられた。

調査区内の遺構の分布状況は、北半部分のSG1河川跡、西半部分の竪穴住居跡群、南半部分の土坑群に大別される。

SG１河川跡は、調査区北東辺中央から南東ー北西方に直線的に検出された。北西辺ではST49およびST50などの竪穴住居跡を破壊している。堆積土内からはおびただしい礫とともに縄文土器片、石器、剥片類が多く出土したが、特に縄文土器は小破片で出土しており、これらは土砂とともに流れ込んで堆積した可能性が強い。出土した土器片の年代は、断続的に縄文時代中期前葉から後期前葉までのものを含む。またSG1の南に位置するST57およびST58はいずれも複式炉をともなう竪穴住居跡であるが、これらの堆積土上層からは、縄文時代中期前葉や後期前葉、晩期末葉の土器片が出土した。これらの堆積土はSG1の上層の堆積土と類似していることから、住居廃絶後の埋没過程において、この河川の土砂をかぶっている可能性が指摘できる。

竪穴住居跡群は６～18－34～50区で８棟が検出された。特に６～15－40～50区には７棟の竪穴住居跡が集中している。これらの主体は、床面に複式炉をともなう縄文時代中期末葉のものであるが、ST50は石囲炉をもつ、より古い時期の竪穴住居跡とみられる。また、ST51の北西半部分は崖面で失われていることや、ST58～ST60と南西崖面との位置関係から、集落が営まれていた当時から現在までの間に北西および南西の縁辺はかなり侵蝕が進んでいるものと考えられる。ST54はこれらの集中区域からは若干離れて検出された。構造的にも壁柱穴と地床炉をもつ小形の竪穴住居跡であり、出土遺物から縄文時代後期前葉に所属するものとみられる。なおST50の西、北、東の周囲には約20基の土坑が集中して検出された。これらの性格は不明であるが、出土遺物から概ね縄文時代中期前葉から末葉の所産と考えられる。

調査区南半部分の土坑群は15～28－12～22区の範囲において約40基が検出された。平面形、

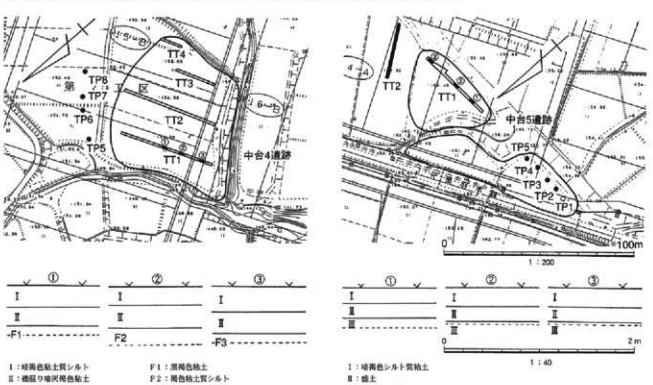
規模、配置などに規則性は認められず、その性格も不明である。出土遺物から縄文時代後期前葉に所属するものと考えられる。

2　中台５遺跡の概要

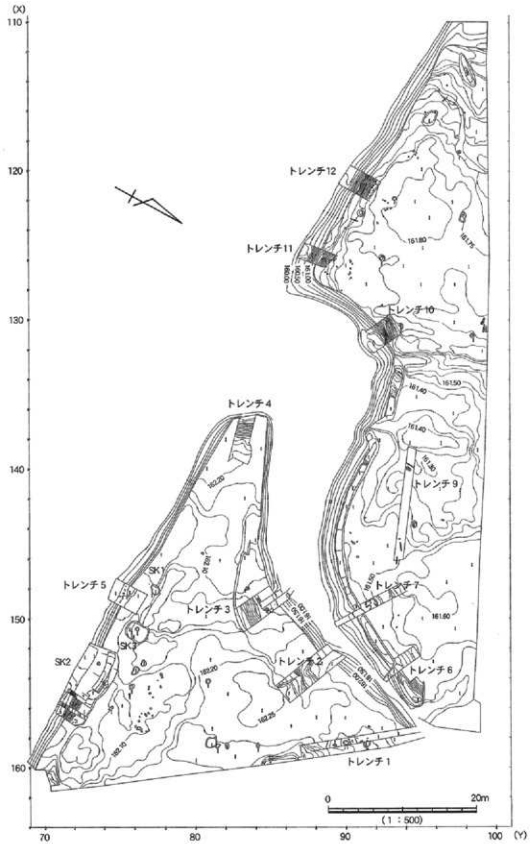
中台５遺跡ののる段丘面は低位から３段めにあたり、標高は161～166mを測るが、遺跡範囲の東縁辺部では直接河床面まで比高差28mの崖となっている。本遺跡の規模は東西280m、南北180mを測り、このうち今回調査区域となったのは、遺跡南西端の2,550m²である。

調査区の層序はI層の暗褐色シルト質粘土が耕作土、II層が黒褐色、黄褐色、灰褐色のシルト、粘土が混じり合う盛土層、III層が遺構確認面となる黄褐色シルトである。遺構確認までの深さは20～30cmである。調査区の大半では、前回の圃場整備によって遺構確認面が削平を受け、II層下はグライ化した青灰色粘土または黄褐色粘土となり、削平を免れたのは南辺の崖面付近および調査区中央を南北に横切る沢の縁辺付近だけであった。検出遺構はこの南辺の東半部分に集中する。所属時期や遺構の性格などは不明である。また、調査区北東部分には湿地の存在が確認された。この付近の地山面には直径３～10cm大の円礫が多く含まれる。いずれも出土遺物が僅少または皆無であった。

遺物は南辺および中央の沢筋に設定したトレンチを中心に出土している。剥片、近世・近代の陶磁器、石篦、石匙などのtool、縄文土器片など整理箱で２箱分得られたが、その出土状況からほとんどが原位置を留めていない２次堆積の所産と考えられる。



第３図　中台４・５遺跡土層柱状図



第４図　中台５遺跡遺構配置図

Ⅴ　中台４遺跡の遺構と遺物

１　竪穴住居跡

ST50（第５図　図版５）

11・12－46・47区、SG1底面から検出された。SG1によって南辺の壁面をのぞいた各壁面が破壊されるが、貼床などの状況から、床面で東西3.8m、南北2.1mの規模をもつ、楕円形プランの竪穴住居跡と推定される。

床面の状況は、上記の範囲において、礫の混入が少なく黒褐色シルトを斑状に含む硬くしまった黄褐色細砂質シルトが検出され、貼床と考えられる。また、床面からは本住居跡に確実にともなう柱穴は検出されなかったが、貼床を囲んで検出されたSK25・SK36・SK38・SK40の各土坑のほか、これらの西に並ぶ４基の小土坑が有機的に関連するとすれば、最大で東西10m、南北４m程度の規模をもった大形竪穴住居跡となる可能性がある。

炉は貼床範囲の中央やや北よりに東西74cm、南北60cmの焼土の広がりが検出された。それを囲むように北に２個、南に１個の長径25cm前後の焼けた石の埋設が確認され、当初は石囲炉であったものと推定された。

SG1の堆積土と思われるものが床面直上まで堆積しているため、本竪穴住居跡に確実にともなう出土遺物は確認できなかった。しかし、隣接するST57の上層や周囲のグリッドから大木８a式に並行する土器片が得られており、推定されるプランなどからも、概ねこの時期の所産と考えられる。

ST49（第６図　図版４）

13～15－47～49区、SG1底面から検出された。SG1によって床面をのぞいた各壁面が破壊されるが、貼床などの状況から、床面で南北3.8m、東西3.3mの規模をもつ、楕円形プランの竪穴住居跡と推定される。

床面の状況は、周囲の地山面には３～50cm大の礫が多量に存在するが、上記の範囲においては礫の混入がほとんどなく、黒褐色シルトを斑状に含む硬くしまった黄褐色細砂質シルトが検出され、貼床と考えられる。また、床面からは本住居跡に確実にともなう柱穴は検出されなかった。

炉（EL37）は貼床範囲の中央南よりに検出された。規模は南北166cm、東西90cmを測り、長軸線はほぼ磁北と一致する。床面を約20cm掘り込んで構築された複式炉である。検出段階で堆積土に長径60cmほどの大形の礫がささり込み、特に東側の石組が大きく破壊されているが、前庭部および燃焼部の区画は概ね把握が可能である。土器埋設部の周囲は比較的遺存状態が良く、床面を約８cm掘り込んで径５～20cmの扁平な礫を主体に敷き詰められている。いずれの部位も礫の被熱が顕著である。

SG1の堆積土と思われるものが床面直上まで堆積しているため、本竪穴住居跡に確実にともなう出土遺物は複式炉の埋設土器（第18図１　図版29－１）の１点のみである。大木10式期に並行する浅鉢形土器で外面が著しく被熱している。

ST51（第11図　図版6・7）

8～10－49・50区、SG1底面から検出された。崖面の侵蝕によって北半部分を失うが、残存部分からその規模および平面形は、直径約4.2mの円形プランの竪穴住居跡と推定される。

壁の立上がりは急であり、確認面から最大で30cm掘り込んだところを床面としている。床面の状況は細かな凹凸が認められるもののほぼ平坦であり、地山の風化礫が露出した面を直接利用しており、貼床は確認されなかった。また、床面からは本住居跡に確実にともなう柱穴は検出されなかった。

炉（EL48）は中央北よりに検出された。土器埋設部以外は侵蝕の影響で失われ、残存部分も地滑り状に崖側に若干ずり落ちているが、南北160cm、東西70cm程度の規模をもつ複式炉と推定される。石組が残存する部分の規模は南北65cm、東西58cmを測り、長軸線は北西方向にやや振れている。土器埋設部南の石組は、長径20～30cmの礫を交互に「入」字状に3～4列並べている。礫の被熱は顕著である。

埋設土器（第18図2・3、第21図1～3　図版30－1・2、47－1）は3個体の深鉢形土器によって構成されている。このうち中央に埋設された第18図3の外面の被熱がもっとも顕著であった。これらの出土遺物から本竪穴住居跡は大木10式期の所産と考えられる。

ST57（第7・8図　図版8・9）

11～14－40～43区で検出された。検出面は礫の混入がほとんどない褐色細砂質シルトである。規模および平面形は、東西5.9m、南北5.6mのほぼ円形プランの竪穴住居跡である。

壁面は堆積土と地山との区別が不明瞭な部分も存在したが、その立上がりは急であり、確認面から30～50cm掘り込んだところを床面としている。

床面は若干の起伏が認められるがほぼ平坦である。黒褐色シルトの濁りがある硬くしまった暗黄褐色細砂質シルトがほぼ床全体で検出され貼床と考えられる。床面からは18基の柱穴とみられるピットが検出された。このうちEP89・93・81の3基が本住居跡にともなう主柱穴と考えられる。また、SK61は本竪穴住居跡との重複関係が判然とせず、遺構因子となる可能性がある。EP92は、貼床の下に設けられたピットで、内部に第24図3の深鉢形土器が埋設されていた。

炉（EL78）は中央西よりに検出された。規模は東西251cm、南北134cm、床面からの深さが前庭部で35cm、燃焼部で42cmを測る複式炉である。なお、長軸長はSK61を組み入れれば396cmとなる。軸線は東南東－西北西となる。石組は長径10～30cmの円礫を主体に整然と配置される。前庭部には燃焼部との境界付近の側壁に石組があるほかは素掘りの状態で、中央に直径20cm、深さ25cmのピットが1基検出された。燃焼部は礫の配置によって2室に仕切られている。土器埋設部との境界は長径45cmの大形の礫によって仕切られる。埋設土器は中央に大形の深鉢、その外側に小形のものが使用され、不完全な複複式炉の形態となる。燃焼部から土器埋設部にかけての石組は被熱の痕跡が顕著である。

EL78の埋設土器（第22図1、第25図4　図版38－2、42－1）から、本竪穴住居跡の所属時期は大木10式期と考えられる。

ST58（第９・10図　図版10・11）

８～10－42～44区で検出された。検出面は南半が礫の混入がほとんどない褐色細砂質シルトであるが、北半では風化礫を多量に含む。規模および平面形は、東西4.7m、南北4.5mのほぼ円形プランの竪穴住居跡である。西縁辺部をSK104に切られるほか、ST59・ST60と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。

壁面は堆積土と地山との区別が不明瞭な部分も存在したが、その立上がりは急であり、確認面から30～45cm掘り込んだところを床面としている。

床面はほぼ平坦であるが、南西辺付近は約５cm段状に高くなっている。黒褐色シルトの濁りがある硬くしまった黄褐色粘土質シルトがほぼ床全体で検出され貼床と考えられる。床面からは16基の柱穴とみられるピットが検出された。このうちEP109・103・107の３基が本住居跡にともなう主柱穴と考えられる。また、北東および南東辺には周溝とみられる溝跡が検出されている。

炉（EL102）は中央西よりに検出された。規模は東西233cm、南北117cm、床面からの深さが前庭部で24cm、燃焼部で38cmを測る複式炉である。軸線は東北東－西南西となる。石組は長径10～30cmの円礫、角礫を主体に整然と配置される。前庭部には、側壁に大形の扁平な礫を使用し、床面は素掘りの状態となる。中央に長径40cm、深さ25cmの不整形および直径12cm、深さ14cmの半円形のピットが各１基検出された。燃焼部と土器埋設部との境界は長径15cm前後の角礫を主体に精緻に組み上げて仕切られる。埋設土器の周辺は、直径15cm前後の円礫が主体となって敷き詰められる。燃焼部から土器埋設部にかけての石組は被熱の痕跡が顕著である。

EL102の埋設土器（第35図１　図版33－１）から、本竪穴住居跡の所属時期は大木10式期と考えられる。

ST59（第９・10図　図版12）

７・８－43・44区で検出された。検出面は褐色細砂質シルトである。規模および平面形は不明である。SK104に切られるほか、ST58・ST60と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。床面も判然としないがSK104に壊された複式炉（EL105）が検出された。燃焼部のみの検出であるが、長さ82cm、幅92cm、深さ20cmを測る。燃焼部の石組は被熱の痕跡が顕著である。SK104の方に前庭部、崖側に土器埋設部をもつものと考えられるが、プランの大半は侵食され、また床面も直下まで削平されたものと推測される。所属時期は大木10式期と考えられる。

ST60（第９・10図　図版13）

７・８－44・45区で検出された。検出面は褐色細砂質シルトであるが、風化礫をやや多く含む。全体に削平を受けるが、規模および平面形は、直径４mのほぼ円形プランの竪穴住居跡と推測される。ST58・ST59と重複するが新旧関係は不明である。

壁面は北辺部分で僅かにその立上がりが検出された。床面の大半が削平されているとみられる。床面から柱穴などは検出されなかった。

炉（EL106）は南西辺に検出された。規模は東西88cm、南北77cm、床面からの深さは燃焼部で５cmを測る。軸線は東北東－西南西となる。前庭部は検出されず、燃焼部と土器埋設部との

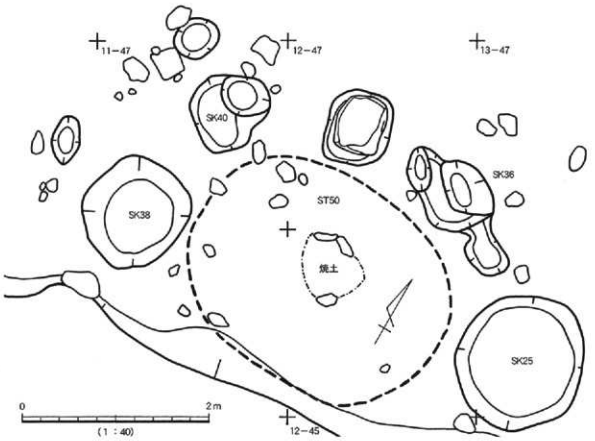
境界は長径20cmの扁平な礫をもって仕切られる。埋設土器の周辺には石組はなく、炉の上部も削平をうけているものと推測される。燃焼部の石組および埋設土器は被熱の痕跡が顕著である。EL106の埋設土器（第40図２　図版38－１）から、本竪穴住居跡の所属時期は大木10式期と考えられる。

ST54（第12図　図版14）

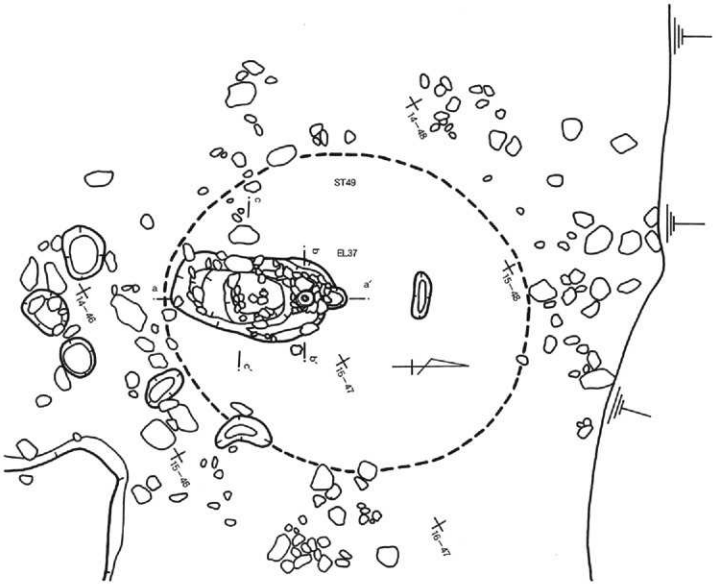
17・18－34～36区で検出された。検出面は礫および風化礫が多量に混入する褐色細砂質シルトである。規模および平面形は、東西3.8m、南北3.2mの楕円形プランの竪穴住居跡である。東側に張り出しが検出されたが攪乱の可能性が高い。

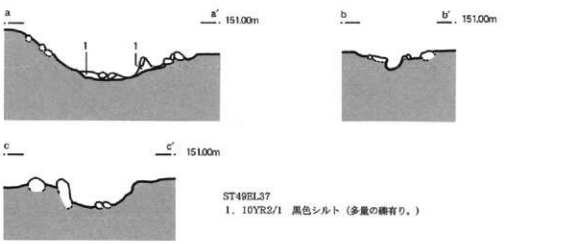
壁の立上がりは西辺を除いて急であり、床面は確認面から約50cm掘り込まれている。床面にはかなり起伏が認められるほか、地山の礫も多量に露出しており、貼床は認められない。床面からは壁面に沿って11基の壁柱穴とみられるピットが検出された。炉（EL67）は床面中央南よりに検出された。規模は南北96cm、東西50cm、楕円形に床面を若干掘り込んだ地床炉である。

堆積土内からは、第41図１に掲載した深鉢形土器が出土した。細い撚糸文の縦位施文や、器形の特徴から縄文時代後期前葉に所属するものとみられる。また、前記した竪穴住居跡との構造的な違いからも、本竪穴住居跡の所属時期は後期前葉と考えられる。



第５図　ST50

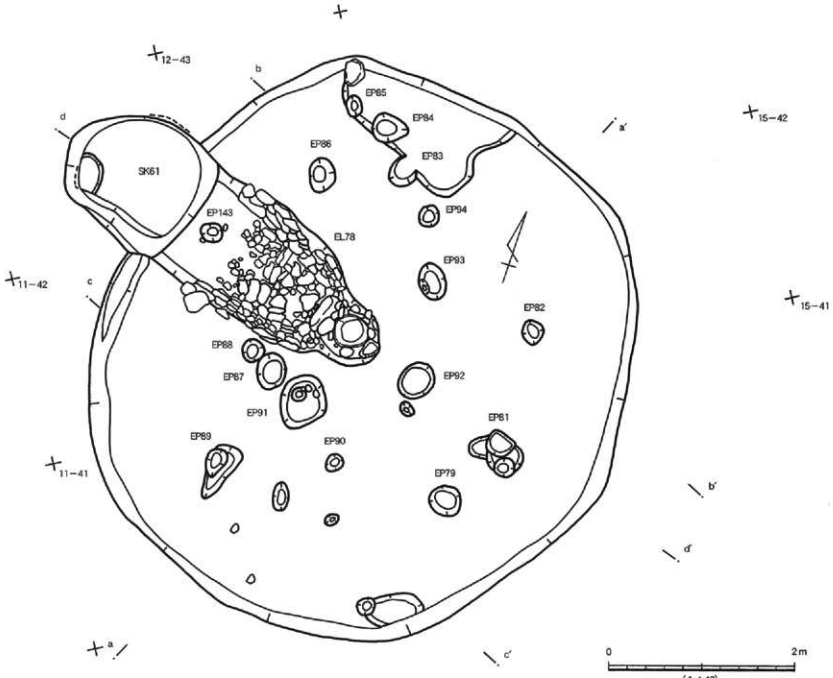




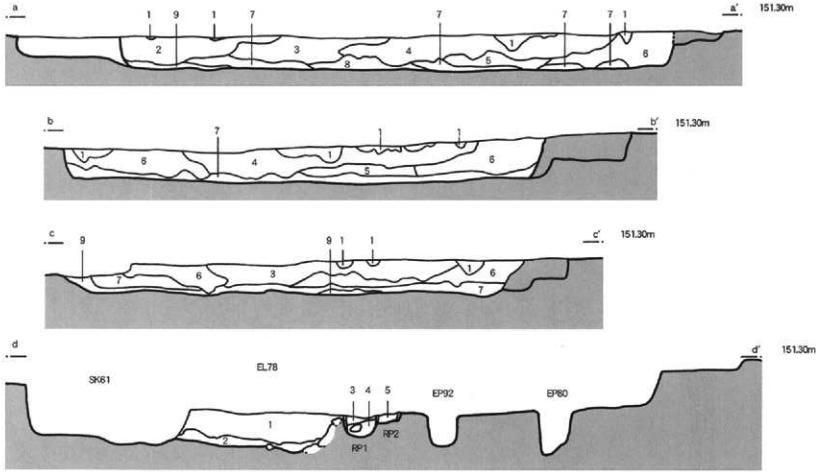
ST49EL37
1．10YR2/1　黒色シルト（多量の礫有り．）

0　2m
(1：40)

第６図　ST49


12-43
15-42
11-42
15-41
11-41
SK61
EP143
EL78
EP86
EP85
EP84
EP83
EP94
EP93
EP82
EP88
EP87
EP92
EP91
EP89
EP90
EP79
EP81
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
0
2m
(1 : 40)

第7図　ST57 (1)

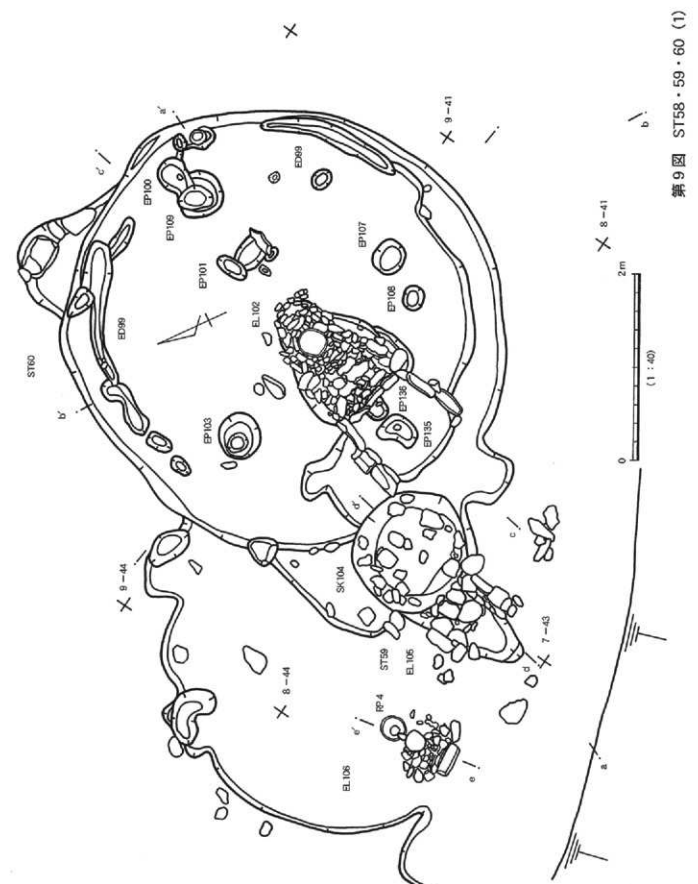


ST57
1．2.5Y3/1黒褐色砂質シルト（炭化物有り。酸化している。）
2．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR3/3暗褐色砂質シルトが斑状に混入。）
3．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR2/1黒色砂質シルトが横い斑状に混入。）
4．10YR2/1黒色シルト（炭化物・土器片有り。）
5．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR3/3暗褐色砂質シルトが斑状に混入。炭化物多く混入。）
6．10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルトが斑状および縞状に混入。）
7．N2/0黒色シルト（10YR1.7/1黒色砂質シルトと10YR3/3暗褐色砂質シルトが、斑状に混入。炭化物が多く混入。）
8．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR2/1黒色砂質シルトが斑状に混入。炭化物多く混入。）
9．10YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルト

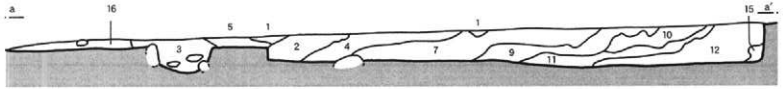
EL78
1．10YR3/2黒褐色シルト（10YR2/1黒色シルトが大きな斑状に混入し、10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトが西側部に帯状に混入。）
2．N2/0黒色シルト（10YR3/1黒褐色シルトが少量混入。）
3．10YR3/2黒褐色砂質シルト（炭化物塊混入。）
4．N2/0黒色シルト（炭化物塊混入。）
5．10YR3/2黒褐色砂質シルト（7.5YR4/3褐色微砂質シルトが斑状に混入。上層部に焼土有り。）

0　2m
（1：40）

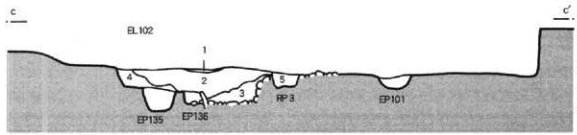
第8図　ST57（2）



第９図　ST58・59・60 (1)

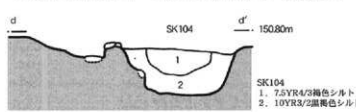


1．7.5YR3/1黒褐色シルト（7.5YR4/3褐色シルトが斑状に混入。）
2．7.5YR4/3褐色シルト
3．10YR3/2黒褐色シルト
4．10YR3/2黒褐色シルト（3より明るい。）
5．7.5YR4/4褐色微砂質シルト
6．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが少量混入。）
7．10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルトが帯状に一部混入し、10YR3/2黒褐色シルトが薄い斑状に全体に混入。）
8．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（風化礫が多く混入。）
9．10YR3/2黒褐色シルト（10YR2/1黒色シルトが帯状および薄い斑状に混入。）
10．10YR4/4褐色砂質シルト（風化礫が全体に混入。）
11．10YR4/2灰黄褐色シルト
12．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
13．10YR4/2にぶい黄褐色砂質シルト（10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが薄い斑状に両端部に混入。）
14．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（13よりやや暗い。炭化物有り。）
15．10YR5/4にぶい黄褐色シルト（風化礫が多く混入。）
16．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR4/4褐色砂質シルトが斑状に混入。）
17．10YR4/3にぶい黄褐色微砂質シルト（10YR3/3暗褐色微砂質シルトが上層部に混入。）

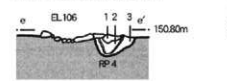


EP135：10YR3/2黒褐色シルト　EP136：10YR3/1黒褐色シルト（炭化物有り。）　EP101：10YR4/3にぶい黄褐色シルト

EL102
1．10YR4/4褐色微砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色微砂質シルトが斑状に混入。）
2．10YR3/2黒褐色シルト（10YR2/2黒褐色シルトが斑状に混入。鉄化物・風化礫が全体に混入。土器片・石器片有り。）
3．10YR4/3にぶい黄褐色シルト
4．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（3よりやや明るい。）
5．10YR4/4褐色砂質シルト（N2/0黒色シルトが下層部に混入。）



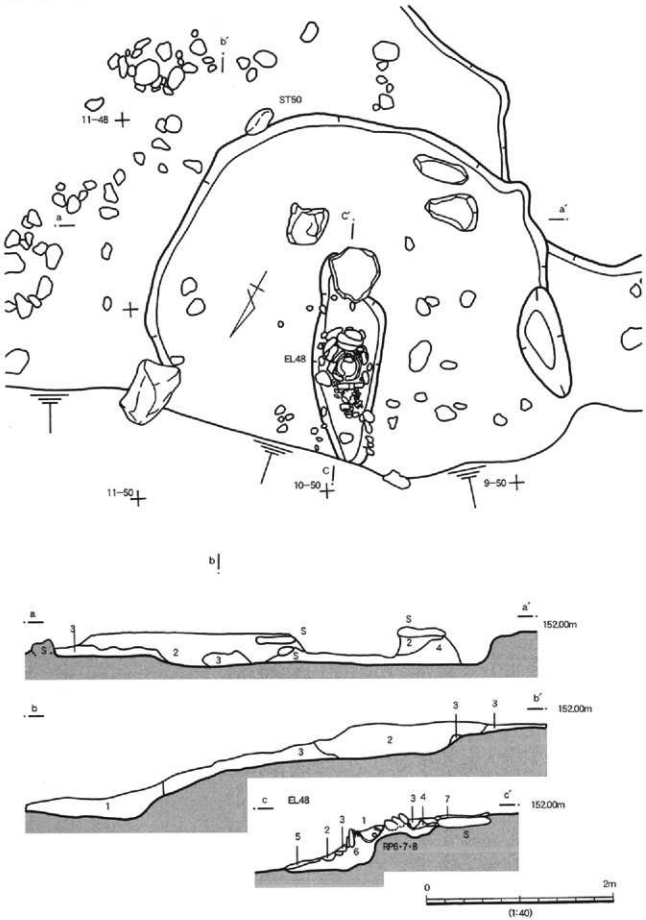
SK104
1．7.5YR4/3褐色シルト
2．10YR3/2黒褐色シルト



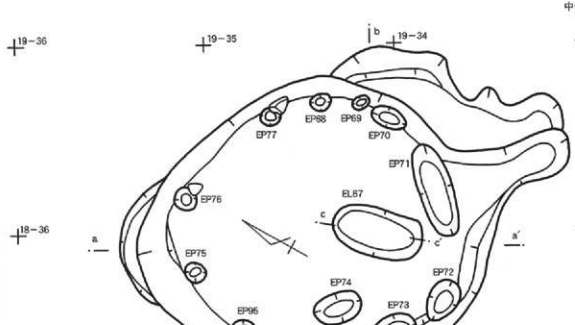
EL105
1．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトが、混じった塊状に混入。）
2．N2/0黒色シルト
3．10YR4/2灰黄褐色シルト（10YR5/4にぶい黄褐色シルトが塊状に一部混入。

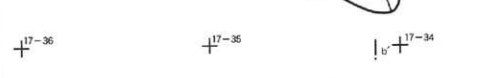
0　2m
（1：40）

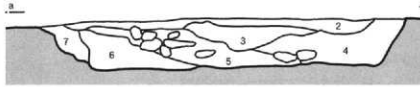
第10図　ST58・59・60（2）



第11図　ST51







EL48
1．10YR3/3暗褐色砂質シルト（2/0黒色砂質シルトが土器底部直上に塊状に混入。）
2．10YR3/2黒褐色シルト
3．10YR3/2黒褐色砂質シルト（2より明るい。）
4．10YR4/4褐色シルト（風化礫混入。）
5．10YR3/1黒褐色シルト
6．10YR4/2灰黄褐色シルト（10YR4/4褐色シルトが塊状に少量混入。2～5cm大の礫が多量に混入。）
7．10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（固化している。）

EL67
1．10YR3/2黒褐色砂質シルト
2．7.5YR4/4褐色砂質シルト
3．10YR4/4褐色砂質シルト

ST54
1．10YR3/1黒褐色シルト（下層部が赤褐色に酸化している。）
2．10YR3/4暗褐色シルト
3．10YR3/2黒褐色シルト
4．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（小風化礫が全体に混入。）
5．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（4よりやや明るい。炭化物・大礫有り。）
6．10YR4/3にぶい黄褐色シルト質砂（5よりやや明るい。土器片・大礫・風化礫有り。）
7．10YR4/3にぶい黄褐色シルト質礫砂（小礫・風化礫有り。）

0　2m
（1：40）

ST51
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR3/3暗褐色砂質シルトが斑状に混入。）
2．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR4/4褐色砂質シルトが塊状に一部混入。炭化物有り。）
3．10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR4/4褐色砂質シルトが斑状に混入。）
4．10YR3/2黒褐色シルト（10YR4/4褐色砂質シルトが斑状に混入。）

第12図　ST54

2　河川跡（第13図　図版15・16）

河川跡（SG1）は、調査区北半の８～34－28～50区内で検出された。ほぼ東西方向に直線的な流路をとる。検出面での幅は東端付近で約６m、西端付近で約14mと下流に向かって川幅を増す。深さは東半で40cm前後を測るが、下流に向かうにしたがって浅くなり、西端では12cm前後となる。

堆積土中には、各層序において10～60cm大の礫が多量に包含されている。東端付近の30～34－28～34区付近では大形の礫の集中が顕著であり、特に南岸から中央にかけて密集して検出された。ここより西に下るにしたがって、礫の混入は減少する。遺物はSG1全体で整理箱に10箱が得られた。その平面分布は各グリッドごとに偏りは認められず、また垂直分布でも各層序で出土し、間層の存在や上層と下層における年代差などは観察されなかったが、最下層付近では遺物の出土は稀となる。縄文土器は小破片がほとんどで、内外面や割面が磨滅しているものが目立つ。所属時期が明瞭にわかるものでは中期前葉から後期前葉のものが主体となる。なお、SG1の西端部分では、ST49・ST50・ST51やSK25他の土坑群を削平するが、これは氾濫または鉄砲水などの所産とみられ、本来的な流路はそれらの東側にあるものと考えられる。また、南に隣接するST57・ST58の堆積土上層からは、それらの所属年代より新しい遺物が相当数得られている。これらは土層の色調、質ともにSG1のそれと類似することから、SG1の氾濫を起源とする堆積土の可能性が高い。特にST58からは縄文時代晩期の大洞A式期の土器片（図版45－8）が出土しており、SG1の氾濫時期の査証となる。

3　土坑（第14図～第17図　図版19～26）

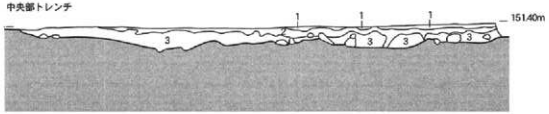
土坑は、中台４遺跡で95基検出している。分布は概して調査区の南半域に多く、約50基ほどが集中する土坑群になっている。一方、北半域に所在する土坑は、SG1河川跡の底面および氾濫時の流域と考えられる部分で検出されたものと、ST57竪穴住居跡の東側に散在しているものの２つに分けられる。形態として、検出時の平面形が円形または楕円形で、深さは30cm前後というものが最も多く、特に小さい土坑が目立つのは、SG1の東西中央部分の底面と、南域土坑群の中程である。以下に北半域の２つの場所に位置する土坑と、南半域の土坑群について、それぞれの大まかな様相とその中の特徴的な土坑について述べる。

北半域のSG1東西中央部分の底面から検出された土坑は、ほとんどが円形または楕円形で浅い。覆土はすべて単層で、遺物は縄文土器片がわずかに出土するものの、どれも小さな破片である。このエリアで見つかっている土坑については、SG1の川底の落ち込みや部分的な凹みの可能性が考えられるので、明らかに土坑として造られたものは少ないと思われる。氾濫時流域と見られるSG1の北端部分で検出された土坑は、比較的大きい平面形をもち円形のものが多い。土坑底面は風化礫層にあたっており、シルト質の覆土にも大小の礫および風化礫が多量に混入している。このエリアは、SG1の旧河川が洪水や鉄砲水など、氾濫によって一時的に水が流れたところと考えられ、ここに造られていた土坑もそのときに廃棄されたと思われる。次に、SG1と位置的に関連するいくつかの土坑ついて見てみる。

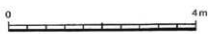
調査区東壁面

1．10YR3/1　黒褐色砂質シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルトが上層部に混入。こぶし大の礫と粒状の風化礫が全体に混入。）
2．10YR3/3　暗褐色砂質シルト（粒状の風化礫が全体に混入。）
3．10YR2/2　黒褐色砂質シルト（10YR3/3暗褐色砂質シルトと10YR2/3黒褐色砂質シルトが、縞状に混入。）
4．10YR3/3　暗褐色砂質シルト（10YR4/4褐色砂質シルトが斑状に混入。）
5．10YR3/2　黒褐色砂質シルト（10YR3/3暗褐色砂質シルトが斑状に混入。）
6．10YR2/3　黒褐色砂質シルト
7．7.5YR3/1　黒褐色砂質シルト（撹乱）

中央部トレンチ



1．10YR3/3　暗褐色砂質シルト（7.5YR4/6褐色砂質シルトが斑状に混入。）
2．10YR2/2　黒褐色砂質シルト（10YR2/3黒褐色砂質シルトが斑状に混入。5cm～こぶし大の礫・炭化物・土器片有り。）
3．10YR3/3　暗褐色砂質シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルトが淡い斑状に少量混入。）



第13図　SG1土層断面図

SK11（第14図）からは石鏃が1点出土しているが、この土坑の形成に由来する遺物ではないと考える。覆土に炭化物が多く混入している。

SK12（第14図）からは焼けた石が数個、底面から一方の壁際に検出されたが、ほかに目立った遺物もなく詳細はわからない。しかし、SG1底面から検出された土坑の中で、確実にSG1より遡る土坑である。

SK25（第14図）では真ん中に直径70～80cmの礫が検出された。覆土には拳大よりも大きい礫が多量に含まれており、氾濫時に流れ込んだ礫と見られる。土器片が110点出土している。

北半域のST57東側で検出された土坑のうち、安定した暗褐色のシルト層で検出された土坑については、平面が不整形や、やや楕円形といったものが多く見られ、いずれも遺物は少量の土器片・石器剥片以外出ていない。SK30とSK41など切りあいの不明確なものや、SK31（第15図）やSK33など壁面の土がはっきりしないものもあり、覆土と地山の土の判断が難しいエリアである。しかし、そのさらに東にある、ST54竪穴住居跡周辺の礫層エリアで検出された土坑については、前述のSG1北端部で検出されたものと類似するところが多く、覆土に多量の礫を含んだ比較的深い土坑であった。形態的にも特徴のあるものが検出されている。次に、礫層で検出された土坑のいくつかを紹介する。

SK43（第15図）は、覆土が3層に分かれる。不整形で、壁は底面から外反して立ち上がる。石鏃が3点と土器片が60点出土している。

SK55・SK56（第16図）は共に壁が内弯して立ち上がる袋状の土坑である。

南半域の土坑群が検出された16～20－15～22は安定したシルト層が主体で、それが帯状に広がっている。おそらくこのエリアは旧河川の跡であると見られ、河川廃棄後に堆積したシルト層にたくさんの土坑を造ったと考えられる。形態は様々で、大きい土坑はエリアの南側部分に集まっている。次に、そのいくつかをあげる。

SK112・SK124・SK137（第17図）は、平面形がひとつの大きな不整形であった。SK112からは丸底の小型の鉢が出土している。明瞭な平面形が確認できず、SK124と重複していると推定した。SK124とSK137は断面確認の結果、重ならないことがわかった。SK124からは土器片が105点出土している。

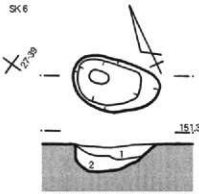
SK128（第17図）は、土層断面にアタリらしきものが確認された唯一の柱穴である。

SK129（第17図）は、底面および壁面が礫層で、一個体になる土器が出土したほか、土器片が119点出土している。貯蔵穴と見られる。

以上が分布するエリアごとに見た、土坑の様相である。

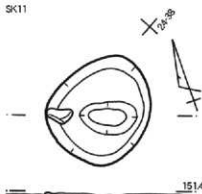
次に、特徴的だったSK53（第16図）について紹介する。SK53は、今回の調査で検出した土坑の中では最も大きい。平面形は南北に長い楕円形である。先に西側半分を精査したのだが、西壁の立ち上がりがはっきりしているのに対し、東壁の方は擂り鉢状の急斜面になり、底面形の長軸から見ると、西側の2倍も大きく開いて立ち上がる。覆土も西部分が地山土とはっきり分かれているのに対し、東部分は地山土がブロック状に混入しており、異なった様相であった。これは東壁部分が崩壊したものと思われる。

SK6



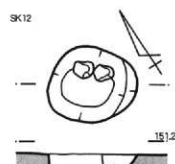
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR2/1黒色シルトが斑状に混入。）
2．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR3/3暗褐色砂質シルトが斑状に混入。）

SK11



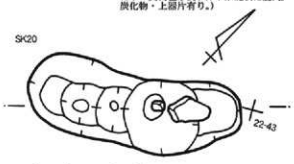
1．10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトが斑状に混入。炭化物・上器片有り。）

SK12



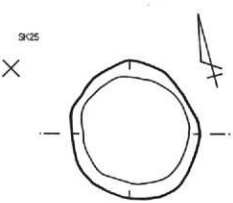
1．10YR4/4褐色砂質シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルトが疎い斑状に混入。）
2．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR3/3暗褐色砂質シルトが疎い斑状に混入。）

SK20

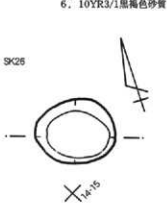


1．10YR3/1黒褐色シルト（10YR4/2灰黄褐色シルトが斑状に混入。）
2．10YR3/3暗褐色シルト（10YR3/2黒褐色シルトが疎い斑状に混入。炭化物有り。）
3．10YR3/2黒褐色シルト
4．10YR3/2黒褐色シルト（3層より黒みが強い）
5．10YR3/3暗褐色シルト（10YR4/3にぶい黄褐色シルトが斑状に少量ずつ混入。）
6．10YR3/1黒褐色砂質シルト（1層より灰色みが強い）

SK25

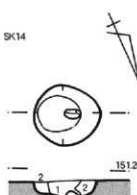


SK26

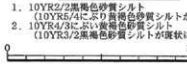


SK25　1．10YR3/2黒褐色シルト（多量の礫有り。）
SK26　1．10YR3/2黒褐色砂質シルト（炭化物・15cm大の礫有り。）

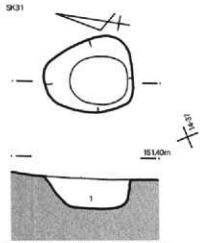
SK14



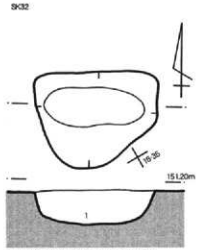
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトが少量混入。）
2．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルトが斑状に混入。）



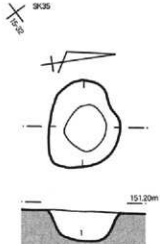
第14図　土坑（1）



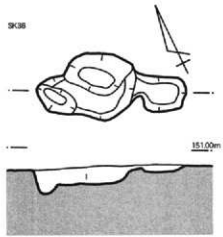
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR4/4褐色
砂質シルトが2cm大の塊状に混入。炭化物有り。）



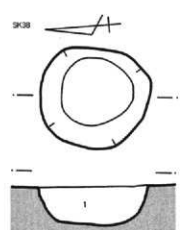
1．10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR5/4
にぶい黄褐色砂質シルト1cm大の塊状に一部混入。）



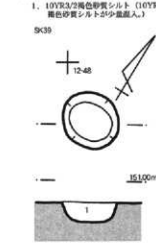
1．10YR3/2褐色砂質シルト（10YR4/4
褐色砂質シルトが少量混入。）



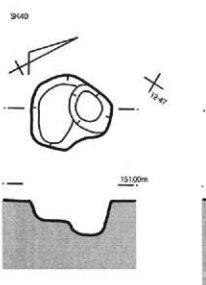
1．10YR3/3暗褐色シルト

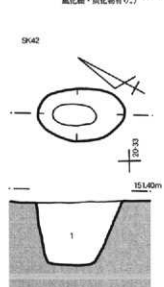


1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR4/4褐色
砂質シルトが10cm大の塊状に一部混入。
風化礫・炭化物有り。）

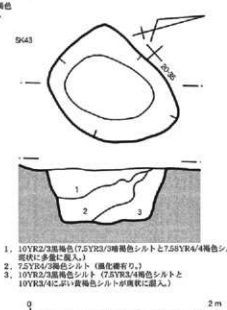


1．10YR2/3暗褐色砂質シルト





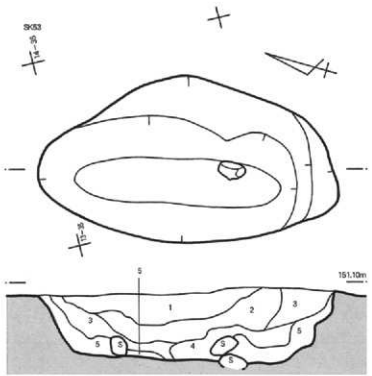
1．10YR2/2黒褐色砂質シルト（10YR4/4褐色砂質シルトが塊状に混入。炭化物有り。）



1．10YR2/3黒褐色（7.5YR3/3暗褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトが
斑状に多量に混入。）
2．7.5YR4/3褐色シルト（風化礫有り。）
3．10YR2/3黒褐色シルト（7.5YR3/4褐色シルトと
10YR3/4にぶい黄褐色シルトが斑状に混入。）

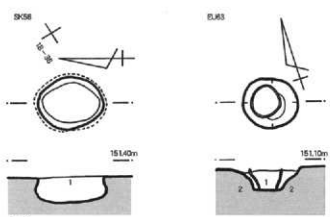
0　2m
（1：40）

第15図　土坑（2）



SK53
1．10YR2/3黒褐色シルト
（10YR2/2黒褐色シルトが少量混入。）
2．10YR3/3暗褐色シルト
（10YR4/3にぶい黄褐色シルトが斑状に、
10YR4/4褐色シルトが礫点状に混入。）
3．10YR3/2黒褐色シルト
4．10YR2/2黒褐色シルト
（10YR3/2黒褐色シルトが強い斑状に混入。）
5．10YR4/4褐色砂質シルト
（10YR3/2黒褐色シルトが大きな斑状に混入。）

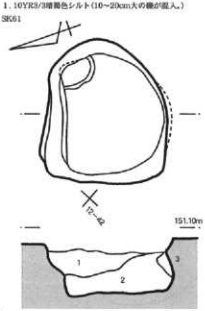
SK55
1．10YR3/3暗褐色シルト（10～20cm大の礫が混入。）

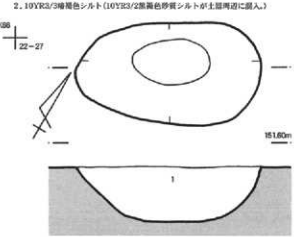


SK56
1．10YR3/3暗褐色シルト（10～20cm大の礫が混入。）

EU63
1．10YR3/2黒褐色砂質シルト
2．10YR3/3暗褐色シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルトが土壁周辺に混入。）

SK61

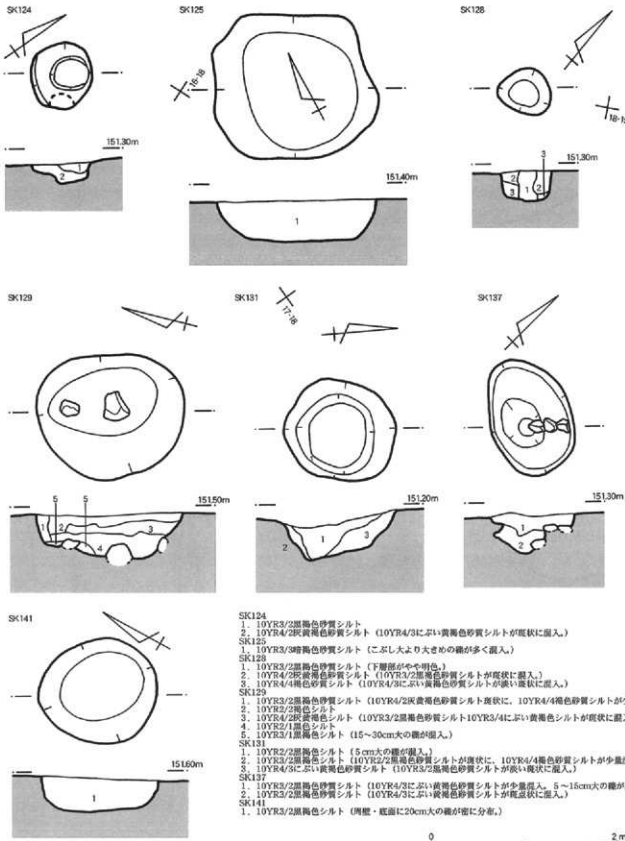




SK96
1．10YR3/3暗褐色シルト
（10YR4/4褐色シルトが上部に斑状に混入。こぶし大以上の礫混入。）
SK61
1．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色砂が10cm大の斑状に混入。焼化礫有り。）
2．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（10YR4/4褐色砂質シルトが薄い斑状に一部混入。土器片・焼化礫有り。）
3．10YR3/4にぶい黄褐色砂質シルト（地山漸移土？）

0　2m
（1：40）

第16図　土坑（3）



SK124
1．10YR3/2黒褐色砂質シルト
2．10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトが斑状に混入。）
SK125
1．10YR3/3暗褐色砂質シルト（こぶし大より大きめの礫が多く混入。）
SK128
1．10YR3/2黒褐色砂質シルト（下層部がやや明色。）
2．10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルトが斑状に混入。）
3．10YR4/4褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトが多い斑状に混入。）
SK129
1．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR4/2灰黄褐色砂質シルト斑状に，10YR4/4褐色砂質シルトが少量混入。）
2．10YR2/2黒色シルト
3．10YR4/2灰黄褐色シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルト10YR3/4にぶい黄褐色シルトが斑状に混入。）
4．10YR2/1黒色シルト
5．10YR3/1黒褐色シルト（15～30cm大の礫が混入。）
SK131
1．10YR2/2黒褐色シルト（5cm大の礫が混入。）
2．10YR3/2黒褐色シルト（10YR2/2黒褐色砂質シルトが斑状に，10YR4/4褐色砂質シルトが少量混入。）
3．10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（10YR3/2黒褐色砂質シルトが炭い斑状に混入。）
SK137
1．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトが少量混入。5～15cm大の礫が混入。）
2．10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトが斑状に混入。）
SK141
1．10YR3/2黒褐色シルト（周壁・底面に20cm大の礫が密に分布。）

第17図　土坑（4）

挿図	図版	遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形態	備考
		SK 2	35－34	1.66	0.63	0.23	楕円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	SG I 北岸砂礫層で検出 SK 3 との切り合い不明
		SK 3	34・35－34	1.66	0.52	0.28	楕円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	SG I 北岸砂礫層で検出 SK 2 との切り合い不明
		SK 4	32－36・37	1.08	0.61	0.38	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	SG I 北岸砂礫層で検出 暗褐色砂質シルトを基調とする
		SK 5	26・27－41	0.50	0.43	0.33	円形で一部分だけ深い	SG I 底面で検出　木根痕か 暗褐色砂質シルトを基調とする
14		SK 6	27－39	0.91	0.64	0.31	楕円形で一方は緩やかに落ち込み他方は少し急に落ち込む 底面は平坦	SG I 底面で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK 7	29－40	0.43	0.34	0.18	楕円形で底面は緩やかな半球状	SG I 北岸砂礫層で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK 8	23－40	0.81	0.49	0.18	不整形で底面は平坦	SG I 底面で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK 9	23－40	0.41	0.40	0.21	円形で底面は半球状	SG I 底面で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK10	24－26－38・39	4.34	0.67	0.31	不整形で底面は緩ね平坦だがピット状の凹みが数カ所ある	SG I 底面で検出 川底の窪みか
14		SK11	23－38・39	0.67	1.00	0.15	不整円形で底面レンズ状	SG I 南岸シルト層で検出 礫が混入
14	19	SK12	23・24－43	0.88	0.81	0.64	円形で円筒状に掘り込まれ底面は平坦	SG I 底面で検出 焼石が一方の壁際からまとまって検出
		SK13	26－37	0.69	0.40	0.10	楕円形で底面は平坦	SG I 底面で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
14		SK14	21・22－40・41	0.70	0.63	0.17	円形で底面は平坦	SG I 底面で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK15	22－42・43	0.81	0.71	0.15	隅丸方形で底面は平坦	SG I 底面で検出　こぶし大の礫が混入 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK16	25－43	0.56	0.36	0.21	楕円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	SG I 北岸シルト層で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK17	24－43	0.28	0.25	0.17	円形で底面には15cm大の礫有り	SG I 底面で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK18	22－45	0.55	0.39	0.17	楕円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
	19	SK19	20－22－45・46	4.44	3.11	0.72	不整形で多量の風化礫が混入	砂礫層で検出 風倒木痕か
14		SK20	20・21－43・44	2.28	0.77	0.25	長楕円形で緩やかに落ち込み底面は凹凸	SG I 底面で検出
		SK21	8・9－46・47	2.92	1.10	0.50	長楕円形で急に落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出　20cm大の礫が混入 暗褐色シルトを基調とする
		SK22	8－47・48	0.99	0.86	0.26	方形で緩やかに落ち込み底面に30cm大の礫が混入	砂礫層で検出 暗褐色シルトを基調とする
		SK23	6・7－48・49	1.82	1.08	0.30	楕円形で急に落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK24	5－7－45－47	3.08	2.54	0.32	やや円形で検出されたが全体形は不明 底面は平坦	調査区西端部の砂礫層で検出 暗褐色シルトを基調とする
14		SK25	12・13－45・46	1.47	1.32	0.28	円形で少し急に落ち底面は平坦　中央に50cm大の礫有り	ST50近辺砂礫層で検出 覆土にこぶし大より大きい礫が混入
14		SK26	14－46	0.83	0.67	0.34	円形で急に落ち込み底面は平坦	ST50近辺砂礫層で検出
		SK27	14－46	0.42	0.38	0.15	楕円形で底面は半球状	ST50近辺砂礫層で検出 黄褐色砂質シルトを基調とする
		SK28	15－38・39	1.20	0.82	0.54	不整形で底面にピット状の落ち込み有り	シルト層で検出 暗褐色シルトを基調とする
		SK29	16・17－40	1.78	1.22	0.21	不整形で急に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK30	16－39	1.23	0.97	0.22	楕円形と複隅　底面は平坦	シルト層で検出 SK41との切り合い不明
15		SK31	14－38	0.93	0.78	0.32	不整形で一方は緩やか他方は急に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
15		SK32	15・16－36	1.29	1.01	0.36	不整形で少し急に落ちこみ底面は平坦	砂礫層で検出
		SK33	14・15－35・36	0.97	0.72	0.13	不整形で底面はレンズ状	砂礫層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK34	15－33・34		0.48	0.07	楕円形で底面はレンズ状	砂礫層で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする

表1　土坑観察表（1）

挿図	図版	遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形態	備考
15		SK 35	15－32・33	0.97	0.76	0.30	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出
15		SK 36	12・13－48・47	1.60	0.68	0.25	不整形で緩やかに落ち込み底面は一方が平坦他方がレンズ状	ST50近辺砂礫層で検出
15		SK 38	10・11－46・47	1.17	1.05	0.40	円形で少し急に落ち込み底面は平坦	ST50近辺砂礫層で検出
15		SK 39	11・12－48	0.62	0.58	0.20	円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	ST50近辺砂礫層で検出
15		SK 40	11－47	0.83	0.80	0.35	不整形で底面は一方が深く掘りこまれる	ST50近辺砂礫層で検出
		SK 41	16－39・40	0.80	0.70	0.22	楕円形と推定　底面は平坦	シルト層で検出
16		SK 42	20－34	0.90	0.56	0.67	楕円形で少し急に落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出
16	21	SK 43	19・20－35	1.31	1.02	0.56	不整形で少し急に落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出
		SK 44	15・16－40	0.60	0.38	0.30	楕円形で少し急に落ち込み底面は平坦覆土は黒褐色シルトを基調とする	シルト層で検出
		SK 45	13・14－39・40	0.94	0.81	0.32	円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	シルト層で検出 覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK 46	24－31・32	0.87	0.76	0.19	円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	大礫の多い砂礫層で検出 覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする
		SK 47	25・26－31・32	1.33	0.95	0.34	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	大礫の多い砂礫層で検出 覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK 52	11－49	0.85	0.79	0.18	円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする
16	22	SK 53	12・13－34－36	3.21	1.76	0.81	楕円形で変則的に落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出
16	23	SK 55	18－36	0.96	0.93	0.52	円形で湾曲して落ち込み底面は平坦袋状土坑	砂礫層で検出
16	22	SK 56	18－36・37	0.75	0.68	0.27	円形で湾曲して落ち込み底面は平坦袋状土坑	砂礫層で検出
16		SK 61	11・12－42・43	1.52	1.33	0.57	不整形で変則的に落ち込み底面は平坦	ST57北端砂礫層で検出 ST57を切る
		SK 62	10・11－44	2.60	1.37	0.54	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 風倒木攪か
16	18	SK 63	8・9－40	0.60	0.52	0.24	円形で緩やかに落ち込む	シルト層で検出 土器出蔵
		SK 64	12・13－26	0.85	0.79	0.45	円形で少し急に落ち込み底面は半球状	砂礫層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK 65	14・15－21・22	1.49	0.70	0.19	長楕円形で底面は平坦	シルト層で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
16		SK 66	22・23－27・28	1.96	1.07	0.59	楕円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出
		SK 96	31－33－25	3.08	0.97	0.45	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	旧時時上の砂礫層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK 97	18・19－32	0.48	0.46	0.77	円形で円筒状に落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK 98	13－29	0.62	0.50	0.26	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 黄褐色シルトを基調とする
		SK104	7・8－43・44	1.32	1.16	0.37	円形で半球状に落ち込む	ST58西端砂礫層で検出 ST58・59・60を切る
		SK111	17－20	0.43	0.40	0.25	円形で緩やかに落ち込み底面は半球状	シルト層で検出　土坑群 黄褐色砂質シルトを基調とする
		SK112	16・17－18	0.26	0.15	0.10	円形と推定する	シルト層で検出　土坑群
		SK113	16・17－20	0.45	0.31	0.32	楕円形で少し急に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 黒褐色シルトを基調とする
		SK114	17・18－20・21	0.93	0.76	0.51	円形で少し急に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 黄褐色砂質シルトを基調とする
		SK115	19－18	0.58	0.38	0.32	楕円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 暗褐色砂質シルトを基調とする
		SK116	20－17・18	1.11	1.10	0.17	円形で底面はレンズ状	シルト層で検出　土坑群 暗褐色砂質シルトを基調とする
		SK117	19－18	0.42	0.34	0.31	円形で円筒状に掘り込まれる	シルト層で検出　土坑群 暗褐色砂質シルトを基調とする

表2　土坑観察表（2）

挿図	図版	遺構番号	地区	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形態	備考
		SK118	19－19・20	0.56	0.38	0.26	楕円形で少し急に落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出　土坑群 暗褐色砂質シルトを基調とする
		SK119	16－20	0.36	0.24	0.18	楕円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK120	19－17	0.36	0.30	0.32	円形で底面は平坦だが一部分が深い	シルト層で検出　土坑群 暗褐色砂質シルトを基調とする
		SK121	19－18	0.65	0.45	0.28	楕円形で少し急に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 黄褐色砂質シルトを基調とする
		SK122	16・17－21	1.88	0.45	0.34	不整形で緩やかに落ち込み底面は一方が深い	シルト層で検出　土坑群 黒褐色シルトを基調とする
		SK123	16－19	0.58	0.54	0.44	円形で少し急に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 黒褐色シルトを基調とする
17		SK124	16・17－ 18・19	0.71	0.63	0.20	円形で変則的に掘り込まれる	砂礫混シルト層で検出　土坑群 SK112と重なる
17	24	SK125	15・16－18	1.70	1.52	0.44	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫混シルト層で検出　土坑群 暗褐色シルトを基調とする
		SK126	17・18－ 19・20	1.24	1.14	0.37	不整形で急に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 黒褐色砂質シルトを基調とする
		SK127	21・22－14	1.38	0.76	0.39	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫混シルト層で検出　土坑群 黒褐色シルトを基調とする
17		SK128	17－19・20	0.55	0.47	0.31	円形で円筒状に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群
17	25	SK129	22・23－ 14・15	1.54	1.31	0.46	円形で変則的に掘り込まれる	シルト層で検出　土坑群
		SK130	17・18－18	1.01	0.72	0.32	楕円形で少し急に落ち込み底面は平坦	砂礫混シルト層で検出　土坑群 黒褐色シルトを基調とする
17		SK131	17・18－ 18・19	1.16	1.05	0.40	円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫混シルト層で検出　土坑群
		SK132	16・17－21	0.41	0.37	0.20	円形で半球状に掘り込まれる	シルト層で検出　土坑群 黒褐色シルトを基調とする
		SK133	19－19・20	0.73	0.42	0.36	不整形で少し急に落ち込み底面は平坦	砂礫混シルト層で検出　土坑群 暗褐色砂質シルトを基調とする
		SK134	21－16	0.44	0.38	0.25	不整形で少し急に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 暗褐色シルトを基調とする
17	26	SK137	16・17－ 18・19	1.26	0.88	0.43	楕円形で変則的に掘り込まれる	砂礫混シルト層で検出　土坑群 SK112・SK124と隣接
		SK138	16－16・17	1.28	0.80	0.55	不整形で少し急に落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK139	15－18・19	0.64	0.62	0.49	円形で円筒状に落ち込み底面は平坦	シルト層で検出　土坑群 黒褐色シルトを基調とする
		SK140	19－20－22	5.30	1.32	0.78	不整形で変則的に掘り込まれ底面は大きな凹凸が有る	砂礫層で検出 暗褐色砂質シルトを基調とする
17		SK141	25・26－ 12・13	1.24	1.10	0.37	円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出
		SK142	24・25－ 28・29	2.17	1.01	0.32	不整形で緩やかに落ち込み底面に30cm大の礫が有る	砂礫層で検出 黄褐色砂質シルトを基調とする
		SK144	17－18	1.03	0.89	0.61	円形で湾曲して掘り込まれ底面は平坦袋状土坑	砂礫混シルト層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK145	22－18	0.76	0.51	0.13	楕円形で底面はレンズ状	砂礫層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK146	23・24－ 14・15	0.70	0.45	0.21	楕円形で底面は平坦だが中央部が少し深くなる	砂礫層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK147	23－14	0.42	0.40	0.22	円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 黒褐色シルトを基調とする
		SK148	27－15・16	0.83	0.53	0.20	楕円形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 暗褐色砂質シルトを基調とする
		SK149	28－16	0.76	0.62	0.19	不整形で緩やかに落ち込み底面は平坦	砂礫層で検出 暗褐色砂質シルトを基調とする

表3　土坑観察表（3）

4　遺物包含層（図版17）

遺物包含層は、調査区中央の南西部分12～21－30～39区と、同じく南半の12～25－11～21区、および南西から北西の崖面で確認された。以下にそれぞれの概要を述べる。

12～21－30～39区

周辺を砂礫層にはさまれて、やや礫の混入が少ない暗褐色細砂質シルトの広がりがこの区域で検出され、遺物の包含が認められた。包含層の厚さは中央付近で15cm、周辺部で５cm前後と薄くなり消滅する。

遺物は整理箱で８箱が出土し、16～20－32～36区を中心に高い密度で分布する。層序はほぼ１層で礫を多く含むが、間層および層序の上下での出土遺物の差異は認められなかった。出土した縄文土器はほとんどが地文のみ、あるいは胴部に沈線を施文するもので縄文時代後期前葉に所属するものが主体となるとみられる。包含層の下からはST54をはじめフラスコ状土坑となるSK55ならびにSK56が検出されている。

12～25－11～21区

南北を砂礫層にはさまれて、やや礫の混入が少ない黒褐色および暗褐色細砂質シルトの広がりがこの区域で検出され、遺物の包含が認められた。もともとはSG1に並走する旧河川の名残りと考えられる。包含層の厚さは10cm前後を測る。

遺物は整理箱で６箱が出土した。14～19－17～20区を中心に高い密度で分布する。層序はほぼ１層で、間層および層序の上下での出土遺物の差異は認められなかった。出土した縄文土器はほとんどが地文のみ、あるいは胴部に沈線を施文するもので縄文時代後期前葉に所属するものが主体となる。第44図2は14－17区から出土した深鉢形土器の胴部破片である。胴部全体に曲線的な沈線文を施した後期前葉のものとみられる。

包含層の下は褐色細砂質シルトとなり、この面で40基以上の土坑群が検出されている。

南西から北西の崖面

南西から北西の崖面は、特に南西辺において幅１～３mの黒褐色細砂質シルトが帯状に検出され、遺物の包含が確認されたため、いわゆる捨て場遺構の存在を想定して、それらを中心に崖下２m付近まで精査を実施した。

遺物は整理箱で15箱が出土した。これらは、特に沢状の落ち込みとなる南西崖面の中央、９～12－31～38区を中心に高い密度で分布する。この区域では、多量の礫とともに土器片、石器などが流れ込んで堆積した状況を呈する。このほか５～７－41～49区付近でもややまとまった遺物の出土が確認された。しかし、南西崖の南端付近および北西崖の東半部分では遺物の出土が稀であった。

層序は崖面への流れ込みのため複雑な状況をていしているが、間層および各層序の上下での出土遺物の差異は認められなかった。出土した縄文土器はほとんどが地文のみの小破片であるが縄文時代中期末葉から後期前葉に所属するものが主体となる。５～７－41～49区付近および北西崖面では中期末葉の資料が大半を占め、９～12－31～38区付近およびそれ以南では、後期前葉の資料が目立つ。

5　縄文土器（第18図～第46図　図版29～51）

今回の調査で出土した縄文土器は、整理箱にして約50箱を数える。その内訳は、ST57・58を主体として竪穴住居跡から20箱、SG1から７箱、遺物包含層から19箱、土坑などその他の遺構から４箱となっている。これらの所属時期は、竪穴住居跡の集中する調査区北西半部では縄文時代中期、特に末葉のものが主体となり、遺物包含層および土坑群の所在する調査区南西半では後期前葉のものが主体となっている。いずれの時期の資料も器形および文様を敢然に把握し得るものはごく少数である。そのほか縄文時代晩期の土器が若干出土しているが小破片であり遺構内でのまとまりをもたない。

竪穴住居跡内での縄文土器の出土状況では、使用されたまま遺棄されたと考えられるものは、複式炉の埋設土器、ST57EP92の埋設土器がある程度で、堆積土内での状況は、住居が機能を失った後、不要品としてそこに廃棄されたかあるいはSG1の氾濫などを起源として流れ込んだことを物語るものであった。そのほかの遺構内からの遺物の出土状況でも、同一の遺構内から出土した縄文土器についてはある程度の一括性が認められるものの、それを当時の生活様式にかかわる器種のセット関係として把握することは困難である。

以下では、調査区内から出土した縄文土器について、従来の型式学的な研究成果に基づいて時期ごとに概観する。本来ひとつの集落から出土した土器群を理解するためには、器種、器形、施文、そのほかの諸属性について、分類作業をとおした詳細な分析による検討を必要とするが、整理に要した時間の制約から十分な資料化がなされていないため、今後それらの補足ならびに再検討によってさらに考察を深める必要がある。

第Ⅰ群土器

縄文時代中期前葉に比定される一群である。大木７ｂ式から大木８ａ式の内容を含むが、主体は大木８ａ式と思われる。調査区の北半部分から大半が出土しているが、出土数量は多くない。ほとんどが小破片である。

器種・器形：器種には深鉢と浅鉢がある。

深鉢で器形がある程度把握できるものには以下のようなものがある。

1．底部から直線的に立上がり、体部上半で外反する器形となるもの（第45図４）。頸部から上を欠損しているが、口縁部は内彎しながら外傾し口唇部で「く」字形に内彎するものと思われる。

2．体部上半で内彎ぎみに膨らみ、口縁部が外傾するもの（第45図１）。口縁部は比較的小振りな波状縁となるものと思われる。

3．大形の深鉢で内彎ぎみに外傾する大振りな波状口縁をもつもの（図版45－７）。渦巻きを主体とした装飾把手がつく。体部は失われているが胴部の中央付近が最大径となる胴張りの器形が想定される。

4．胴張りで体部上半が内傾ぎみに立上がり、頸部から直上ぎみに立上がる口縁部をもつもの（図版61－９）。口縁部が肥厚し、胴部の最大径が中央から下の部分にあるものと思われる。

5．胴部から口縁部にかけて、あまり外傾せずに直線的に立上がる器形となるもの（図版51－22）。胴部は樽形あるいは筒形になると考えられる。

浅鉢はすべて小破片で器形の詳細を把握できるものはない。頸部から口縁部にかけての形態には以下のようなものがみられる。なお、いずれも胴部はやや内彎ぎみに大きく外傾するものとみられる。

1．胴部からの立上がりが頸部で傾斜変換せずにそのまま口縁部に至るもの（図版51－14）。

2．胴部からの立上がりが頸部で直上ぎみに立上がるもの（図版49－20、図版51－25・27）。断面形は「く」字状となり、口唇部内面が肥厚する。

施文・胎土：地文は単節の斜縄文のほか、櫛描沈線文を地文とするもの（図版51－22）もみられる。頸部から口縁部にかけての施文は、粘土紐貼付文、短沈線文、隆線文、縄文原体側面圧痕文が用いられる。特に縄文原体側面圧痕文が多用され、その文様展開では、口唇部に縦位置で短く横方向に連続施文し、その下に連弧状あるいは渦巻き状に連続施文するものが多くみられる。また口唇部では波状の粘土紐貼付文と組み合うものがみられる（図版49－21、図版50－3・図版50－32他）。第45図4では、頸部に横方向の沈線、波状沈線にる区画がみられ、胴部には沈線文による縦方向への文様展開が観察される。胎土は粗砂を多く含み全体にやや粗い仕上がりとなるが、内面はよく磨かれている。

第II群土器

縄文時代中期末葉の土器群を一括する。概ね大木10式期の所産である。今回の調査では、ST49～51、ST57、ST58の各竪穴住居跡の堆積土および炉跡、SG1河川跡を中心に出土し、数量的に調査区内で主体となる一群である。

器種・器形：器種には深鉢、浅鉢、壺がある。

深鉢で器形が把握できるものには以下のようなものがある。

1．大形の深鉢で胴膨らみとなり頸部で直上または外反ぎみに口縁部に至るもの（第23図1、第30図1、第32図1）。胴部最大径が口縁部径よりも大きくなる。

2．大形の深鉢で胴膨らみとなり胴部上半からそのまま直上または内傾ぎみに口縁部にいたるもの（第34図1）。やはり胴部最大径が口縁部径よりも大きくなる。

3．大形の深鉢で、胴部下半から直線的に外傾し口縁部に至るもの（第33図1）。

4．胴部下半から大きく外反して口縁部に至る器形となるもの（第19図1、第20図3、第28図3、第29図1）。1～3に比較してやや小振りとなる。この器形となるものには地文以外の施文要素をもつものが多い。

5．小形の深鉢で底部から直線的に外傾して口縁部に至るバケツ形の器形となるもの（第24図1・2）。第26図2も同様な器形になると思われる。

浅鉢で器形が把握できるものには以下のようなものがある。

1．底部から内彎ぎみに大きく外傾して立上がり、胴部上半で「く」字状になり直上ぎみに短く口縁部が立上がる器形となるもの（第18図1）。

2．底部から外反ぎみに大きく外傾して立上がり、胴部上半で「く」字状になり直上ぎみに短く口縁部が立上がる器形となるもの（第28図1）。

3．底部から直線もしくは外反ぎみに立上がり、口縁部で「く」字状に内傾する器形となるもの。1・2よりも大形の器形となる。大振りな波状縁となるもの（第21図4）、平縁となるもの（第36図1～3、第39図1）がある。

4．胴膨らみで口縁部が短く外反するもの（第37図3）。

5．胴部は外反ぎみに大きく外傾する器形になると思われ、口縁部が内彎しながら立上がり、口唇部が短く外に引き出されるもの（第37図4・5）。いずれも波状縁となる。

壺は第28図2の1点が確認された。胴部上半から急激に締って頸部が内傾ぎみに立上がり、口唇部が短く外に引き出される器形となる。

施文・胎土：外面への施文はその要素の組み合わせにより以下のように分類できる。

a．隆起線と幅広の無文帯によって文様構成されるもの。無文帯と地文との境界は浅い沈線によって明確に区画されるものが多い。「S」字状、「C」字状またはその組み合わせによるモチーフを基本とする。文様の展開をみると以下のようになる。

1．横方向に文様展開するもの（第20図2・3、第21図4、第25図1・2・4、第24図1、第29図1・2）。いずれも地文には単節または複節の斜縄文が施文される。胴部下半は地文のみとなる。

2．縦方向に文様展開するもの（第21図1～3、第28図3、図版49－14）。いずれも無文帯がより大きな面積を占め、それによって区画された中に縄文が充填される構図となる。第31図1・2も縦方向に文様が展開するが地文が施されない。

3．隆起線が文様帯区画として用いられ、口縁部が無文帯となり胴部は地文のみが施文されるもの（第24図2、第37図3）。

b．隆起線と幅広の無文帯および棒状工具または竹管による刺突文によって文様構成されるもの（第18図1、図版49－41）。

c．沈線とそれに区画された無文帯および地文により文様構成されるもの（第25図3、第45図2、図版49－39）。

d．地文のみが施文されるもの。今回出土した本群土器のなかで最も多い。

1．斜縄文が施文されるもの。単節および複節がみられるが、単節の場合はRLの縦位施文（第19図2、第26図1、第35図1他）、複節ではRLRの縦位または斜位施文（第22図1、第27図2、第33図1、第34図1他）が多い。また口縁部と胴部で縄文の施文方向を変えて意匠化しているものがある（第39図3、図版49－36）。

2．撚糸文が施文されるもの（第38図4、図版49－30）。

3．櫛描沈線文が施文されるもの。第23図1は器面全体に縦方向の櫛描沈線文を施すが胴部中央の最大径付近は連弧状に施文される。

e．無文となるもの（第18図3）。被熱により器表面の劣化が著しい。

本群土器の胎土は、石英、雲母をはじめとする砂の混入が非常に多い。また骨針の混入も目

立った特徴といえる。焼成は良好で器内面はよく磨かれているが、特に地文以外の施文要素をもつものは、器表面も丹念に磨かれているものが大半である。しかし使用による被熱で表面が脆くなっているものが多い。

第Ⅲ群土器

縄文時代後期前葉に比定されるものを一括する。おもに調査区南西半部の遺物包含層、土坑から出土している。小破片が多く、全体の器形並びに文様構成が把握できるものは少ないが、概ね岩手県の門前式から宮城県の宮戸Ⅰb式、あるいは堀之内Ⅰ式に並行するものが主体とみられる。

器種・器形：器種には深鉢と浅鉢がある。

器形が把握できるものには以下のようなものがある。

1．大形の深鉢で底部から緩く内彎しながら立上がり、胴部上半ですぼまり、口縁部が短く直上もしくはそのまま内傾するもの（第41図１・２、第44図１）。口縁部径が胴部最大径よりも小さくなる。

2．球形に近い胴張りの器形となるもの（第44図２）。口縁部、底部の状況は不明である。あるいは壷形となる可能性がある。

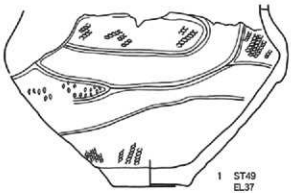
3．胴部中央から直線的または若干内彎ぎみに緩く外傾して口縁部に至る器形となるもの（第26図３・４、第42図３・４、第46図４）。いずれも波状縁となる。

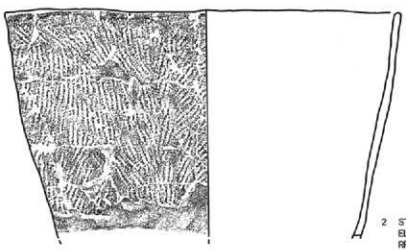
浅鉢は第42図５の１点が出土した。胴部は内彎ぎみに外傾し、頸部でくびれて口縁部が短く外に引き出される器形となる。

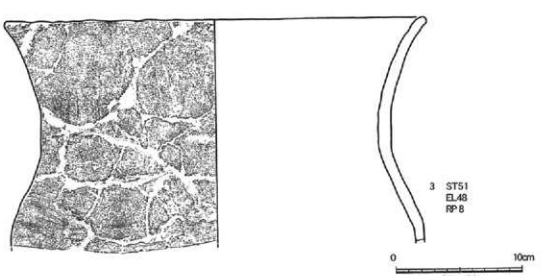
施文・胎土：施文は地文並びに沈線文を主体とするが、これにボタン状貼付文（図版50－23）、円形刺突紋（第42図１、図版50－21、図版51－16・17・23・26）、隆起線文（第42図３・４）などの要素が組み合わされて文様構成されるものが多い。モチーフは、横方向に区画を設けず、第26図３・４のように縦方向に展開されるものがほとんどで、第44図１・２では、胴部に曲線的な沈線を不規則に描出している。地文は単節斜縄文、撚糸文を主体とするが、第Ⅰ・Ⅱ群土器のそれと比較して条は細く繊細になるが、縄文では撚りが粗く、撚糸文も条間が疎となる傾向がみられる。第41図２では、ひとつの個体に縄文と撚糸文を上下で使い分けている。また一部の資料では、反撚りの地文の存在が観察された。胎土は砂粒を含むが、薄く堅緻に焼成される。

第Ⅳ群土器

縄文時代後期前葉以降の資料を一括する。現在のところ抽出できたものは晩期の破片資料２点に留まる。図版45－９は壷または注口土器の口縁部である。外面は隆起線と沈線によっていわゆる工字文のモチーフを主体に文様構成される。大洞A式期の所産と考えられる。また図版51－32は鉢または皿の口縁部破片である。いずれも赤彩の痕跡が残る。







第18図　縄文土器（1）

1 ST51
10－50
P6

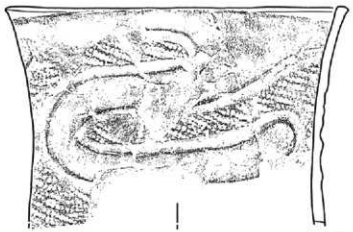
2 ST51
10－50
P5

0 10cm
(1：3)

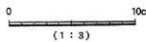
第19図　縄文土器（2）

1 ST51
10－49
P7

2 ST51
9－49
P8

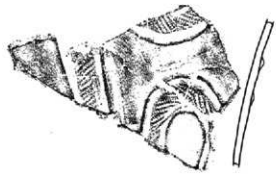


3 ST51
9－49

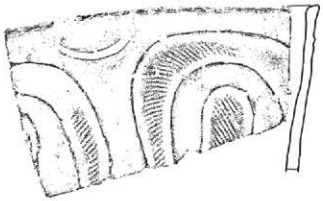


第20図　縄文土器（3）

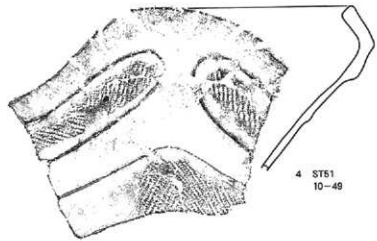
1 ST51
EL48
RP7



2 ST51
EL48
RP7



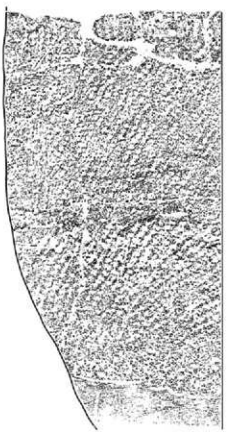
3 ST51
EL48
RP7



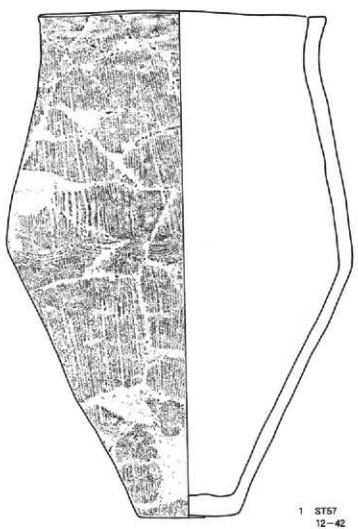
4 ST51
10−49

0 10cm
(1：3)

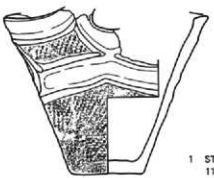
第21図　縄文土器（4）

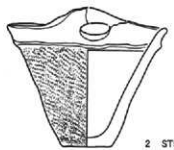


第22図　縄文土器（5）

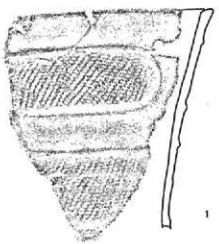


第23図　縄文土器（6）

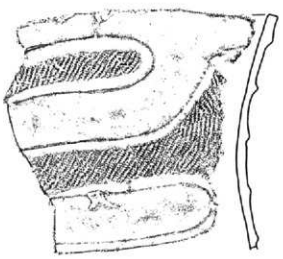




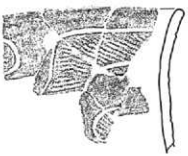
第24図　縄文土器（7）



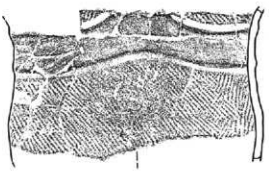
1 ST57
EL78



2 ST57
EL78Y



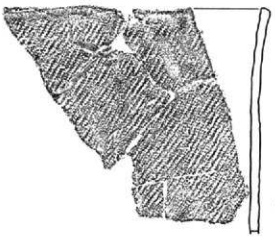
3 ST57
13−42

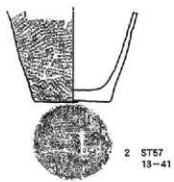


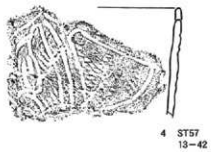
4 ST57
EL78
RP 2

0 10cm
(1：3)

第25図　縄文土器（8）

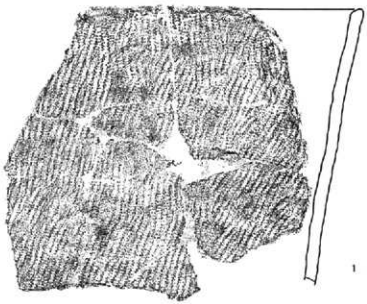




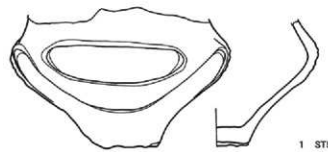


0 10cm
(1:3)

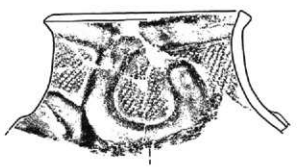
第26図　縄文土器（9）



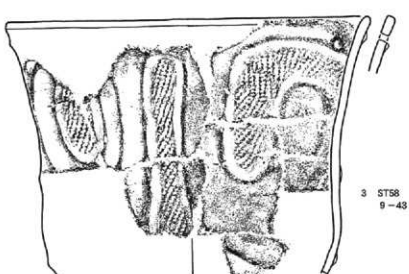
第27図　縄文土器（10）



1 ST58
10－43



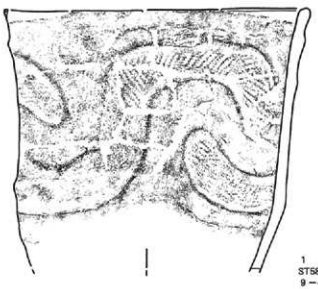
2 ST58
9－42



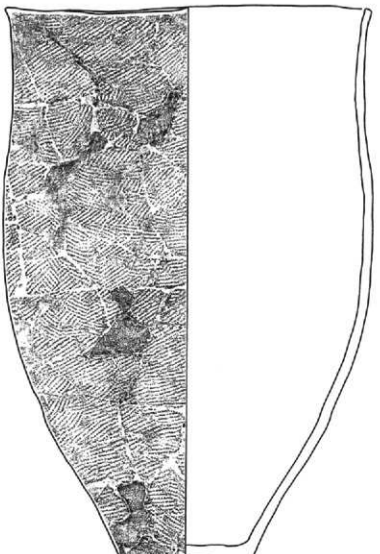
3 ST58
9－43

0 10cm
(1：3)

第28図　縄文土器（11）



第29図　縄文土器（12）

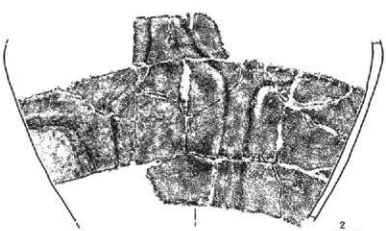


1　ST58
9－43

0　10cm
（1：3）

第30図　縄文土器（13）

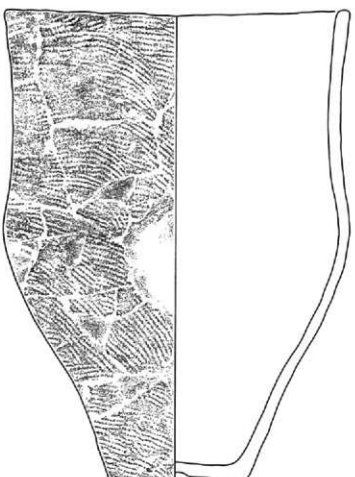
1
ST58
9－43



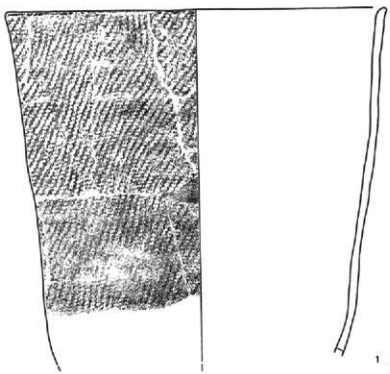
2
ST58
9－42-43

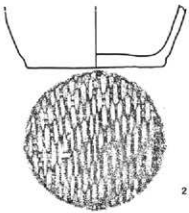
0　10cm
(1:3)

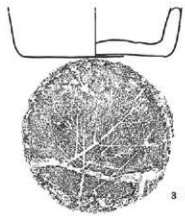
第31図　縄文土器（14）



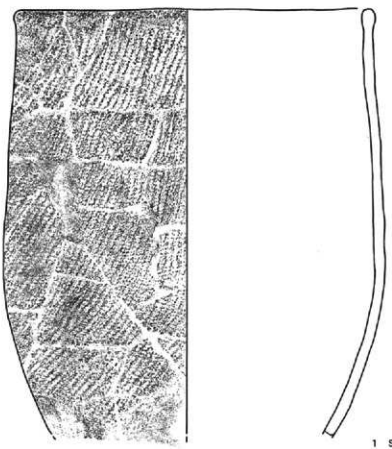
第32図　縄文土器（15）



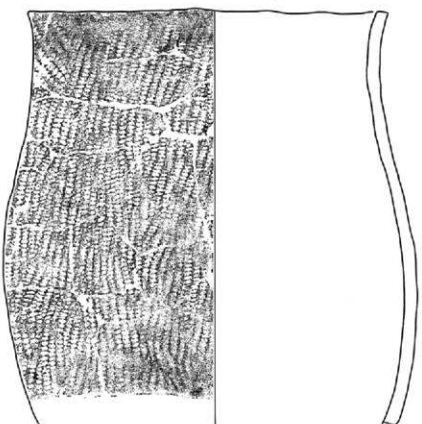




第33図　縄文土器（16）

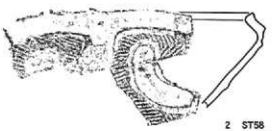


第34図　縄文土器（17）

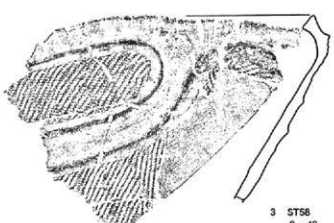


第35図　縄文土器（18）

1　ST58
9－42



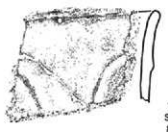
2　ST58
9－43



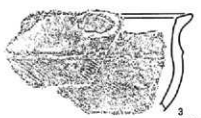
3　ST58
8－42

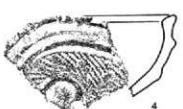
0　10cm
（1：3）

第36図　縄文土器（19）


1
ST58
8－43

2
ST58
EL.102
8－43

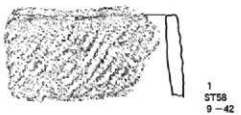

3
ST58
9－42


4
ST58
9－43

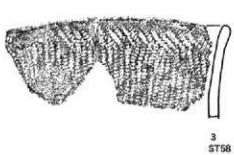
5
ST58
9－43

0　10cm
（1：3）

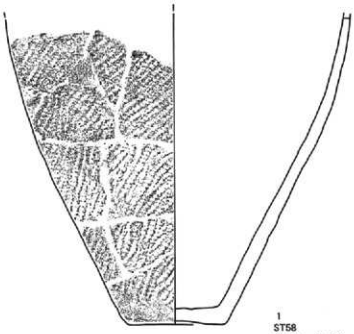
第37図　縄文土器（20）

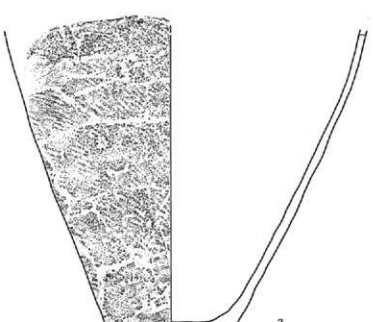


第38図　縄文土器（21）

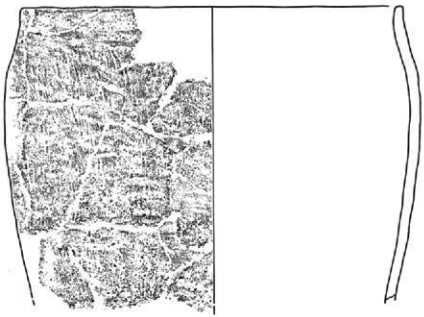


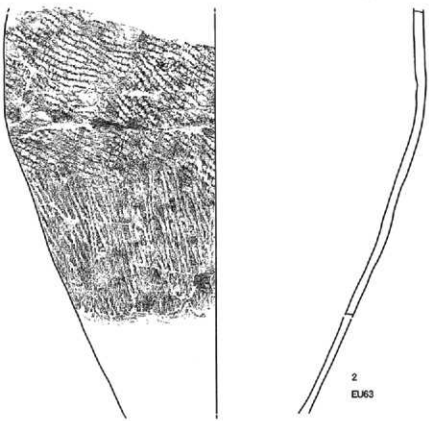
第39図　縄文土器（22）





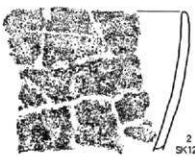
第40図　縄文土器（23）

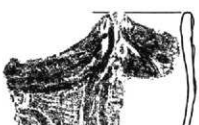




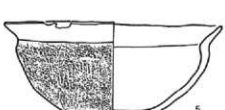
第41図　縄文土器（24）

1
SK124
16－18


2
SK126
18－19

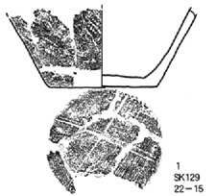

3
SK123
16－19

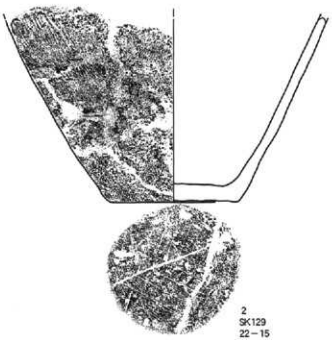
4
SK123
16－19

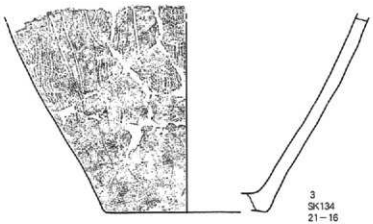

5
SK112

0　10cm
(1：3)

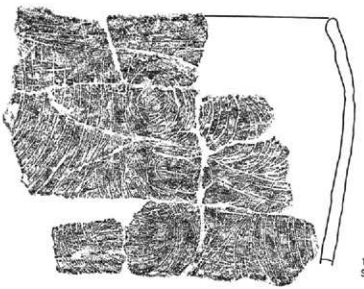
第42図　縄文土器（25）

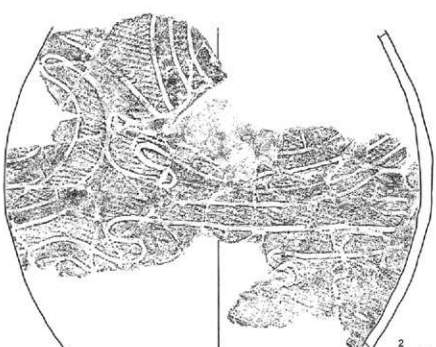






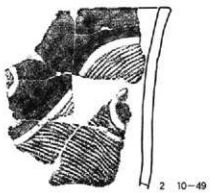
第43図　縄文土器（26）

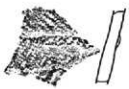


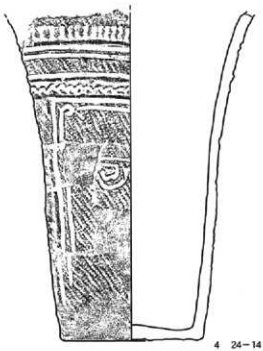


0　10cm
（1：3）

第44図　縄文土器（27）

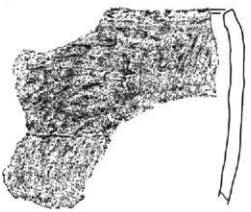


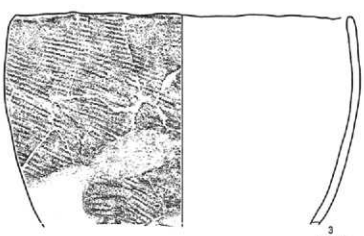


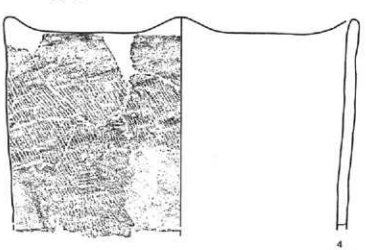


0 10cm
(1 : 3)

第45図　縄文土器（28）







第46図　縄文土器（29）

挿図	図版	遺構	地区	器種	法量 口径	法量 最大径	法量 底径	法量 器高	施文	その他	備考
18－1	29－1	ST49	14－47・48	浅鉢	－	222	59	[140]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文・鋼英文充填	外面は被熱が顕著。内面は縦方向の磨き調整。	RP5・EL37埋設土器
18－2	30－1	ST51	9－50	深鉢	310		－	[174]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。	RP7・EL48埋設土器
18－3	30－2	ST51	9－50	深鉢	(332)		－	[175]	無文	内外面磨き調整。被熱。	RP8・EL48埋設土器
19－1	39－5	ST51	10－50	深鉢	(220)		－	[163]	地文縄文LR	外面は体部下半を中心に被熱。内面磨き調整。	
19－2	40－1	ST51	10－50	深鉢	－	[326]	－	[230]	地文縄文RL	外面は被熱が顕著。	
20－1		ST51	10－49	深鉢	－		－	[73]	地文縄文LR。粘土紐貼付	胎土に骨針混入。外面煤付着。内面磨き調整。	
20－2		ST51	9－49	深鉢	－		－	[132]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。外面は被熱。煤付着。	
20－3	29－2	ST51	9－49	深鉢	(270)		－	[170]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。内面磨き調整。	
21－1		ST51	9－50	深鉢	－		－	[132]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	内面磨き調整。	RP7・EL48埋設土器。第21図-1～3同一個体
21－2		ST51	9－50	深鉢	－		－	[110]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	内面磨き調整。	RP7・EL48埋設土器
21－3	47－1	ST51	9－50	深鉢	－		－	[137]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填。沈線文	口唇部被熱。内面磨き調整。	RP7・EL48埋設土器
21－4	46－4	ST51	10－49	浅鉢	－	－	－	[110]	地文縄文LR・RL。隆起線区画内縄文充填。沈線文	内面磨き調整。	
22－1	38－2	ST57	12－42	深鉢	－	(344)	－	[324]	地文縄文RLR	胎土に骨針混入。外面被熱。体部中央に煤付着。内面体部上半被熱。	RP1・EL78埋設土器
23－1	32－1	ST57	12－42	深鉢	230	277	81	407	地文櫛描沈線文	外面体部中央付近に煤付着	
24－1	32－3	ST57	11－41	深鉢	(160)		54	[130]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填	穿孔ある波状口縁。外面は被熱、煤付着。	
24－2	32－2	ST57	13－41	深鉢	124		37	109	地文縄文LR。口縁部隆起線による区画	穿孔ある1単位波状口縁。	EP80覆土上面出土
24－3	31－2	ST57	12・13－41・42	深鉢	－	259	－	[178]	地文縄文LR	内外面に被熱が顕著。	EP92埋設土器
25－1	43－3	ST57	12－42	深鉢	－		－	[170]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填		EL78覆土内出土
25－2	43－4	ST57	12－42	深鉢	－		－	[180]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。外面の一部が被熱。内面磨き調整。	EL79覆土内出土
25－3	43－5	ST57	13－42	深鉢	－		－	[110]	地文縄文LR。沈線区画内縄文充填	外面に煤付着	
25－4	42－1	ST57	12－42	深鉢	－	[100]	－	[117]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	外面の一部が被熱、煤付着。	RP2・EL78埋設土器
26－1	43－2	ST57	13－42	深鉢	－		－	[176]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。外面煤付着。	
26－2	31－1	ST57	13－41	深鉢	－	[100]	58	[71]	地文縄文LR	内外面に煤付着。	
26－3	44－1	ST57	13－42	深鉢	－		－	[168]	地文縄文LR。沈線文	外面に煤付着。	第26図3・4同一個体
26－4	44－2	ST57	13－42	深鉢	－		－	[169]	地文縄文LR。沈線文	外面に煤付着。	
27－1	47－4	ST58	8－43	深鉢	－		－	[215]	地文縄文RL	外面に煤付着。	
27－2	47－3	ST58	8－42・43	深鉢	－		－	[258]	地文縄文RLR		
28－1	33－2	ST58	10－43	浅鉢	－	132	44	[114]	地文不明。隆起線文	底部が切高台状。内外面に顕著な被熱。	
28－2	46－3	ST58	9－42	深鉢	(161)	[217]	－	[95]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。口縁部を中心に被熱。	
28－3	46－1	ST58	9－43	深鉢	(286)		－	[200]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	口縁部直下に補修孔。外面被熱。	
29－1	35－1	ST58	9－42	深鉢	240		－	[205]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。外面被熱、煤若干付着。	
29－2	35－2	ST58	9－42・43	深鉢	(296)		－	[195]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。	
30－1	37－1	ST58	9－43	深鉢	286	288	106	437	地文縄文LR	胎土に骨針混入。外面体部上半被熱、煤若干付着。内面磨き調整。	
31－1	46－2	ST58	9－43	浅鉢	－		－	[110]	隆起線文	胎土に骨針混入。内外面一部被熱。	第31図1・2同一個体
31－2		ST58	9－42・43	浅鉢	－		－	[136]	隆起線文	胎土に骨針混入。内外面一部被熱。	
32－1	36－1	ST58	9・10－42・43	深鉢	(271)	(272)	104	374	地文縄文LR	外面最大径部に煤付着。	
33－1	34－1	ST58	9－43	深鉢	296		－	[269]	地文縄文RLR	外面体部下半を中心に被熱、煤付着が顕著。	

表4　縄文土器観察表（1）

神図	図版	遺構	地区	器種	法量				施文	その他	備考
					口径	最大径	底径	器高			
33−2	48−1	ST58	8−42	深鉢	−	[140]	106	[47]	地文縄文LR	胎土に骨針混入。底部網代底。内外面被熱。	
33−3	48−2	ST58	10−43	深鉢	−	[134]	113	[38]		底部木葉痕。内外面被熱。	
34−1	34−2	ST58	8−42	深鉢	282	(300)	−	[336]	地文縄文RLR	外面の被熱顕著。体部最大径部に煤付着。	
35−1	33−1	ST58	8・9−43	深鉢	(282)	329	−	[327]	地文縄文RL	補修孔。外面の被熱顕著。体部最大径部に煤付着。	RP3・EL102埋設土器
36−1	44−9	ST58	9−42	浅鉢	−	−	−	[43]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。内外面被熱。	
36−2	44−7	ST58	9−43	浅鉢	−	−	−	[67]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。内外面に煤付着。	
36−3	44−8	ST58	8−42	浅鉢	−	−	−	[132]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填	内面の磨きが顕著。	
37−1	45−5	ST58	8−43	深鉢	−	−	−	[70]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填		
37−2	45−6	ST58	8−43	深鉢	−		−	[85]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。外面被熱。	EL102覆土内出土
37−3	45−10	ST58	9−42	浅鉢	−		−	[77]	地文縄文LR。口縁部隆起線による区画	外面被熱が顕著。	
37−4	44−12	ST58	9−43	浅鉢	−		−	[78]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	波頂部破片。口唇部被熱。内外面に煤巻き付着。	第37図4・5同一個体？
37−5	44−11	ST58	9−43	浅鉢	−		−	[79]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	波頂部破片。内面に炭化物付着が顕著。	
38−1	45−2	ST58	9−42	深鉢	−	−	−	[64]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。外面の口唇部直下に煤付着。	
38−2	45−1	ST58	9−42	深鉢	−		−	[65]	地文縄文RLR		
38−3		ST58	9−43	深鉢	−	−	−	[98]	地文縄文RL		
38−4	47−2	ST58	9−43	深鉢	−	−	−	[74]	地文無条文L	外面一部被熱	
39−1	44−6	ST58	9−43	浅鉢	−	−	−	[51]	地文縄文LR	胎土に骨針混入。外面に煤付着。	
39−2	44−5	ST58	9−42	浅鉢	−	−	−	[63]	地文縄文RL	外面被熱。口唇部付近に煤付着。	
39−3	45−4	ST58	9−43	深鉢	−	−	−	[71]	地文縄文RL	外面被熱。煤付着。	
39−4	44−3	ST58	8−43	深鉢	−		−	[98]	地文縄文RL	外面被熱。煤付着。	
40−1	37−2	ST58	8・9−42・43	深鉢	−	[267]	76	[241]	地文縄文RLR	補修孔。外面被熱。内外面の一部に煤付着。	
40−2	38−1	ST60	7−44	深鉢	−	[280]	99	[233]	地文縄文RL	内外面の被熱が顕著。	EL106埋設土器
41−1	38−2	ST54	17−35	深鉢	(30)	(325)	−	[230]	地文縄文RL	外面被熱が顕著。煤付着。	
41−2	40−2		8・9−40	深鉢	−	[330]	−	[315]	地文縄文LR・燃糸文L	外面、内面底部付近に煤付着が顕著。	EU63埋設土器
42−1		SK124	16−18	深鉢	−	−	−	[81]	地文縄文RL・沈線文・刺突文	外面に煤付着。	
42−2		SK126	18−19	深鉢	−		−	[109]	不明	外面被熱が顕著。	
42−3	51−5	SK123	16−19	深鉢	−		−	[92]	地文縄文LR。隆起線文、沈線文	波頂部破片。外面被熱。煤付着。	第42図4同一個体
42−4	51−4	SK123	16−19	深鉢	−		−	[89]	地文縄文LR。隆起線文、沈線文	波頂部破片。外面被熱。煤付着。	
42−5	39−3	SK112	17−18	浅鉢	170		50	77	地文無条文R	体部外面に煤付着。	
43−1	39−7	SK129	22−15	深鉢	−	[145]	83	[61]	地文縄文LR	外面被熱、煤付着。	
43−2	39−1	SK129	22−15	深鉢	−	[251]	100	[146]	地文無条文R	外面被熱。内面に炭化物の付着が顕著。	
43−3	42−3	SK134	21−16	深鉢	−	[283]	(126)	[152]	地文無条文R、沈線文	胎土に骨針混入。	
44−1	42−2	SK36	12−37	深鉢	−	−	−	[191]	沈線文	胎土に骨針混入。口唇部、内面の被熱が顕著。	
44−2	41−2		19−17	深鉢	−	336	−	[249]	地文縄文LR、沈線文	外面に煤付着。	
45−1		SG1	12−48	深鉢	−	−	−	[86]	地文縄文LR、沈線文	外面に煤付着。内面の磨きが顕著。	
45−2	51−11	ST51	10−49	深鉢	−		−	[140]	地文縄文LR、隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。体部外面に煤付着。	
45−3		ST51	10−49	深鉢	−		−	[57]	地文縄文LR、粘土紐貼付	胎土に骨針混入。	
45−4	41−3		24−14	深鉢	−	[192]	107	[256]	地文縄文LR、粘土紐貼付、沈線文、縄文原体側面圧痕文	体部外面に煤付着。	
46−1			12−46	深鉢	−		−	[113]	地文無条文LR		
46−2	51−12		14−48	深鉢	−	−	−	[150]	無文	胎土に骨針混入。	

表５　縄文土器観察表（2）

挿図	図版	遺構	地区	器種	法量				施文	その他	備考
					口径	最大径	底径	器高			
46-3	41-1		20-18	深鉢	265	280	−	[165]	地文縄文LR	胎土に骨針混入。内外面に煤付着。	
46-4	39-2		17-18	深鉢	(280)		−	[163]	地文燃糸文R	胎土に骨針混入。体部外面に煤付着。	
	36-2	ST58	8-42	深鉢		[256]	83	[197]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。体部外面に煤付着。	
	39-4		17-19	深鉢		[102]	125	[109]	無文	内面に煤付着。	
	39-6	SK53	13-35	壺		[84]	29	[39]	無文		
	43-1	ST57	13-41・42	深鉢	−		−	[158]	地文縄文LR	胎土に骨針混入。	
	44-4	ST57	12-40	深鉢	−		−	[58]	沈線文	体部破片。外面に煤若干付着。	
	44-10	ST58	7-43	浅鉢	−	−	−	[40]	地文縄文RL。沈線区画内縄文充填	外面に煤付着	
	45-3	ST58	8-43	深鉢	−		−	[58]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。	
	45-7	ST58	9-42	深鉢	−		−	[120]	沈線文。刺突文	波状口縁の装飾把手	
	45-8	ST58	8-42	深鉢	−		−	[57]		波状口縁の装飾把手	
	45-9	ST58	8-43	壺	−	−	−	[60]	沈線文	赤彩の痕跡あり。	
	48-3	ST51	9-49・50	深鉢	−		−	[51]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。	
	48-4	ST51	9-49	深鉢	−		−	[59]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。	
	48-5	ST51	9-49	深鉢	−		−	[57]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。割面磨滅。	
	48-6	ST51			−		−	[51]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。口縁部下に穿孔装飾あり。	
	48-7		11-47	深鉢	−			[58]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。	
	48-8		11-47	深鉢	−			[58]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。外面被熱、煤若干付着。	
	48-9		14-46	深鉢	−		−	[60]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填		
	48-10	ST51	9-50	深鉢	−		−	[65]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填	胎土に粗砂の混入が顕著。	
	48-11	SG1	22-45	深鉢	−		−	[56]	地文不明。隆起線区画内縄文充填	外面被熱が顕著。内面炭化物の付着が顕著。	
	48-12		11-47	深鉢	−		−	[53]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	内外面被熱。	
	48-13	ST51	9-49	深鉢	−			[47]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。割面磨滅。	
	48-14	ST51	10-49	深鉢	−		−	[99]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填		
	48-15	ST51	9-50	深鉢	−		−	[49]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	外面被熱、煤若干付着。	
	48-16		12-49	深鉢	−		−	[58]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。煤若干付着。	
	48-17	ST51	10-49	浅鉢	−		−	[40]	地文縄文LR。沈線区画内縄文充填	外面に煤付着。	図版48-19同一個体
	48-18	ST51	9-50	浅鉢	−		−	[34]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	外面に煤若干付着。	
	48-19	ST51	10-50	浅鉢	−		−	[35]	地文縄文LR。沈線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。外面に煤付着。	
	48-20	ST51	9-49	深鉢	−		−	[39]	地文不明。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。口唇部被熱。	
	48-21	ST51	10-50	深鉢	−		−	[51]	地文不明。隆起線区画内縄文充填		
	48-22		27-45	深鉢	−		−	[38]	地文縄文LR		
	48-23		11-47	深鉢	−		−	[71]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。外面に煤付着。	
	48-24	SG1	19-47	深鉢	−		−	[35]	地文縄文RLR	胎土に骨針混入。	
	48-25		11-47	深鉢	−		−	[37]	地文不明		
	48-26	ST51	9-5	不明	(47)	[61]	−	[27]	地文不明	口唇部煤付着	
	48-27	SG1	27-41	深鉢	−		−	[55]	地文撚糸文R	胎土に石英砂多量に混入。内外面に煤若干付着。	
	48-28		12-47	深鉢	−		−	[56]	地文撚糸文R		

表6　縄文土器観察表（3）

棒図	調査	遺構	地区	器種	法量				施文	その他	備考
					口径	最大径	底径	器高			
	49−1		11−48	深鉢	−		−	[57]	地文縄文LL	外面に煤若干付着。	
	49−2	SG1	31−35	深鉢	−		−	[55]	地文撚糸文R	胎土に植物多量に混入。内外面に炭の付着が顕著。	
	49−3	ST51	9−49	深鉢	−		−	[70]	地文撚糸文R、沈線文	外面に煤若干付着。	
	49−4	SG1	26−40	深鉢	−		−	[47]	沈線文	内外面被熱が顕著。	
	49−5		13−45	深鉢	−		−	[43]	地文縄文LR	外面に煤若干付着。	
	49−6	SG1	24−41	深鉢	−		−	[76]	地文縄文RR		
	49−7		13−46	深鉢	−		−	[64]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。外面の被熱が顕著。	
	49−8		13−46	深鉢	−		−	[49]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。	
	49−9	SG1	27−39	深鉢	−		−	[50]	沈線文、刺突文	波頂部破片。胎土に粗砂多量に混入。	
	49−10	SG1	26−37	深鉢	−		−	[43]	地文縄文LR、隆起線文、刺突文	外面に煤若干付着。	
	49−11		9−38	深鉢	−		−	[62]	沈線文、刺突文	波頂部破片。外面に煤が若干付着。	
	49−12	SG1	26−39	深鉢	−		−	[31]	突起	胎土に骨針、多量の粗砂が混入。	
	49−13	ST51	10−49	浅鉢	−		−	[50]	隆起線文	外面被熱、煤若干付着。断面磨滅。	
	49−14		12−46	浅鉢	−		−	[70]	地文縄文RL、沈線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。内面の炭化物付着が顕著。	
	49−15		11−46	深鉢	−		−	[62]	地文縄文RL、隆起線区画内縄文充填	内外面被熱が顕著。断面磨滅。	
	49−16	SG1	25−39	深鉢	−		−	[69]	地文不明、刺突文	胎土に粗砂混入。	
	49−17	SG1	26−41	深鉢	−		−	[69]	沈線文、刺突文	断面磨滅。	
	49−18	SG1	23−43	深鉢	−		−	[48]	隆起線文、刺突文		
	49−19	SG1		深鉢	−		−	[45]	隆起線文、刺突文	被熱が顕著。	
	49−20	ST51	10−49	浅鉢	−		−	[37]	隆起線文、縄文原体側面圧痕文	口唇部煤若干付着。	
	49−21		11−46	深鉢			−	[49]	隆起線文、縄文原体側面圧痕文		
	49−22		29−38	不明	−		−	[24]	沈線文	被熱。	
	49−23	SG1	23−40	深鉢	−		−	[106]	地文縄文LR、沈線文、	胎土に粗砂混入。外面の被熱が顕著。	
	49−24	ST51	10−48	深鉢	−		−	[38]	地文不明、粘土紐貼付文、縄文原体側面圧痕文		
	49−25	ST51	9−49	浅鉢	−		−	[43]	隆起線文、縄文原体側面圧痕文	外面に煤付着。	
	49−26	SG1	17−47	浅鉢			−	[50]	縄文原体側面圧痕文、交互刺突文	口唇部に煤若干付着。	
	49−27	SG1	20−44	深鉢	−		−	[58]	粘土紐貼付文、沈線文	胎土に骨針混入。	
	49−28	SG1	18−47	深鉢	−		−	[52]	隆起線文、縄文原体側面圧痕文	外面に煤若干付着。	
	49−29		11−48	深鉢	−		−	[34]	縄文原体側面圧痕文	胎土に骨針混入。外面の被熱が顕著。	
	49−30		13−46	深鉢	−		−	[102]	地文撚糸文LR	内面の磨きが顕著。	
	49−31	ST57	11−42	深鉢	−		−	[67]	地文縄文RL		
	49−32	ST57	12−41	深鉢	−	−	−	[80]	地文縄文RLR		
	49−33	ST58	9−43	深鉢	−		−	[89]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。外面の被熱が顕著。煤若干付着。	
	49−34	ST57	12−42	深鉢	−		−	[84]	地文縄文LR	胎土に骨針混入。	
	49−35	ST58		深鉢	−		−	[90]	地文縄文RL	胎土に骨針混入。内外面被熱。外面に煤付着。	図版49-36同一個体？
	49−36	ST58	9−43	深鉢	−		−	[93]	地文縄文RL	外面の被熱が顕著。	
	49−37	ST58	9−43	深鉢	−		−	[64]	地文縄文RL		
	49−38	ST57	12−42	深鉢	−		−	[75]	地文縄文RL、隆起線区画内縄文充填		
	49−39	ST57	13−42	深鉢	−		−	[72]	地文縄文LR、沈線区画内縄文充填	外面に煤付着。	
	49−40	ST58	9−43	深鉢	−		−	[127]	地文縄文RL	内外面の被熱が顕著。外面に煤若干付着。	
	49−41	ST59	7−43	深鉢	−		−	[76]	地文縄文LR、沈線区画内縄文・竹管刺突文充填	擬似口縁。外面に煤若干付着。	

表7　縄文土器観察表（4）

挿図	図版	遺構	地区	器種	法量				施文	その他	備考
					口径	最大径	底径	器高			
	49－42	ST57	12－42	深鉢	－		－	[40]	隆起線文	胎土に骨針混入。外面に煤付着。	
	49－43	ST58	－	浅鉢	－	－	－	[56]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	擬似口縁。被熱顕著。外面の煤付着が顕著。	
	49－44	ST57	13－41	深鉢	－		－	[50]	地文撚糸文R。沈線文	被熱。内面に煤若干付着。	
	49－45	ST58	8－43	浅鉢	－	－	－	[33]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	被熱が顕著。	
	49－46	ST57	12－40	浅鉢	－		－	[40]	隆起線文	内面にも施文。	
	49－47	ST57	12－40	深鉢	－		－	[43]	沈線文	外面被熱が顕著。	
	49－48	ST58	9－43	深鉢	－	－	－	[67]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針混入。内外面被熱。外面に煤若干付着。	
	50－1	ST57	13－42	深鉢	－		－	[49]	粘土紐貼付文。隆起線文	外面の被熱が顕著。	
	50－2	ST57	13－42	深鉢	－		－	[49]	縄文原体側面圧痕文	外面被熱。	
	50－3	ST57	12－42	深鉢	－		－	[47]	地文縄文RL。縄文原体側面圧痕文		
	50－4	ST57	12－42	深鉢	－	－	－	[53]	地文撚糸文R。隆起線文。刺突文	波頂部破片。胎土に粗砂多量に混入。	
	50－5	ST58	8－43	浅鉢	－	－	－	[38]	地文縄文RLR。隆起線区画内縄文充填	外面被熱。煤若干付着。	
	50－6	ST57	13－41	浅鉢	－	－	－	[43]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	胎土に骨針多量に混入。内外面被熱。	EP80覆土内出土
	50－7	ST57	13－42	深鉢	－		－	[26]	縄文原体側面圧痕文	胎土に骨針混入。	
	50－8	ST58	10－43	深鉢	－		－	[53]	地文縄文RL		
	50－9	ST58	8－43	深鉢	－		－	[40]	地文不明	補修孔。内外面、断面の磨滅が顕著。	EL102覆土内出土
	50－10	ST58	10－43	浅鉢	－	－	－	[43]	隆起線文	胎土に骨針混入。外面下半部被熱、煤付着。	
	50－11	ST58	9－45	浅鉢	－	－	－	[26]	縄文原体側面圧痕文		
	50－12	ST58	8－43	浅鉢	－	－	－	[36]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	内外面被熱。断面磨滅	EL102覆土内出土
	50－13	ST58	9－43	浅鉢	－	－	－	[43]	地文縄文LR	胎土に骨針混入。外面被熱、煤若干付着。	
	50－14	ST58	9－43	浅鉢	－	－	－	[66]	地文縄文LR。隆起線区画内縄文充填	外面被熱が顕著。内面煤若干付着。	
	50－15	ST58	8－42	深鉢	－		－	[72]	地文縄文RL	外面被熱、煤付着。	
	50－16	ST58	8－43	深鉢	－		－	[49]	隆起線文	胎土に骨針混入。外面被熱。	
	50－17	ST57	13－42	浅鉢	－	－	－	[40]	地文縄文RL	内面に煤付着。	
	50－18	ST58	8－43	深鉢	－		－	[76]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	外面の被熱が顕著。	
	50－19	ST58	8－43	深鉢	－	－	－	[89]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	口唇部、外面の被熱が顕著。	
	50－20	ST58	8・9－42・43	深鉢	－		－	[121]	地文縄文RL。隆起線区画内縄文充填	体部破片。内外面煤若干付着。	
	50－21	SK19	21－45	深鉢	－		－	[50]	地文縄文LR。沈線文。刺突文		
	50－22	SK43	19－20	深鉢	－	－	－	[37]	沈線文	口縁部装飾突起	
	50－23	SK125	16－18	深鉢	－	－	－	[43]	沈線文。粘土紐貼付文	波頂部破片。胎土に粗砂混入。	
	50－24	SK129	22－15	深鉢	－		－	[38]	地文撚糸文R。沈線文		
	50－25	SK129	22－15	深鉢	－		－	[42]	地文撚糸文R。沈線文	胎土に粗砂混入。	
	50－26	SK19	20－45	深鉢	－		－	[50]	沈線文。粘土紐貼付文。縄文原体側面圧痕文	内外面被熱。	
	50－27	SK147	24－14	深鉢	－		－	[63]	地文縄文LR。沈線区画内縄文充填	胎土に粗砂多量に混入。内面磨滅。	
	50－28	ST57	12－40	深鉢	－	－	－	[36]	地文縄文LR。粘土紐貼付文。縄文原体側面圧痕文	胎土に粗砂多量に混入。外面に煤付着。	
	50－29	SK96	32－25	深鉢	－	－	－	[45]	地文撚糸文R。沈線文。刺突文	外面口縁部に煤付着。	図版50-30と同一個体？
	50－30	SK96	32－25	深鉢	－	－	－	[59]	地文撚糸文R。沈線文	外面口縁部に煤付着。	
	50－31	SK19	21－45	深鉢	－	－		[75]	地文撚糸文R。沈線文。刺突文		
	50－32	SK39	12－48	深鉢	－	－	－	[53]	粘土紐貼付文。縄文原体側面圧痕文	口唇部の被熱が顕著。	
	50－33	SK124	17－18	深鉢	－	－		[57]	地文撚糸文R	胎土に粗砂多量に混入。	

表８　縄文土器観察表（5）

挿図	図版	遺構	地区	器種	法量 口径	法量 最大径	法量 底径	法量 器高	施文	その他	備考
	50−34	ST58	8−43	壺	−	−	−	[60]	沈線文	赤彩の痕跡あり。	
	50−35	SK145	22−18	深鉢	−		−	[62]	地文縄文LR、隆起線文、沈線文	内外面の被熱が顕著。剥離著滅。	
	50−36	SK129	22−15	深鉢	−		−	[73]	沈線文	胎土に粗砂多量に混入。	
	50−37	SK146	24−14	浅鉢	−		−	[73]	地文縄文L	胎土に粗砂多量に混入。内外面の被熱が顕著。	
	50−38		24−13	深鉢	−	−	−	[87]	地文撚糸文R	外面に煤着干付着。	
	50−39		14−48	浅鉢	−	−	−	[84]	地文縄文RL、隆起線区画内縄文充填	外面に煤着干付着。	
	50−40		14−46	深鉢	−	−	−	[60]	櫛描沈線文	胎土に骨針混入。外面に煤着干付着。	
	50−41	ST51	10−50	深鉢	−		−	[61]	地文縄文RL	内外面の被熱。	
	51−1		20−18	深鉢	−		−	[58]	地文縄文RL、沈線文、粘土紐貼付文	口唇部に煤付着。	
	51−2	ST51	9−49	深鉢	−	−	−	[66]	地文縄文RL、粘土紐貼付文	胎土に骨針混入。	
	51−3		15−38	深鉢	−		−	[55]	地文縄文LR、粘土紐貼付文、縄文原体側面圧痕文	口唇部、外面に煤付着。	
	51−6		11−19	深鉢	−		−	[80]	地文撚糸文R、沈線文	外面に煤付着。	
	51−7		11−19	深鉢	−	−	−	[54]	沈線文	波頂部破片。内外面の被熱が顕著。	
	51−8		15−32	深鉢	−	−	−	[60]	隆起線文、沈線文		
	51−9		18−39	深鉢	−		−	[59]	地文縄文LR、隆起線文、沈線文	口縁部突起に煤付着。	
	51−10		24−17	深鉢	−	−	−	[74]	地文縄文LR、粘土紐貼付文、沈線文		
	51−13		23−16	浅鉢	−	−	−	[53]	粘土紐貼付文、沈線文	内外面の被熱が顕著。	
	51−14		31−16	浅鉢	−	−	−	[45]	地文縄文LR、粘土紐貼付文、沈線文		
	51−15		18−34	浅鉢	−	−	−	[52]	地文縄文LR、沈線文、刺突文	外面被熱。	
	51−16		17−21	深鉢	−	−	−	[43]	沈線文	補修孔。	
	51−17		12−36	深鉢	−		−	[63]	沈線文、刺突文	胎土に骨針混入。	
	51−18		23−15	深鉢	−		−	[66]	沈線文	外面に煤付着。	
	51−19		12−34	深鉢	−		−	[63]	地文縄文LR、沈線文	外面に煤付着。	
	51−20		21−14	深鉢	−	−	−	[41]	地文縄文LR、粘土紐貼付文、縄文原体側面圧痕文		
	51−21		24−14	浅鉢	−	−	−	[49]	地文縄文LR、粘土紐貼付文、縄文原体側面圧痕文		
	51−22		17−21	深鉢	−		−	[66]	地文櫛描沈線文、隆起線文、沈線文	胎土に粗砂多量に混入。	
	51−23		19−18	深鉢	−	−	−	[91]	地文撚糸文R、沈線文、刺突文	胎土に骨針混入。外面に煤の付着が顕著。	
	51−24		18−34	深鉢	−	−	−	[54]	粘土紐貼付文、沈線文	外面の被熱が顕著。	
	51−25		22−14	浅鉢	−	−	−	[48]	地文縄文LR、粘土紐貼付文、縄文原体側面圧痕文		
	51−26		24−13	深鉢	−		−	[54]	地文縄文LR、沈線文、刺突文		
	51−27		x−0	浅鉢	−		−	[46]	粘土紐貼付文、縄文原体側面圧痕文	胎土に骨針混入。	
	51−28		x−0	浅鉢	−		−	[47]	地文縄文RL、隆起線区画内縄文充填	内面に炭化物付着。	
	51−29		23−16	深鉢	−	−	−	[39]	粘土紐貼付文、沈線文	内外面の被熱が顕著。剥離著滅。	
	51−30		x−0	深鉢	−	−	−	[42]	地文縄文LR、粘土紐貼付文、縄文原体側面圧痕文	外面に煤付着。	
	51−31		18−36	深鉢	−	−	−	[42]	沈線文	口縁部の装飾突起。外面に煤付着。	
	51−32		x−0	浅鉢	−		−	[28]	沈線文	外面赤彩。	
	51−33		x−0	深鉢	−		−	[88]	地文撚糸文R、沈線文、刺突文	外面に煤着干付着。	

表9　縄文土器観察表（6）

６ 石　　器

今回の中台４遺跡の発掘調査では、4,773点の石器が出土している。このうち剥片素材のいわゆるtoolが465点、磨製石器が417点などのほかは、大半が剥片石器生産にかかわる剥片、石核類である。器種は剥片を素材とするものに石鏃、尖頭器、石錐、石匙、石篦、掻器、削器のほか、剥片の縁辺に簡単な２次調整あるいは使用の際の刃こぼれがみられるものがある。そのほか礫素材の打製石器として打製石斧がある。また磨製石器では磨製石斧、石錘、磨石、凹石が出土している。以下では各器種ごとの分類を中心にその概要を述べる。

石鏃（第47図１～33　図版52）

石鏃は33点が出土した。石材は頁岩12点、鉄石英９点、玉髄７点、黒耀石４点、流紋岩１点が使用されている。これらは基部の形態により大別され、さらに細分できる。

Ⅰ類：基部側に抉り込みのはいるもの。全部で18点の出土がある。

ａ：丸みをおびた深い抉り込みのはいるもの。さらに細分できる。

１．左右対称形となるもの（第47図12～22）。11点が出土した。

２．片脚となるもの（第47図11）。１点が出土した。

ｂ：半円形となる浅い抉り込みがはいるもの。これも同様に細分される。

１．左右対称形となるもの（第47図５・８）。２点が出土した。

２．片脚となるもの（第47図６）。１点が出土した。

ｃ：抉り込みの形が「Ｖ」字状となるもの（第47図９・10）。抉り込みの状態はａよりかなり浅くなる。２点が出土した。

ｄ：基部に凹弧状の僅かな抉り込みがはいるもの（第47図７）。１点が出土した。

Ⅱ類：基部が丸みをおびて突出するいわゆる円基鏃。大きさにより細分される。

ａ：重量が４ｇを超える大形のもの（第47図１）。１点が出土した。

ｂ：重量が２ｇ未満の小形のもの（第47図２・３）。２点が出土した。

Ⅲ類：基部が直線状となるいわゆる平基鏃（第47図４）。１点が出土した。

Ⅳ類：基部に茎をもついわゆる有茎鏃。

ａ：長幅の比率が小さく厚さの薄いもの（第47図25・26）。２点が出土した。

ｂ：長幅の比率が大きく厚さの薄い小形のもの（第47図27）。１点が出土した。

ｃ：長幅の比率が大きく厚みのあるもの（第47図28～30）。比較的大形となる。３点が出土した。

Ⅴ類：基部が大きく突出し、平面形が凸レンズ形となるもの（第47図31）。刃部と基部の境界が不明瞭となる。比較的小形の１点が出土した。

Ⅵ類：折損して基部の形態が不明瞭なものをⅥa（第47図32）。石鏃の未成品と考えられるものをⅥb（第47図33）とした。各１点ずつの出土である。

尖頭器（第48図12　図版52）

両面加工または片面加工によって尖った先端部を作出した石器を尖頭器とした。今回の調査では図示した１点のみの出土である。主要剥離面側の両側縁および背面側の右側縁末端部に２次調整を施して尖頭部を作出している。素材の形をほとんど残している。石錐の未成品の可能性もある。玉髄製。

石錐（第48図34～40、第49図１～11　図版53）

素材となった剥片の縁辺に調整加工を施して、その一端あるいは複数の端部に尖った先端部を作出した石器を石錐とした。全部で23点が出土している。石材は鉄石英が１点、玉髄が１点あるほかは頁岩製である。これらは形態の特徴によって以下のように分類される。

Ⅰ類：長い尖頭部をもつもの。尖頭部の加工が顕著であり、基部との間にノッチがはいるため部位の区別は明瞭である。さらに細分される。

ａ：平面形が左右対称となるもの（第47図35・36、第48図９）。３点が出土した。

ｂ：基部の片側が張り出して左右非対称となるもの（第48図８）。１点が出土した。

Ⅱ類：細長い棒状の形態となるもの（第47図34）。両面加工により長い刃部を作出している。１点が出土した。

Ⅲ類：素材となる剥片の形を大きく変えることなく、短い刃部を作出したもの。素材の形に制約されるため多様な形態をとる。以下のように細分される。

ａ：一端に刃部をもつもの（第47図38～45、第48図１～７・10・11）。17点が出土している

ｂ：二端に刃部をもつもの（第47図37）。１点が出土した。

石匙（第48図13～19、第49図１～８　図版54）

相対する二つのノッチを入れることによって作出されたつまみをもつ石器を石匙とした。全部で15点が出土した。石材は玉髄が１点あるほかは頁岩製である。これらは、つまみと刃部との一関係によって以下のように分類できる。

Ⅰ類：つまみを上方に置いたとき側縁が刃部となる縦形のもの。

ａ：左右が対称形となるもの。先端部の形態によってさらに細分される。

１．両側縁のみの加工であるが、尖頭器のように尖った先端部をもつもの（第48図13・14・17・18、第49図８）。５点が出土した。

２．先端部が幅広となり、ここにも加工があって刃部となりうるもの（第48図15）。１点が出土した。

３．先端部が幅広となるが、折損により加工の認められないもの（第48図16・19）。２点が出土した。

４．両側縁および先端部に一切の加工が認められないもの（第49図１）。１点が出土した。

５．刃部の大半が折損しているため形態の不明瞭なもの（第49図６）。

b：左右が非対称となるもの。

１．左側縁が凹弧、右側縁が凸弧状になるもの（第49図２・３）。

２．左側縁が凸弧、右側縁が凹弧状になるもの（第49図７）。

Ⅱ類：つまみを上方に置いたときその下端が刃部となる横形のもの（第49図５）。左側縁を破損した１点が出土した。

Ⅲ類：Ⅰ・Ⅱ類の中間的な形態となるもの（第49図４）。縦長剥片の両側縁に加工を施し、先端部を尖頭器状に尖らせ、つまみ部を左の打面末端部に設けた、特殊な形態をとるものである。つまみを上方に置いた際には左側縁および下端の縁辺が刃部となる。

石篦（第49図９～13、第50図、第51図　図版55・56）

素材となった剥片の、背面と主要剥離面の両面に加工され、その長軸の末端が刃部になると考えられる一群、また、背面側だけの片面加工であっても、刃部と考えられる末端の刃角が小さく、掻器とはなりえないものもここで扱った。この定義にあてはまる石器は、全部で22点出土している。石材はすべて頁岩が使用されている。これらは、平面的な形、刃部の形態、加工部位の相違により以下のように分類できる。

Ⅰ類：撥形で刃部が片刃状となるもの（第51図３）。素材のほぼ全面が調整加工で覆われるが、刃部の両面に素材面を残す。刃部は丸みをおびる。１点が出土した。

Ⅱ類：短冊形で刃部が片刃状となるもの。

a：両面加工となり調整が素材のほぼ全域に及ぶもの。

１．刃部が丸みをおびるもの（第49図11・12）。２点が出土した。

２．刃部が直線状となるもの（第49図９、第51図９）。２点出土。

b：素材の背面側はほぼ全面が調整加工で覆われるが、主要剥離面側は側縁部のみの加工となり、素材面を大きく残すもの（第50図４　図版55-９）。２点が出土した。刃部は直線状となる。

c：素材の主要剥離面側はほぼ全面が調整加工で覆われるが、背面側は素材面を大きく残すもの（第51図５）。１点が出土した。刃部は丸みをおびる。

d：調整加工が両側縁または刃部に限られ、両面に素材面を大きく残すもの。

１．刃部が丸みをおびるもの（第50図２、第51図２）。２点が出土した。

２．刃部が直線状となるもの（第49図13、第50図３・６、第51図１）。４点が出土した。

Ⅲ類：短冊形で刃部が両刃状となるもの。

a：両面加工となり調整が素材のほぼ全域に及ぶもの。

１．刃部が丸みをおびるもの（第49図10）。１点が出土した。

２．刃部が直線状となるもの（第50図１、第51図５）。２点が出土した。

b：調整加工が刃部のみに施されるもの（第50図５）。１点が出土した。刃部は直線

状となる。

IV類：平面形が撥形にも短冊形にもならないもの（第51図４）。背面側の側縁部および主要剥離面側の刃部に調整加工が施される。刃部は片刃状となる。

V 類：刃部が折損した基部資料を一括する（第51図６～８・10）。４点が」出土した。いずれも短冊形の基部になると考えられる。

掻器（第52図～第55図　図版57～60）

急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を掻器とした。この定義にあてはまる石器は全部で24点出土している。刃部の作出に際しては樋状剥離が多用される。素材は縦長剥片を用いたものが多い。石材はすべて頁岩が用いられている。刃部の位置と数および形態により以下のように分類される。

Ⅰ類：縦長剥片が素材として用いられ、その３縁辺が刃部となりうるもの（第52図１・２・４～９、第53図８・14・15、第54図２・８）。12点が出土した。

Ⅱ類：縦長剥片が素材として用いられ、その左側縁と末端が刃部となりうるもの（第52図３・11）。２点が出土した。

Ⅲ類：素材の長軸先端部に刃部を作出したもの（第53図３、第54図３・４）。３点が出土した。

IV類：素材の外周すべてが刃部となりうるもの（第82図５）。１点が出土した。

V 類：素材の一端に大きなノッチを作出し、刃部とするもの（第55図１～４・６・７）。６点が出土した。

削器（第52図～第55図　図版57～60）

剥片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出した石器を削器とした。全部で59点の出土がある。素材は縦長、横長の剥片のほか、切断されたものや砕片など、製作の条件にあわせて種々のものを選択している。形態は素材の形を大きく変えることがないため不定形である。また、加工部位も、背面側、主要剥離面側の両側縁および末端に多様な組み合わせが存在する。調整加工も通常剥離のほか、樋状剥離も多用される。石材は鉄石英が２点、玉髄が１点あるほかは、すべて頁岩である。

石核（第56図～第74図　図版61～64）

剥片石器の製作において、母岩からの剥片剥離工程の最終段階で放棄された残核である。全部で60点が出土している。母岩とした石材の大きさや剥片剥離工程の数、作業面の選択など、技術的にはかなりのバリエーションがあるが、多くは多方向からの剥離面で構成されており、頻繁に打面転位を繰り返す剥片剥離技術の存在が看取される。石鏃などの実際のtoolでは鉄石英、玉髄、黒耀石など多用な石材の選択がおこなわれているが、今回得られた資料の石材はすべて頁岩であった。

打製石斧（図版67）

扁平な礫または強度の高い大形の剥片を素材として加工を施し縁辺または長軸の一端に刃部を作出している石器を打製石斧とした。この定義にあてはまる石器は3点出土している。石材には凝灰岩質（図版68－6・7）、安山岩質（68－8）が用いられる。

図版68－6は厚手の貝殻状の剥片を素材として縁辺部に加工される。刃部と思われる先端部は主要剥離面側からも加工が施される。

図版68－7は刃部となる長軸の先端部が掻器のような急角度の加工が施される。基部は主要剥離面側からも加工がみられる。粒子が粗めの石材を用いた大形の円形掻器の未成品とも考えられる。

図版68－8は背面側の側縁および先端部、主要剥離面側の先端部に粗い調整加工が施される。形態はいずれも不定形となる。

磨製石斧（図版67）

磨製石斧は破片資料も含めて全部で16点の出土があった。このうち完形品は4点のみである。これらも刃部の刃こぼれや磨滅が顕著である。破損したものは着柄の状態によるものであろうが、中央から刃部に近いところで折れたものがほとんどで、斜方向に折損しているのは図版67－2の1点のみである。石材は安山岩質のものが目立つ。製作技術の側面からみると、両側縁を面取りする、いわゆる定角式磨製石斧がほとんどである。

図版67－12は扁平な小礫の表裏面にのみ研磨を加え、ほぼ素材の原形を利用したもの。

図版67－15は、横断面形が楕円形となるいわゆる乳棒状石斧に近い形態となるが、研磨の工程が簡略化され、表裏面全体および両側縁に敲打痕を明瞭に残している。刃部はさらに潰れており、敲石に転用された可能性もある。

図版67－11は、全面に精緻な研磨が施されるが、刃部は研磨の途中で放棄されている。

重量は、完形の最も小形のもので図版67－10が47g、図版67－11が41gで、最大のものは折損品ではあるが図版67－16が残存値345gを測る。大小の幅はかなり大きいが、破損品の観察から、出土した磨製石斧の大半は200～300gのものが主体になると推測される。

敲石（図版68 1～5）

棒状あるいは楕円形の礫の端部に敲打痕をもつ石器である。今回の調査で得られた資料でこの定義に合致するのは図版68－4の1点のみである。ここでは解釈を拡大して、敲打痕あるいは調整加工とは考えられない剥離痕をもつ棒状あるいは楕円形の扁平な礫も敲石の範疇で捉える。いずれもハンマーとして使用されたものと考えられる。石材は1～4は安山岩質、5は凝灰岩質である。

図版68－1・2は折損品であるがいずれも表裏面には磨滅した剥離痕が認められ、両側縁には細かな敲打痕が密に観察される。形態からは磨製石斧の破損品とも考えられる。

図版68－3も1・2と同様な加工が施されるが、長軸の両末端部は磨滅が顕著に認められる。

平面形からこれも磨製石斧の未成品からの転用にもみられるが、横断面形は蒲鉾形を呈する。機能的には特殊な形態の磨石とも考えられる。

図版68－4は、打製石斧の製作技法に類似する剥離を表裏面に有するが、著しい磨滅が認められ、側縁および両端には敲打痕が明瞭に残る。基部は被熱のためか煤状の付着物が顕著に認められる。

図版68－5は、扁平な楕円形の礫の表裏面におおまかな剥離が認められるものである。おそらく原形のままハンマーとして一時的に使用されたものと考えられる。

石錘（図版65・66）

扁平な楕円形を呈する礫の長軸の両端に刻みを入れた石器を石錘とした。この定義に合致するものは131点出土している。製作技術面では、得られた資料のすべてが礫の両端に幅1～3mm、深さ2mm前後の刻みを研ぎ出すことによって作出しただけの単純なものである。重量は最大のもので図版65－23が170g、最小のものが図版66－1で5gを測り、ばらつきが大きいが、20～60gのものがもっとも多い。

凹石（図版69～72）

河原石の表面に敲打によると考えられる凹痕をもつもので、69点が出土した。重量400～500gの円または楕円形で、やや扁平な礫を素材として、表裏両面に1～2個の凹痕をもつものが最も多い。

磨石

河原石が石皿などと組み合わされて使用された結果、礫面に磨痕をもつに至った石器である。全部で195点が出土した。今回得られた資料は、礫面の全体を磨面として使用された可能性をもつもので、平面形が楕円または円形で断面楕円形を呈するものが大半を占める。

石皿

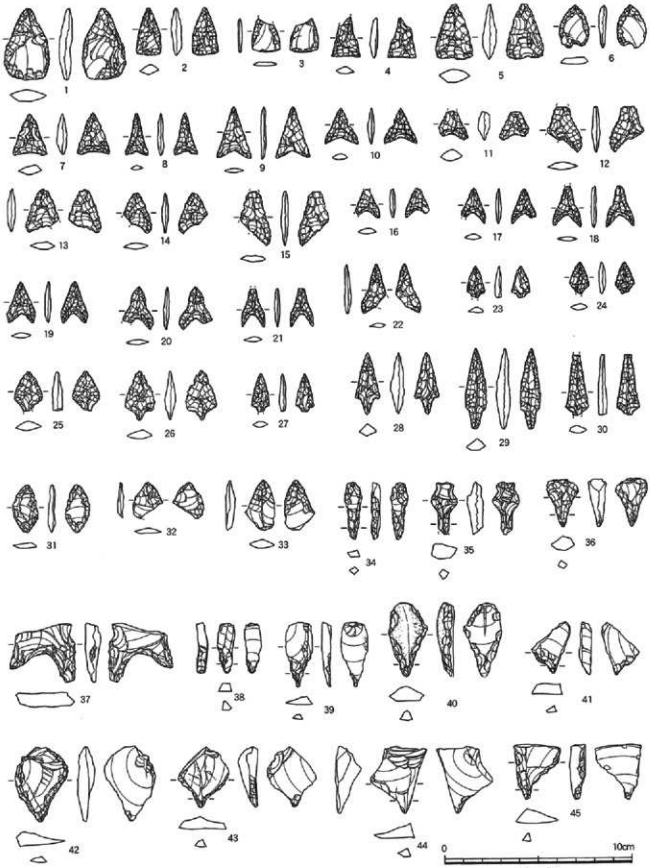
扁平で大形の河原石の一面あるいは2面に磨面をもつ石器である。全部で3点が出土した。

7　土製品・石製品

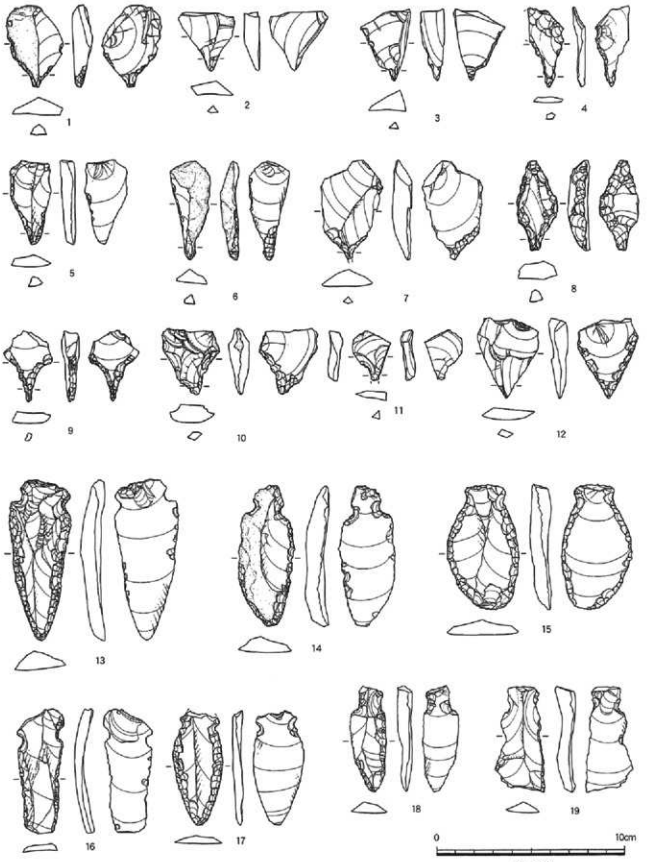
土製品・石製品は出土数量が極端に少ない。

土製品では凸面に渦巻き状の沈線が描出されたスプーン状の土製品の破片が1点、土器片の周囲を円形に打ち欠いた円盤状土製品が2点出土したのみである。円盤状土製品はいずれも地文に撚糸文が施文されたものでもともと同一個体であった可能性が高い。

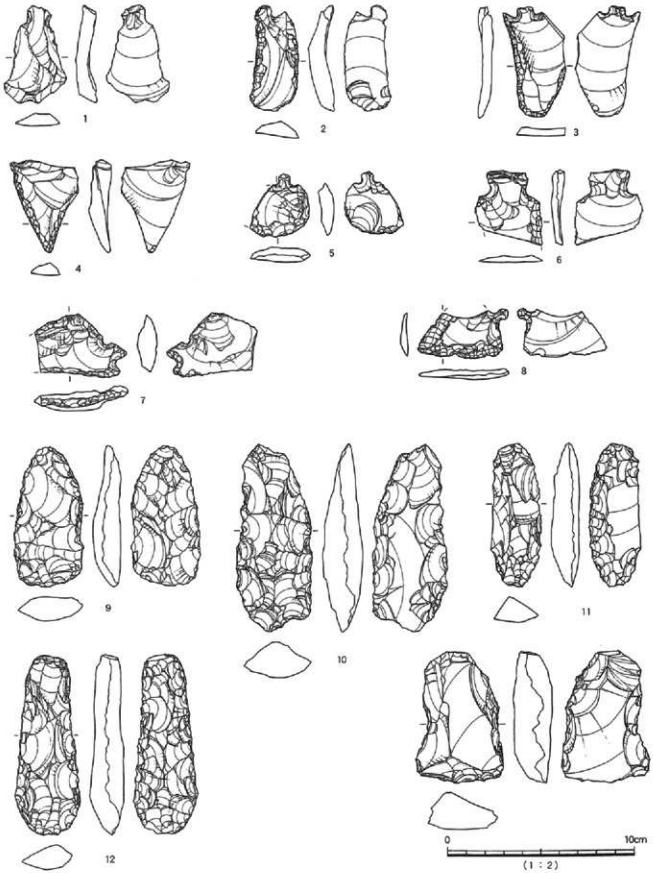
石製品では石棒の破片が6点出土した。このうち最大のものは、ST57堆積土上面から出土したもので、大形の礫の表面に敲打を加えて直径150mmの円筒形に整形されるが詳細は不明である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
10cm
(1：2)

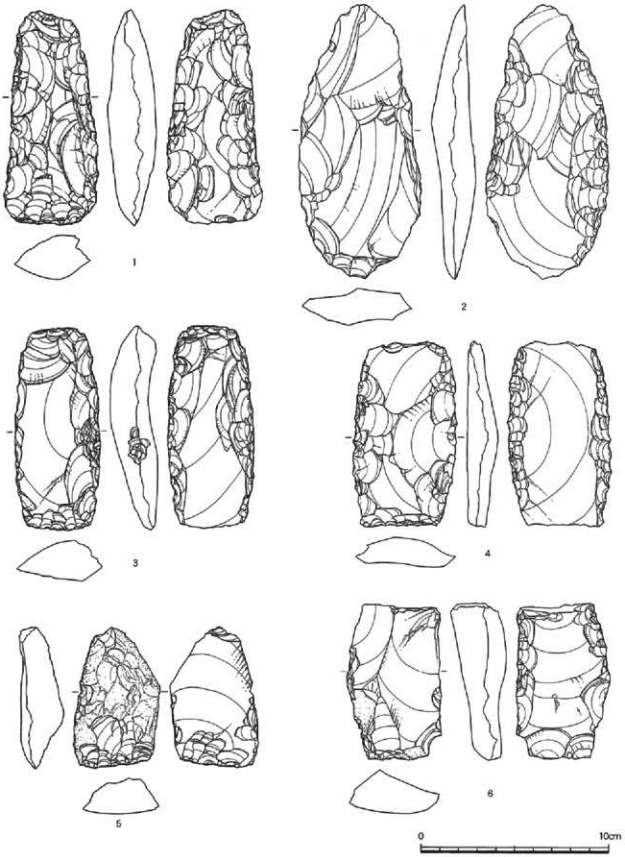
第47図　石器（1）



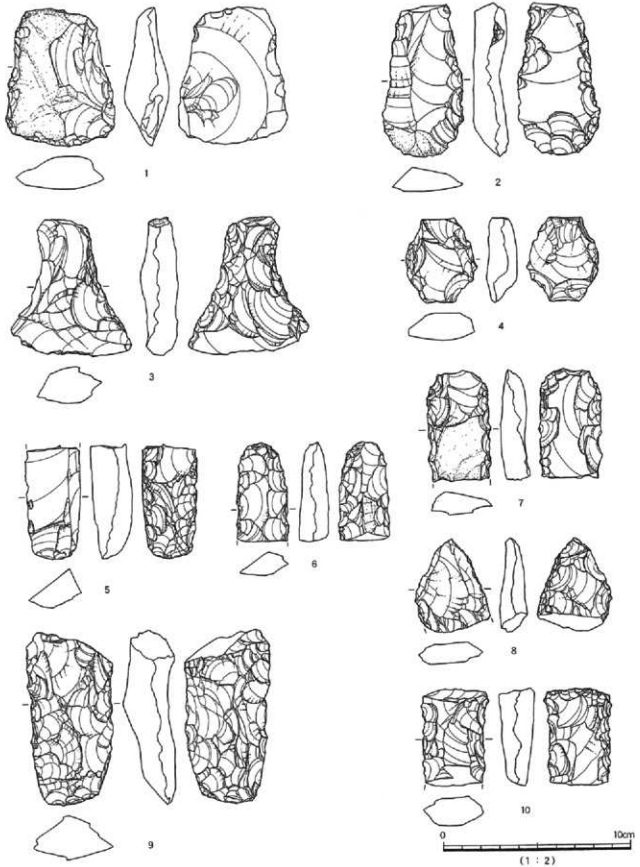
第48図　石器（2）



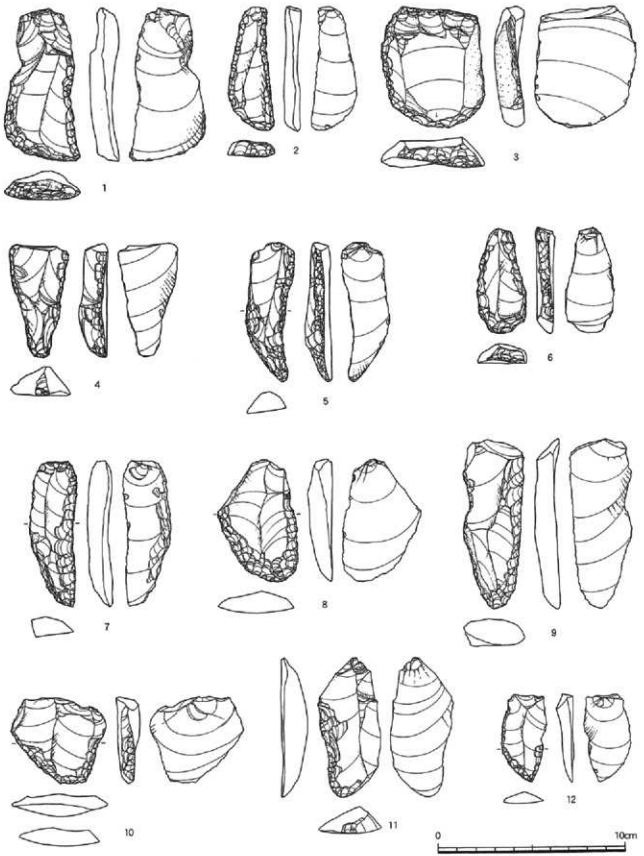
第49図　石器（3）



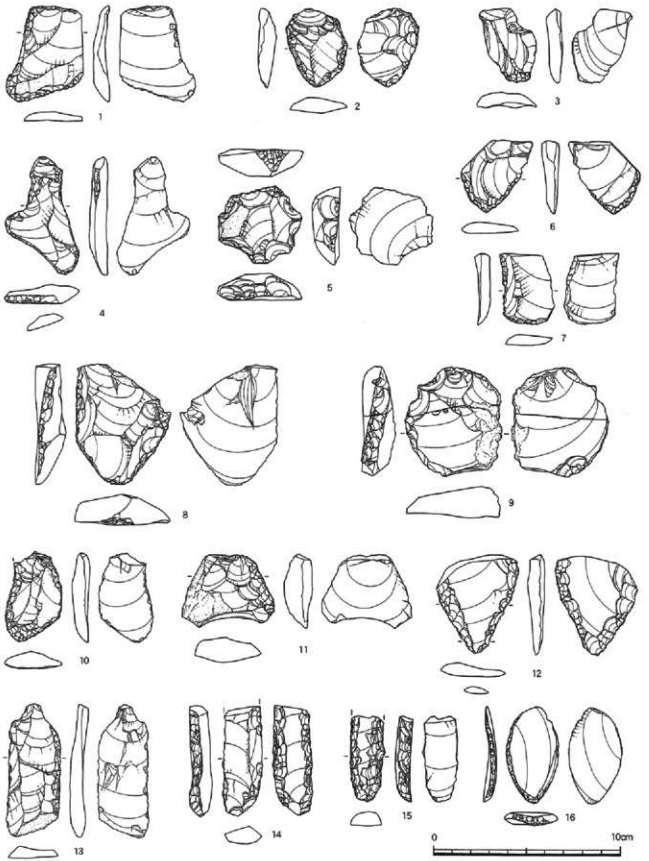
第50図　石器（4）



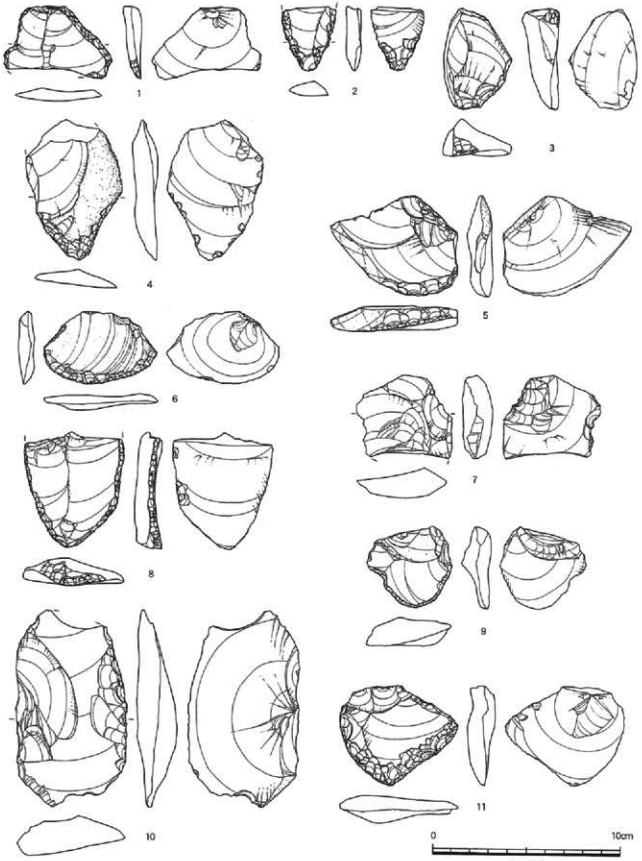
第51図　石器（5）



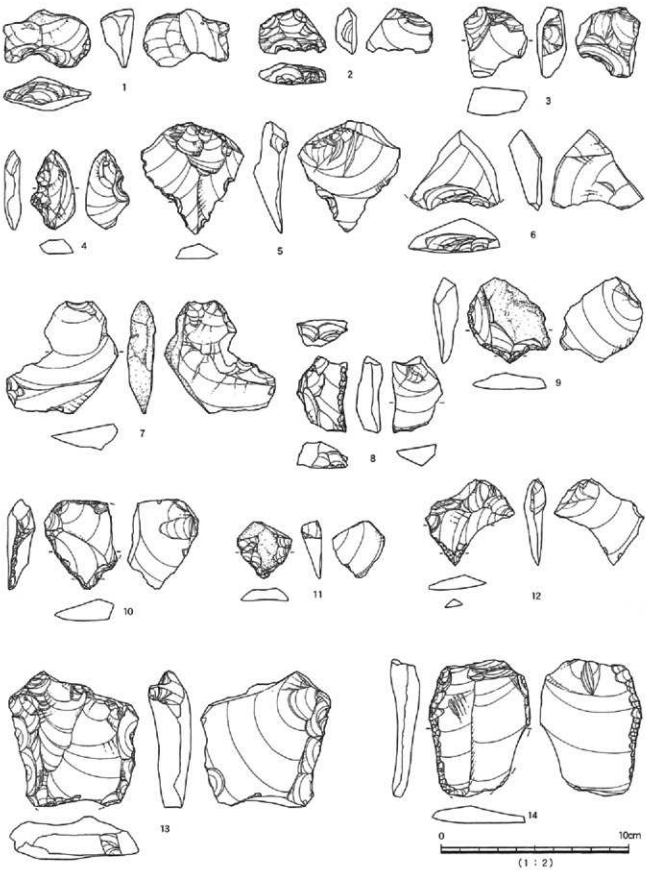
第52図　石器（6）



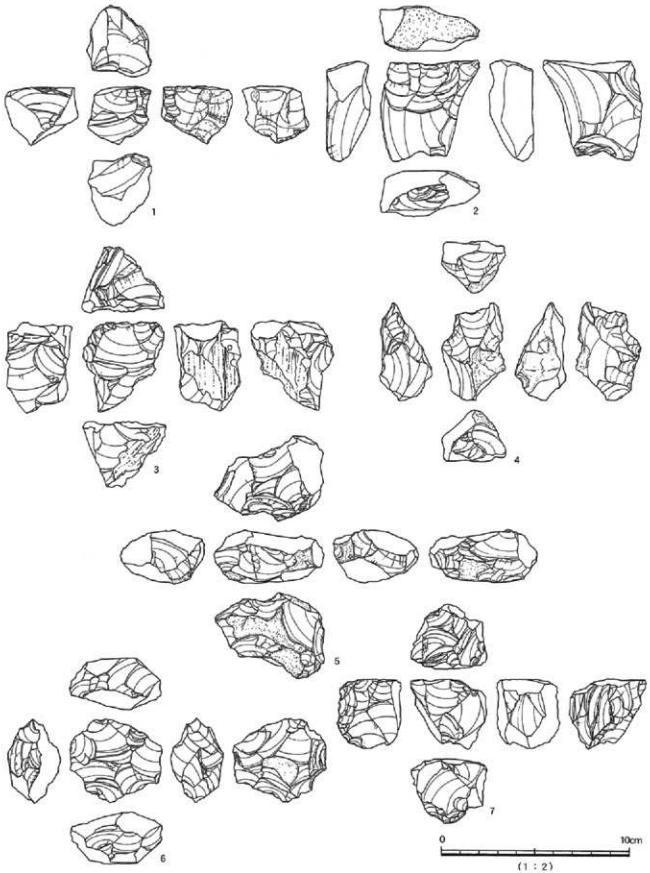
第53図　石器（7）



第54図　石器（8）

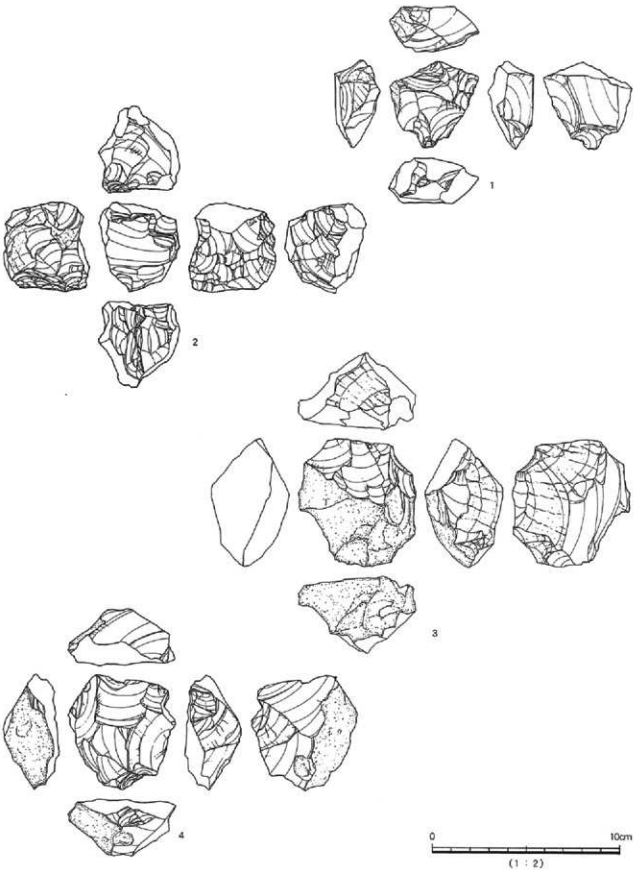


第55図　石器 (9)

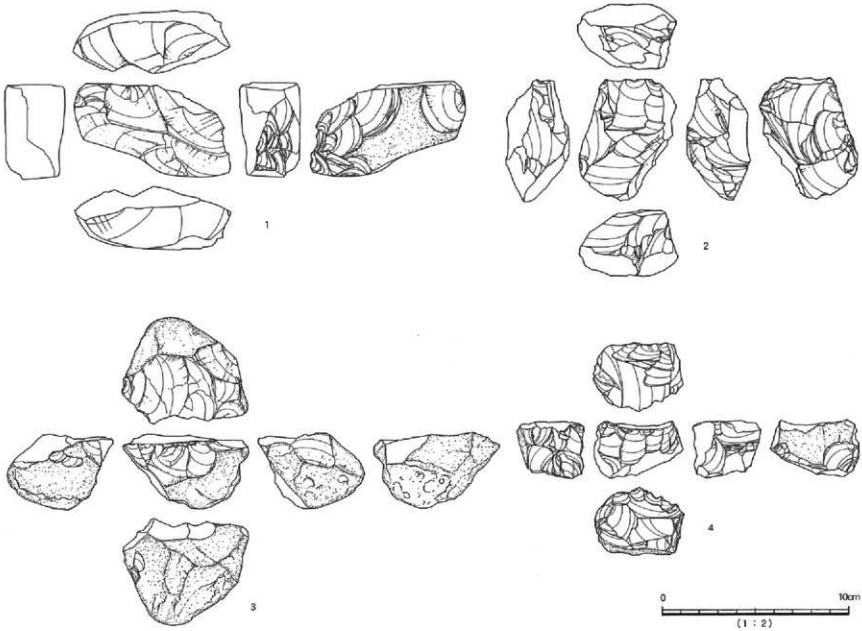


第56図　石器（10）

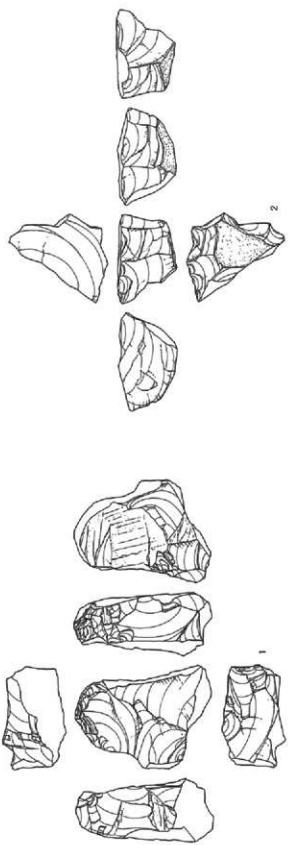
第57図　石器（11）



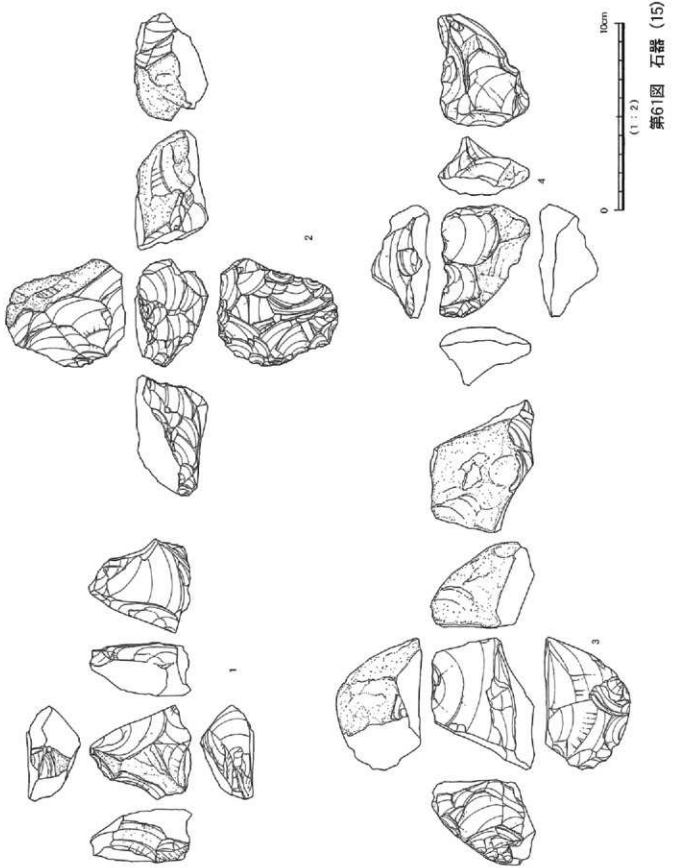
第58図　石器（12）



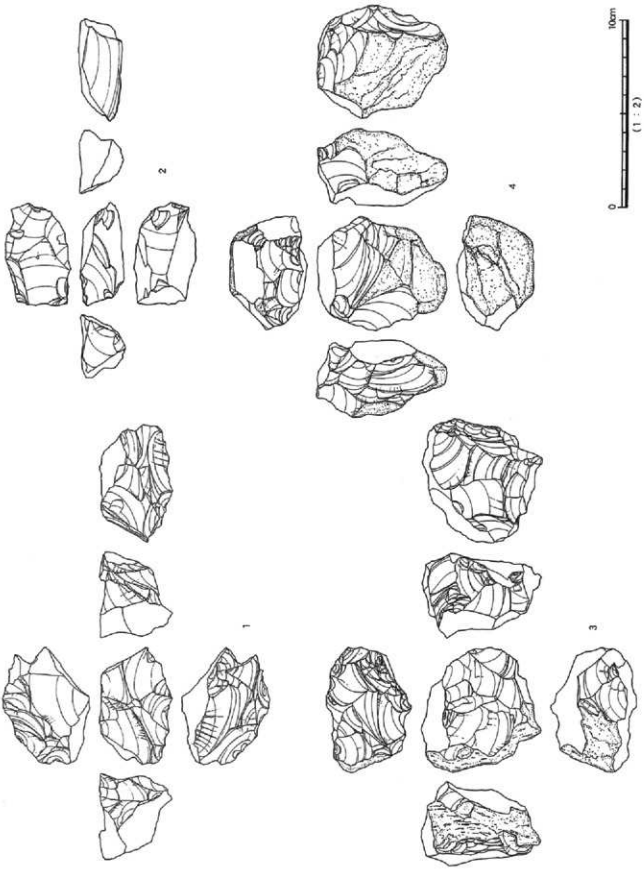
第59図　石器（13）



第60図　石器（14）

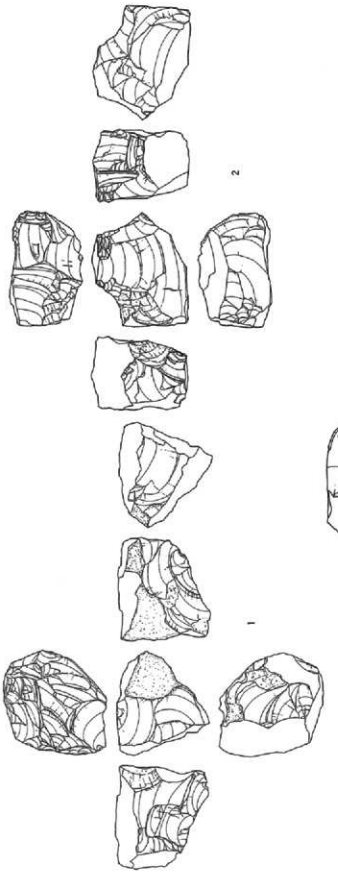


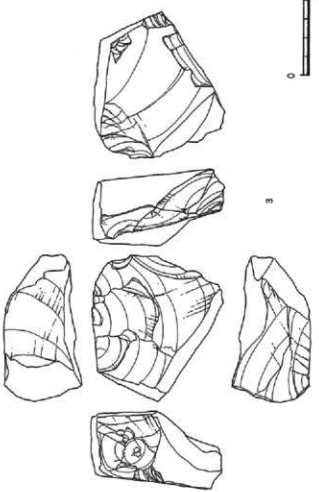
第61図　石器 (15)



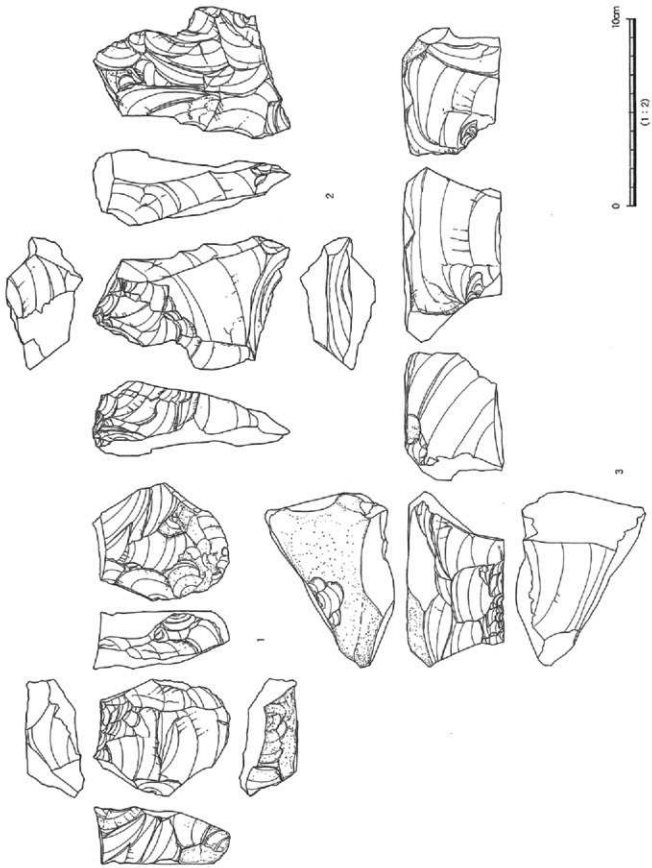
第62図　石器（16）

第63図　石器（17）

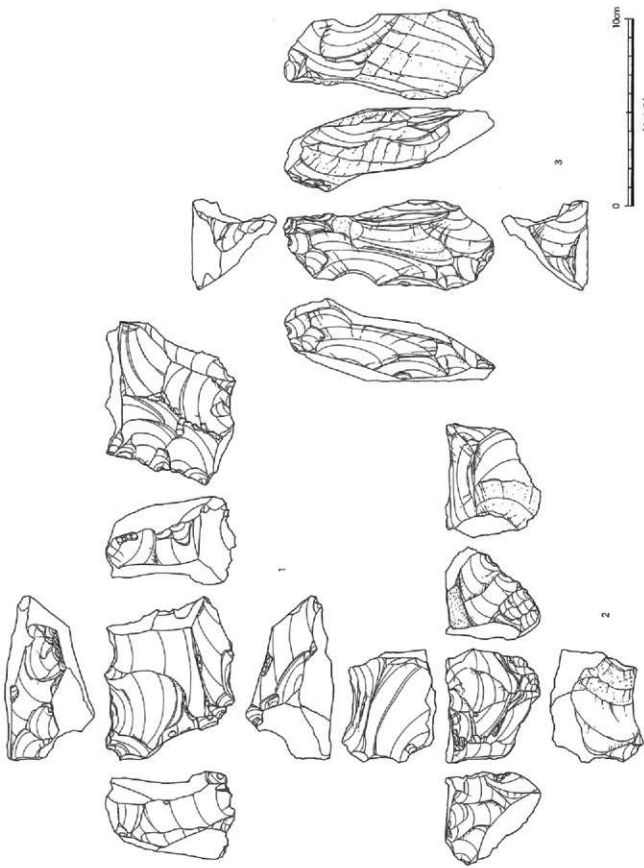




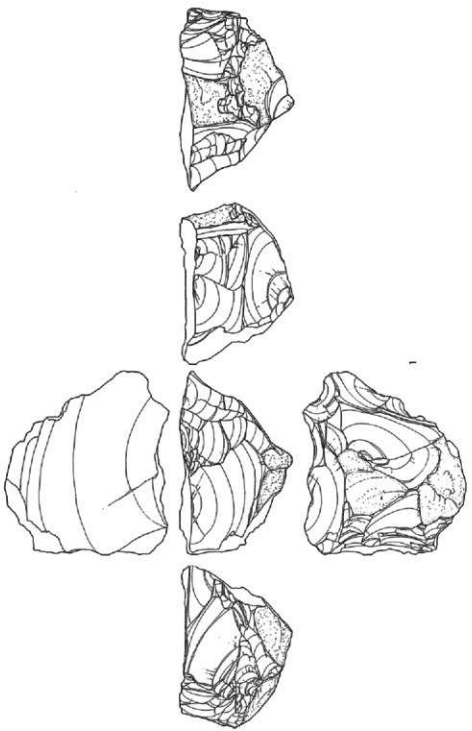
第64図　石器（18）



第65図　石器（19）

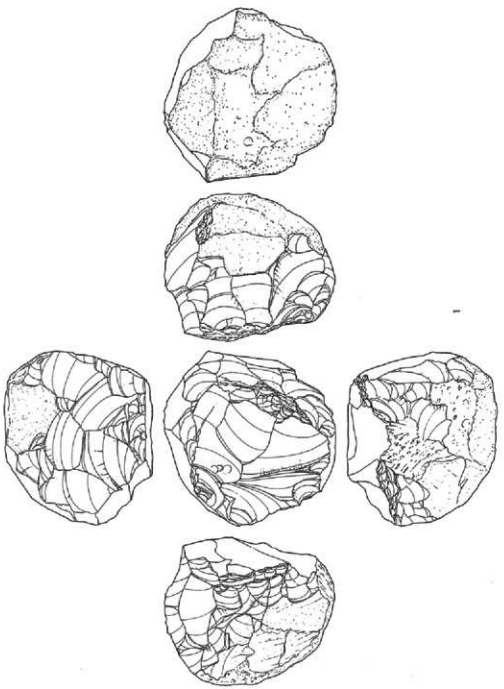


第66図　石器（20）



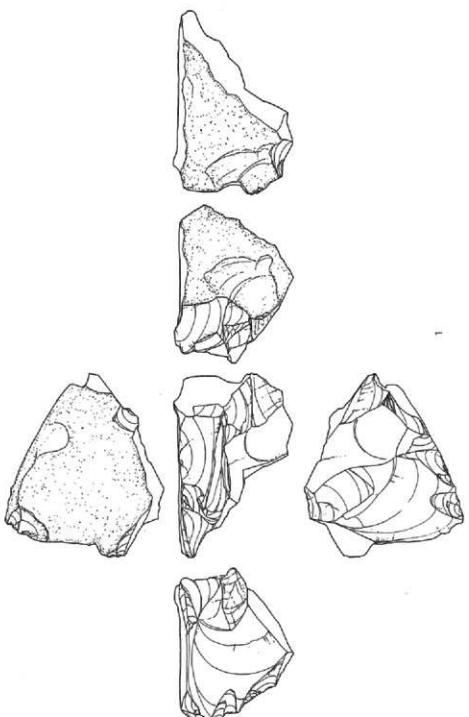
0　10cm
(1:2)

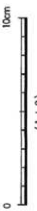
第67図　石器 (21)



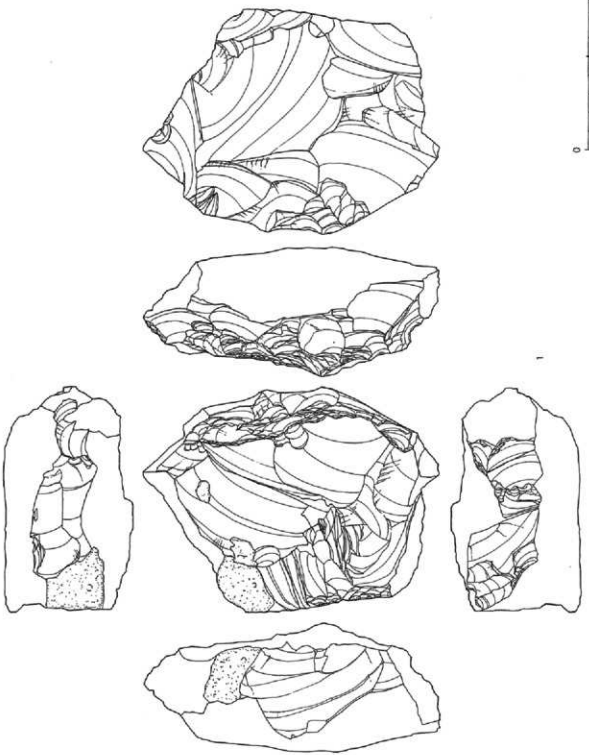
0　10cm
(1：2)

第68図　石器 (22)

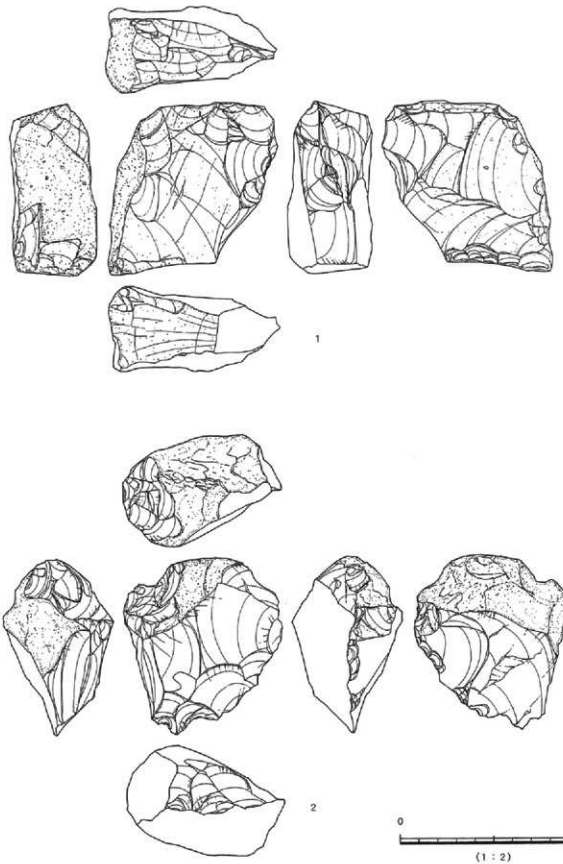




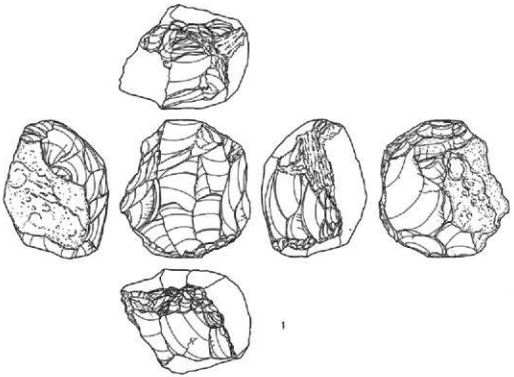
第69図　石器（23）

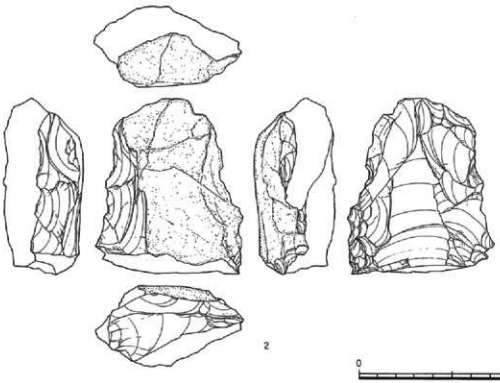


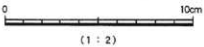
第70図　石器 (24)



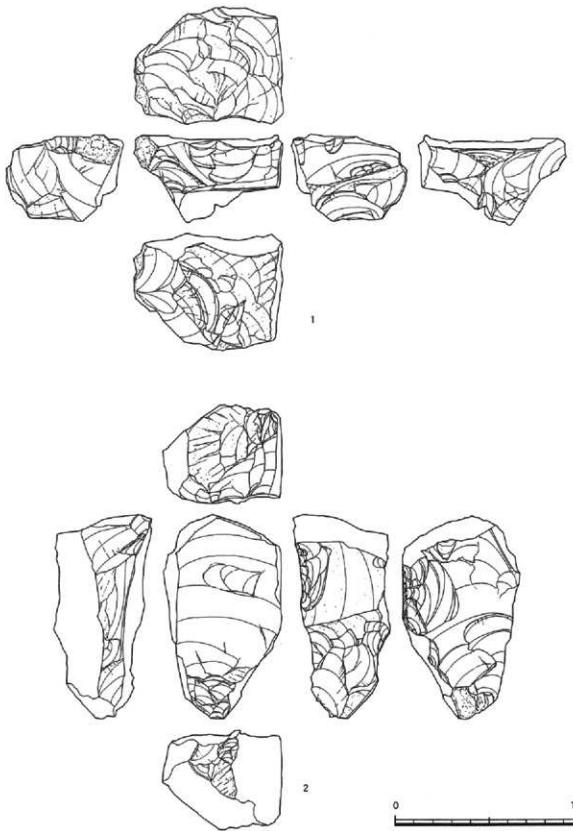
第71図　石器（25）



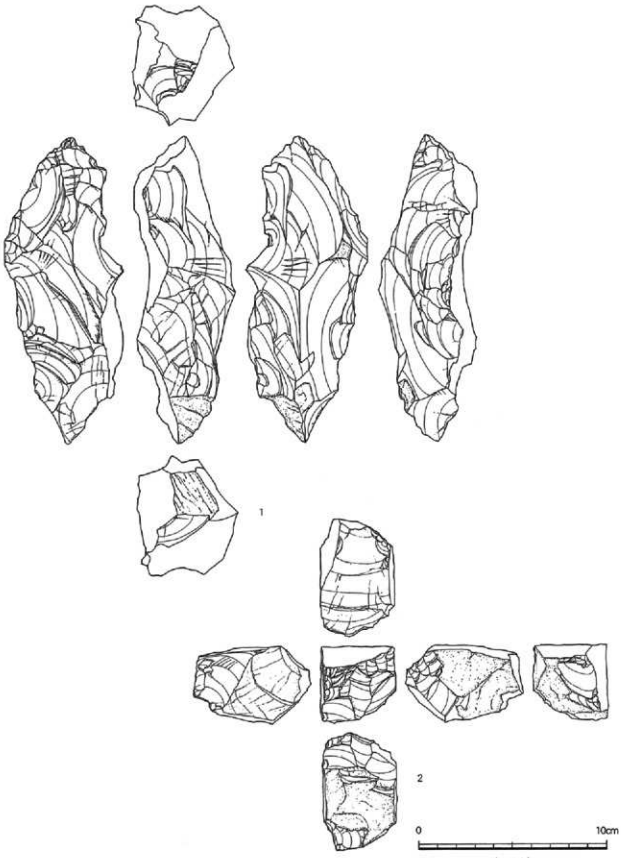




第72図　石器（26）



第73図　石器（27）



第74図　石器（28）

石鏃

神	図	図	版	出 土 区	石 材	大きさ (mm) 長	幅	厚	重量 (g)	色 調	欠 損
	1	112	8	ST60・12-42	鉄石英	37.5	23.3	5.9	4.98	赤褐色	
	2	112	30	X-0	凝灰岩	24.9	13.1	5.0	1.54	灰褐色	
	3	112	6	ST58・9-43	頁 岩	17.7	15.1	2.0	0.61	灰黄褐色	尖端部
	4	112	33	X-0	玉 髄	21.0	14.9	4.0	0.94	明黄褐色	尖端部
	5	112	20	13-41	頁 岩	29.0	19.8	7.2	3.27	灰黄褐色	尖端部
	6	112	4	ST58・8-43	頁 岩	22.1	15.8	4.0	1.44	灰褐色	
	7	112	27	18-34	鉄石英	21.7	17.3	5.0	1.46	明褐色	
	8	112	1	ST57・12-41	鉄石英	22.1	12.2	3.1	0.55	明褐色	
	9	112	7	ST59・8-44	頁 岩	27.5	18.0	2.1	0.82	灰黄褐色	
第	10	112	18	10-34	黒曜石	19.1	17.5	3.1	0.57	黒色	
	11	112	15	9-31	鉄石英	14.5	15.0	6.0	1.11	赤褐色	尖端部・かえし
	12	112	22	17-34	玉 髄	24.0	18.0	4.0	1.15	白色・赤褐色	尖端部・かえし
	13	112	23	17-34	鉄石英	22.5	17.0	3.8	1.19	赤褐色	尖端部・かえし
	14	112	25	18-34	玉 髄	21.0	15.9	3.0	0.73	黒色・透明	かえし
	15	112	24	18-34	鉄石英	28.6	16.6	3.9	1.28	赤褐色	尖端部・かえし
	16	112	16	9-37	頁 岩	15.5	12.9	2.8	0.36	灰色	尖端
47	17	112	17	10-23	黒曜石	19.0	13.0	2.9	0.40	黒色	かえし
	18	112	31	X-0	頁 岩	21.2	14.9	2.5	0.52	茶褐色	尖端部
	19	112	2	ST57・13-42	黒曜石	22.2	15.0	3.0	0.73	黒色	
	20	112	26	18-34	鉄石英	22.6	16.9	2.8	0.60	赤褐色	かえし
	21	112	34	X-0	玉 髄	20.0	12.2	2.9	0.42	白色	尖端部
	22	112	11	SG1・23-39	鉄石英	25.5	12.9	3.0	0.62	赤褐色	かえし
	23	112	29	X-0	玉 髄	16.6	9.4	3.4	0.43	白色	
	24	112	14	SG1・14-46	黒曜石	16.8	10.0	3.4	0.46	黒褐色	基部
	25	112	12	SG1・25-42	頁 岩	20.6	14.4	5.0	1.32	灰青褐色	基部
	26	112	10	SG1・33-35	玉 髄	26.0	15.8	5.2	1.46	白色	
	27	112	32	X-0	玉 髄	19.8	9.8	3.0	0.52	白色	基部端部
	28	112	21	13-49	頁 岩	32.6	13.1	7.0	1.52	灰褐色	
	29	112	28	13-36	頁 岩	42.0	11.0	7.0	2.41	灰黄褐色	基部端部
	30	112	13	SG1・11-48	頁 岩	31.9	12.0	4.2	1.24	灰褐色	尖端部・基部
	31	112	9	SK61・11-43	頁 岩	25.3	13.6	3.8	1.15	黒褐色	
	32	112	3	ST57・13-42	鉄石英	19.0	15.8	2.8	0.71	赤褐色	基部
図	33	112	5	ST58・9-43	頁 岩	26.0	16.0	5.0	1.58	灰色	基部

石錐

神	図	図	版	出 土 区	石 材	大きさ (mm) 長	幅	厚	重量 (g)	色 調	欠 損
	34	114	4	SK25・13-46	頁 岩	29.5	8.6	4.2	1.18	白色	尖端部・基部
	35	114	15	13-49	頁 岩	27.2	14.0	7.0	2.04	黒褐色	尖端部
第	36	114	13	10-28	頁 岩	24.4	16.4	8.0	2.47	黄褐色	
	37	114	2	SG1・12-49	頁 岩	30.9	35.2	7.0	6.60	黒褐色	尖端部・基部
	38	114	1	ST58・8-43	鉄石英	25.6	8.5	4.5	1.23	茶色	尖端部・基部
47	39	114	12	11-30	頁 岩	33.1	14.2	4.2	1.90	灰白色	尖端部
	40	114	8	10-27	頁 岩	38.2	20.5	8.8	5.68	灰褐色	
	41	114	7	10-24	頁 岩	27.0	20.6	5.4	2.62	黄白色	尖端部・基部
	42	114	14	10-30	頁 岩	39.1	27.5	8.1	7.13	灰色	
図	43	114	10	10-35	頁 岩	31.8	25.3	9.3	5.28	黒褐色	基部
	44	114	5	SK126・17-19	頁 岩	35.2	31.0	12.9	6.65	明黄褐色	
	45	114	6	9-31	頁 岩	28.1	24.8	7.4	4.08	灰黄褐色	尖端部
	1	114	3	SG1・21-43	頁 岩	42.2	31.5	8.6	9.19	茶褐色	尖端部・基部
	2	114	9	10-30	頁 岩	31.0	30.7	7.1	6.05	灰褐色	
第	3	114	11	11-25	頁 岩	37.5	27.4	13.3	9.29	黒褐色	
	4	114	16	13-49	頁 岩	42.1	18.0	4.0	2.18	黒褐色	
	5	114	21	X-0	頁 岩	44.7	21.9	6.1	5.94	黒褐色	
48	6	114	22	X-0	頁 岩	52.1	21.5	7.9	6.98	暗褐色	
	7	114	23	X-0	頁 岩	49.9	32.1	9.0	12.17	黒褐色	
	8	114	19	X-0	頁 岩	47.3	20.8	9.6	9.52	褐色	尖端部
図	9	114	17	19-35	頁 岩	37.0	25.8	7.2	5.50	黒褐色	
	10	114	20	X-0	玉 髄	27.9	29.0	10.0	8.95	赤色・透明	
	11	114	18	20-15	頁 岩	25.8	20.2	5.1	2.55	灰黄褐色	尖端部・基部
	12	112	19	11-19	玉 髄	41.1	31.7	7.0	8.64	黄褐色	

石匙

神	図	図	版	出 土 区	石 材	大きさ (mm) 長	幅	厚	重量 (g)	色 調	欠 損
	13	116	13	X-0	頁 岩	83.0	35.0	10.0	26.30	灰色	
第	14	116	2	ST58・8-43	頁 岩	74.0	29.2	8.8	21.01	褐色	
	15	116	3	ST58・8-43	頁 岩	65.9	37.6	10.0	24.03	黒褐色・透明	
48	16	116	4	ST59・8+42	頁 岩	63.8	32.5	4.1	9.15	黒褐色	尖端部
	17	116	8	9-36	頁 岩	59.6	26.5	4.4	7.18	褐色	
図	18	116	12	X-0	頁 岩	55.0	19.4	7.5	6.61	灰黄褐色	
	19	116	7	SK141・25-12	頁 岩	55.0	25.0	10.1	9.91	褐色	刃部

表10 石器計測表（1）

石匙（2）

挿図	図版		出土区	石材	大きさ (mm) 長	幅	厚	重量 (g)	色調	欠損
第49図	116	1	ST58・9－43	玉髄	52.0	32.7	8.6	10.13	黄白色・透明	
	116	15	X－0	頁岩	52.5	37.0	9.3	12.77	黒褐色	
	116	6	SD110・21－16	頁岩	59.0	31.3	4.3	9.83	褐色	
	116	10	11－21	頁岩	44.0	44.5	8.5	11.88	茶褐色	
	116	14	X－0	頁岩	33.8	30.2	7.0	7.00	褐色	つまみに近い刃部
	116	9	12－28	頁岩	44.1	41.2	10.0	14.46	灰黄褐色	先端部
	116	5	SG1・17－47	頁岩	39.8	36.0	5.8	6.91	暗褐色	
	116	11	X－0	頁岩	51.0	32.0	4.1	5.43	灰黄褐色	

石鏃

挿図	図版		出土区	石材	大きさ (mm) 長	幅	厚	重量 (g)	色調	欠損
第49図	9	12	X－0	頁岩	73.2	36.0	13.2	38.95	明灰褐色	
	10	7	ST58・10－43	頁岩	97.5	38.0	19.9	67.38	灰色	
	11	3	SG1・9－49	頁岩	76.2	26.1	13.8	27.23	暗褐色	
	12	3	X－0	頁岩	93.0	34.0	16.8	49.93	灰褐色	
	13	7	9－36	頁岩	70.2	45.0	19.4	67.67	灰黄褐色	
第50図	1	56	10－26	頁岩	111.6	48.9	25.0	123.85	灰白色	
	2		X－0	頁岩	144.5	73.5	18.5	170.50	灰色	
	3	56	1	SG1・14－46	頁岩	106.4	44.5	20.2	106.14	青褐色
	4	56	4	10－43	頁岩	98.1	53.5	12.1	80.82	明灰褐色
	5	55	1	ST57・12－42	頁岩	74.3	44.4	20.9	68.95	黒褐色
	6			ST58・10－43	頁岩	80.9	49.0	24.9	99.87	灰褐色
	1			X－0	頁岩	71.9	56.9	21.0	83.08	灰褐色
	2	55	8	17－28	頁岩	79.9	42.3	16.1	65.82	暗褐色
	3	56	2	SG1・1－942	頁岩	70.3	63.0	17.0	58.98	明茶褐色
	4	55	11	X－0	頁岩	44.0	37.3	14.1	26.90	灰褐色
	5	55	2	ST58・9－43	頁岩	58.0	29.0	16.3	36.51	灰褐色
	6	55	4	SK96・32－25	頁岩	51.0	25.6	14.0	19.22	黒褐色
	7	55	10	X－0	頁岩	56.8	32.8	19.4	25.87	灰褐色
	8	55	5	8－50	頁岩	48.5	36.4	13.1	19.01	褐白色
	9	56	8	X－0	頁岩	90.7	45.0	23.0	95.61	黒褐色
	10	55	6	9－35	頁岩	50.6	35.0	15.2	32.02	先端部・基部
		55	9	25－13	頁岩	37.8	39.5	14.0	22.84	灰色

掻器・削器（1）

挿図	図版		出土区	石材	大きさ (mm) 長	幅	厚	重量 (g)	色調	欠損
第52図	1	58	14	24－13	頁岩	78.9	48.0	10.0	36.29	褐色
	2	57	16	ST57・11－41	頁岩	64.0	24.0	7.6	11.33	褐色
	3	58	18	23－13	頁岩	62.0	55.5	11.5	54.96	灰白色
	4	57	17	X－0	頁岩	57.9	31.1	14.2	16.05	黄褐色
	5	57	14	17－17	頁岩	72.9	24.0	12.5	20.46	褐色
	6	57	12	X－0	頁岩	54.2	25.9	9.6	14.50	明褐色
	7	58	15	X－0	頁岩	76.0	27.0	11.7	24.06	灰褐色
	8	58	11	11－33	頁岩	64.0	39.5	12.7	27.96	灰白色
	9	58	16	SK47・26－32	頁岩	89.3	31.5	9.5	29.38	暗褐色
	10	58	5	X－0	頁岩	49.6	49.5	10.9	22.11	褐色
	11	57	18	ST57・12－47	頁岩	73.2	32.0	13.1	26.83	灰褐色
	12	57	1	ST57・13－42	頁岩	45.2	23.0	9.4	6.93	灰黄褐色
第53図	1	57	21	11－21	頁岩	50.0	39.0	6.1	13.05	暗褐色
	2	57	7	10－30－	頁岩	42.9	31.0	8.3	11.44	黒褐色
	3	60	13	SG1・10－38	頁岩	41.0	26.0	6.7	7.16	灰黄褐色
	4	59	15	11－20－	頁岩	43.6	52.0	6.9	11.86	灰黄褐色
	5	59	14	ST57・12－41	頁岩	43.1	40.3	13.0	24.86	黒褐色
	6	57	9	10－27	頁岩	26.9	44.1	8.6	10.86	黒褐色
	7	59	12	X－0	頁岩	39.8	27.1	5.8	7.55	灰黄褐色
	8	58	8	ST57・12－48	頁岩	62.8	51.5	13.8	44.56	暗赤褐色
	9	59	18	ST58・7－43	頁岩	31.0	45.1	15.2	19.96	灰黄褐色
	10	59	18	ST58・9－42	頁岩	35.0	50.4	16.1	33.55	明灰黄褐色
	11	57	4	SK126・18－19	頁岩	47.5	31.8	8.2	10.72	褐色
	11	59	13	ST54・17－34	頁岩	36.9	47.2	14.8	25.64	灰黄褐色
	12	57	22	ST57・11－41	頁岩	47.3	44.5	7.5	16.06	暗褐色
	13	57	15	19－21	頁岩	69.6	27.6	7.0	14.30	灰白色
	14	59	6	24－13	頁岩	57.9	20.0	10.2	14.13	灰色
	15	59	7	X－0	頁岩	45.0	17.8	7.4	8.42	暗褐色
	16	57	8	SG1・11－46	頁岩	50.4	27.5	3.2	5.80	灰黄褐色
第54図	1	58	4	24－13	頁岩	37.5	57.3	7.8	13.45	暗褐色
	2	57	6	X－0	頁岩	33.9	27.4	7.6	6.63	灰白色
	3	59	1	X－0	頁岩	52.7	35.5	16.5	26.97	灰色

表11　石器計測表（2）

礫器・削器（2）

挿	図	図版	出土区	石材	大きさ（mm） 長	幅	厚	重量（g）	色調	欠損
第64図	4	57	19	16−19	頁岩	74.1	50.1	10.2	36.55	褐色	
	5	59	17	17−17	頁岩	49.8	70.0	12.8	38.69	褐色	
	6	58	3	X−0	頁岩	59.0	38.9	6.1	15.95	暗褐色	
	7	59	19	ST57・12−41	頁岩	50.0	48.5	14.6	30.44	黒褐色	
	8	58	10	ST59・8−43	頁岩	60.9	52.0	11.5	32.54	灰褐色	基部
	9	58	1	17−21	頁岩	40.0	44.0	13.7	17.62	黒褐色	
	10	60	19	X−0	頁岩	101.7	58.0	19.2	96.48	灰褐色	
	11	58	12	SK47・26−32	頁岩	51.1	61.9	10.8	31.07	暗褐色	基部
第55図	1	59	9	SK96・32−25	頁岩	28.3	44.6	15.6	17.35	暗褐色	
	2	60	9	SD110・21−17	頁岩	23.2	34.0	10.6	8.14	明褐色	
	3	59	3	X−0	頁岩	33.1	35.0	15.0	17.50	黒褐色	
	4	59	10	X−0	頁岩	27.0	36.1	8.2	7.06	暗褐色	
	5	57	23	X−0	頁岩	59.0	54.0	14.0	28.77	黒褐色	
	6	60	22	10−32	頁岩	40.2	46.8	15.3	21.63	黒褐色	
	7	59	16	10−27	頁岩	40.5	68.5	11.8	29.14	黄褐色	
	8	60	6	ST58・9−43	玉髄	36.8	28.0	11.1	12.44	褐色・透明	
	9	59	2	X−0	頁岩	48.5	38.4	12.8	18.07	灰褐色	
	10	59	5	9−38	頁岩	43.3	45.6	12.8	21.81	灰褐色	
	11	60	7	ST60・12−41	頁岩	25.5	28.1	9.0	5.62	褐色	基部
	12	59	8	SG1・25−40	頁岩	32.5	43.0	8.5	10.39	黒褐色	基部
	13	60	18	ST57・12−41	頁岩	134.0	66.6	17.0	91.99	黒褐色	
	14	58	17	10−35	頁岩	71.9	53.0	13.2	42.16	褐色	基部

石核（1）

挿	図	図版	出土区	石材	大きさ（mm） 長	幅	厚	重量（g）	色調
第56図	1	61	15	SG1	頁岩	37.8	28.9	32.9	38.41	灰褐色
	2	62	10	10−33	頁岩	55.8	52.5	22.1	51.02	灰褐色
	3	61	16	SG1	頁岩	57.5	35.4	33.1	49.26	黒褐色
	4	62	9	10−28	頁岩	54.4	35.4	26.2	32.86	灰色
	5	62	6	9−35	頁岩	61.6	35.0	26.0	62.03	灰褐色
	6	63	1	11−21	頁岩	49.0	42.1	26.7	43.62	灰色
	7	63	6	12−34	頁岩	42.0	34.6	34.8	45.81	黒褐色
第57図	1	63	7	16−34	頁岩	37.8	35.9	28.7	31.42	黒褐色
	2	63	8	16−34	頁岩	48.5	38.8	19.2	26.63	赤褐色・白色
	3	63	9	17−34	頁岩	31.8	28.5	15.0	14.86	赤褐色・白色
	4	63	10	X−0	頁岩	60.5	55.5	22.8	57.28	灰黄褐色
	5	63	16	X−0	頁岩	41.3	28.8	26.0	24.71	暗褐色
	6	64	5	X−0	頁岩	40.0	33.2	19.5	15.61	暗赤褐色
	7	63	11	X−0	頁岩	50.7	49.0	28.0	66.37	灰褐色
	8	63	18	X−0	頁岩	49.9	33.8	23.0	39.59	灰色
第58図	1	64	4	X−0	頁岩	46.5	42.5	23.0	43.23	赤褐色
	2	61	4	ST58・10−43	頁岩	48.0	43.1	39.0	87.60	黒褐色
	3	61	2	ST57・12−42	頁岩	68.7	64.0	40.2	140.17	黒褐色
	4	61	7	ST	頁岩	60.5	54.2	28.3	75.21	黒褐色
第59図	1	61	5	ST59・9−42	頁岩	89.0	43.5	32.0	136.44	灰褐色
	2	61	8	SG1・10−50	頁岩	67.2	46.0	33.0	101.63	灰褐色
	3	61	9	SG1・13−46	頁岩	66.0	56.0	36.9	119.63	暗褐色
	4	61	11	SG1・25−40	頁岩	45.0	34.2	27.5	49.78	黒褐色
第60図	1	61	10	SG1・14−49	頁岩	70.5	55.8	28.0	130.11	黒褐色
	2	61	12	SG1・25−40	頁岩	51.2	36.0	29.0	49.38	明褐色
	3	61	13	SG1・26−40	頁岩	85.2	46.3	41.9	181.32	明褐色
第61図	1	62	1	SK142・24−29	頁岩	53.5	51.0	27.9	64.32	黒褐色
	2	61	14	SG1・33−31	頁岩	67.2	55.1	37.2	109.30	灰色
	3	62	2	SK142・25−29	頁岩	80.0	54.2	43.2	136.97	灰褐色
	4	62	3	8−38	頁岩	60.5	45.5	28.6	51.63	灰褐色
第62図	1	61	17	SK12・24−43	頁岩	61.5	45.6	41.4	84.05	灰黄褐色
	2	63	3	11−26	頁岩	54.4	31.7	21.5	35.96	黒褐色
	3	62	4	8−40	頁岩	70.5	59.2	44.1	171.57	暗褐色
	4	63	5	11−32	頁岩	71.0	58.5	38.5	145.11	灰白色
第63図	1	63	4	11−30	頁岩	59.0	47.8	41.1	107.90	暗褐色
	2	63	13	24−13	頁岩	64.2	39.0	26.8	72.07	黒褐色
	3	63	14	9−28	頁岩	79.0	68.1	42.2	236.31	灰黄褐色
	4	63	21	X−0	頁岩	75.9	40.7	28.7	103.07	灰褐色
第64図	1	63	15	X−0	頁岩	63.7	46.0	47.0	124.11	灰黄褐色
	2	63	17	X−0	頁岩	61.8	47.2	38.0	126.76	灰黄褐色
	3	63	20	X−0	頁岩	87.0	81.0	38.0	170.46	黒褐色
第65図	1	64	1	X−0	頁岩	75.0	61.5	27.6	128.91	黒褐色
	2	63	19	X−0	頁岩	65.0	71.4	37.2	193.72	暗褐色
	3	62	5	9−34	頁岩	93.6	50.2	56.1	250.39	黄褐色

表12　石器計測表（3）

石鏃（2）

挿図	図版	出土区	石材	大きさ（mm） 長	幅	厚	重量（g）	色調
挿図 65	1 64 3	X−0	頁岩	95.5	79.0	37.6	206.20	灰黄褐色
	2 64 2	X−0	頁岩	67.0	51.3	43.1	127.64	黒褐色
	3 64 3	ST57・13−41	頁岩	111.3	48.0	35.0	146.93	灰白色
67	1 61 6	ST59・9−42	頁岩	85.0	93.9	53.7	412.64	灰褐色
68	1 62 11	10−34	頁岩	89.8	82.7	79.0	690.00	灰黄褐色
69	1 62 8	9−36	頁岩	92.3	72.7	58.3	339.73	黒褐色
70	1 64 9	X−0	頁岩	152.0	124.1	65.0	1270.00	灰黄褐色
	1 62 12	10−35	頁岩	117.0	80.0	44.0	405.97	黒褐色
71	2 64 6	X−0	頁岩	92.5	79.0	51.1	337.76	灰褐色
72	1 63 22	X−0	頁岩	71.7	60.0	52.7	284.09	黒褐色・灰白色
	2 64 8	X−0	頁岩	90.4	76.1	41.1	299.40	灰色
73	1 63 2	11−21	頁岩	74.1	57.0	41.2	186.10	褐色
	2 63 12	23−32	頁岩	107.6	61.0	43.8	338.55	黒褐色
74	1 61 1	T7	頁岩	170.0	64.0	45.0	411.74	灰黄褐色
	2 64 7	X−0	頁岩	58.0	41.5	38.5	116.06	黒褐色
	62 7	SK126・18−10	頁岩	174.0	138.0	77.0	1860.00	灰黄褐色

磨製石斧・敲石・打製石斧

図版		器種	出土区	大きさ（mm）			重量（g）	残存部位	備考
67	1	磨製石斧	X−0	(49)	(39)	(28)	66	基部	
	2	磨製石斧	SP121	(73)	(27)	(28)	66	基部	
	3	磨製石斧	11−25	(67)	(40)	(25)	91	基部	
	4	磨製石斧	SG1.22−42	(41)	(40)	(14)	41	刃部	
	5	磨製石斧	X−0	(62)	(45)	(26)	110	刃部	
	6	磨製石斧	18−19	(74)	(50)	(29)	158	刃部	
	7	磨製石斧	10−34	(73)	(37)	(23)	88	基部	
	8	磨製石斧	17−34	(73)	(48)	(29)	165	基部	
	9	磨製石斧	11−34	(86)	29	30	194	基部	
	10	磨製石斧	SK144.17−18	(79)	26	15	47		
	11	磨製石斧	17−34	86	35	10	41		未製品
	12	磨製石斧	X−0	81	(45)	15	78		
	13	磨製石斧	SK55	(96)	49	29	221	基部	
	14	磨製石斧	ST57.12−42	(108)	52	24	210		
	15	磨製石斧	14−25	124	52	30	293		
	16	磨製石斧	SG1.14−48	(127)	56	31	345	基部	
68	1	敲石	X−0	(131)	(45)	(27)	191	基部	
	2	敲石	22−31	(126)	(62)	(33)	323	基部	打製石斧破損品？
	3	敲石	ST57.13−41	(127)	(63)	(37)	524		磨製石斧転用
	4	敲石	23−14	(138)	(70)	(42)	556		
	5	敲石	10−34	144	73	24	287		
	6	打製石斧	X−0	(81)	(95)	(30)	253		
	7	打製石斧	X−0	(105)	(79)	(35)	343		
	8	打製石斧	X−0	(130)	(88)	(40)	501		

凹石

図版	出土区	大きさ（mm） 長	幅	厚	重量（g）	図版	出土区	大きさ（mm） 長	幅	厚	重量（g）
1	9−35	97	70	41	296	20	9−35	138	99	71	1,089
2	9−34	92	65	34	226	21	34−36	128	96	48	774
3	ST59.9−42	79	74	56	444	22	ST58.9−43	101	91	45	536
4	SK40	105	59	37	312	23	SG1.13−49	102	99	56	671
5	SG1.12−49	111	55	33	238	24	17−33	114	95	51	630
6	SG1.12−49	111	60	45	438	25	11−35	124	77	60	773
7	ST57.12−41	89	76	46	415	26	19−20	135	63	40	445
8	10−34	105	83	37	406	27	9−37	(133)	70	39	511
9	ST57.11−41	106	81	33	419	28	11−34	156	77	32	425
10	ST60.12−40	87	75	51	481	29	9−34	(129)	(96)	27	434
11	ST58.9−42	114	89	57	802	30	X−0	109	69	38	403
12	ST57.12−40	110	88	45	641	31	10−30	(87)	66	32	245
13	22−14	90	71	32	241	32	ST61.9−49	94	91	54	550
14	11−27	89	72	43	369	33	ST57.12−41	95	93	58	668
15	X−0	92	83	48	505	34	11−34	145	64	31	421
16	SK131.17−18	122	80	47	524	35	11−34	90	83	43	457
17	SG1.10−50	101	97	47	632	36	SG1.12−47	112	90	60	711
18	SG1.10−49	135	88	36	444	37	11−35	137	110	26	451
19	ST59.8−42	110	108	60	885						

表13　石器計測表（4）

石器

図版		出土区	大きさ (mm)			重量 (g)
図版65	1	11−21	50	32	15	34
	2	X−0	56	35	20	45
	3	X−0	63	29	20	41
	4	SK146, 24−14	59	36	13	32
	5	20−35	66	35	14	43
	6	SG1, 18−33	61	42	12	36
	7	20−35	57	45	19	48
	8	27−41	63	44	16	57
	9	SG1, 10−49	67	35	20	57
	10	18−33	72	36	15	51
	11	X−0	69	46	17	56
	12	11−34	79	44	19	67
	13	X−0	78	43	23	99
	14	18−18	83	51	26	106
	15	23−14	78	48	19	92
	16	22−15	83	39	19	78
	17	11−22	92	33	26	91
	18	11−34	97	40	21	114
	19	X−0	87	52	26	107
	20	10−34	91	47	28	151
	21	23−14	93	48	20	112
	22	21−27	98	46	25	152
	23	ST57, 12−42	96	58	27	170
	24	11−35	88	56	18	110
図版65	1	19−38	32	19	7	5
	2	9−29	35	25	11	10
	3	18−36	38	20	8	8
	4	SK64, 13−26	39	22	11	11
	5	9−31	36	28	12	12
	6	9−31	36	28	13	14
	7	18−35	50	22	11	13
	8	SG1, 18−34	46	27	17	23
	9	20−18	48	28	13	22
	10	10−31	45	25	17	22
	11	22−16	46	24	13	16
	12	ST57, 12−41	41	30	14	22
	13	SK64, 13−26	44	26	12	18
	14	11−20	46	38	18	36
	15	10−33	46	27	14	22
	16	X−0	44	31	20	30
	17	22−16	43	31	17	30
	18	13−26	47	28	13	25
	19	18−34	44	34	16	28
	20	9−34	48	34	15	30
	21	9−31	45	32	14	25
	22	11−22	47	25	11	16
	23	ST49, 14−48	49	32	14	30
	24	9−37	49	35	16	33
	25	X−0	56	32	12	28
	26	11−24	51	26	15	22
	27	ST57, 12−41	58	39	13	23
	28	SG1, 26−42	57	28	16	37
	29	17−17	55	36	11	25
	30	20−35	50	34	14	28
	31	SG1, 18−34	51	36	11	25
	32	SK56	57	36	14	35
	33	X−0	49	28	15	26
	34	SK114	52	24	15	29
	35	SK126, 18−20	51	29	17	27
	36	SK43	49	35	14	27
	37	X−0	55	30	13	34
	38	,12−40	58	29	15	30
	39	13−41	51	36	13	30
	40	19−35	47	36	13	26

図版		出土区	大きさ (mm)			重量 (g)
図版66	41	10−28	53	38	14	31
	42	20−36	53	39	18	37
	43	18−37	60	32	11	23
	44	SD110, 21−15	74	37	14	53
	45	16−32	56	43	19	49
		21−27	74	26	23	91
		11−22	66	33	15	50
		20−16	51	37	18	41
		23−14	102	27	26	72
		23−17	70	32	11	30
		10−27	51	30	15	
		9−31	53	27	20	21
		27−41	63	44	16	26
		X−0	72	40	(14)	48
		11−23	53	(25)	21	36
		23−14	(72)	(33)	(10)	29
		11−33	41	27	14	17
		11−33	67	42	15	42
		9−37	41	24	10	12
		11−36	(48)	(27)	(12)	14
		19−22	(43)	(28)	16	15
		18−34	(41)	32	15	24
		10−31	48	39	12	28
		23−14	(73)	(36)	(7)	24
		11−30	51	34	(13)	26
		22−24	55	(30)	14	29
		16−18	33	32	20	23
		20−35	53	32	16	30
		24−18	45	29	19	22
		9−34	57	32	17	31
		14−34	(36)	30	17	19
		24−18	46	30	14	22
		8−40	45	30	16	28
		10−37	51	34	12	26
		10−31	33	28	9	8
		20−18	45	29	15	24
		13−22	48	38	12	29
		26−13	41	25	14	17
		19−20	(45)	(24)	(8)	7
		9−37	(48)	(23)	(9)	10
		10−34	44	27	14	20
		9−37	(47)	26	(14)	19
		9−37	(27)	(26)	(29)	6
		13−25	48	27	15	25
		ST54, 17−34	52	37	15	32
		18−34	48	29	20	34
		13−26	48	28	18	27
		24−13	36	30	15	17
		9−29	45	32	17	27
		10−35	(16)	16	(5)	1
		X−0	50	(35)	15	29
		15−33	(36)	(21)	(6)	5
		X−0	(45)	(33)	(18)	27
		ST57, 12−40	53	34	13	29
		SK43	(52)	(33)	(6)	12
		9−31	(17)	27	9	5
		ST57, 12−48	(53)	31	18	32
		SK43	46	39	16	26
		11−25	(48)	(32)	(6)	6
		ST59, 7−44	58	31	14	24
		SG1	58	32	12	28
		SK124, 16−18	(15)	(24)	(7)	2
		SK11	44	26	14	19
		9−39	(35)	(34)	(17)	18

表15　石器計測表（5）

Ⅵ　中台５遺跡の遺構と遺物

遺構（第４図）

SK１：調査区南辺東半の147～148－78区で検出された。長軸165cm、短軸115cmの南北に長い不整楕円形プランの土坑である。確認面からの深さ26cmを測る。底面は比較的平坦であり壁の立上がりは南北端で急である。堆積土は地山のにぶい黄褐色砂質シルトが斑状に混入する暗褐色砂質シルトである。遺物は頁岩製の剥片が２点出土したのみであり所属時期、機能ともに不明である。

SK３：調査区南辺東半の150～151－76・77区で検出された。長軸275cm、短軸218cmの南北に長い不整楕円形プランの土坑である。確認面からの深さ24cmを測る。底面は起伏があり壁の立上がりは南半部で急である。堆積土は明黄褐色砂質シルトが斑状に混入する暗褐色砂質シルトである。遺物は厚手で網代痕をもつ深鉢の底部破片４点（同一個体）と薄手で沈線文と条の細い斜縄文が施文された深鉢の体部破片、口縁部破片各１点、側面に２次調整がある掻器が１点、そのほか頁岩製の剥片が３出土した。本土坑の所属時期は縄文時代晩期以降と思われるが、機能は不明である。

SK４：調査区南辺西半の125・126－93区で検出された。長軸89cm、短軸80cmの南北に長い略円形プランの土坑である。確認面からの深さ20cmを測る。底面は比較的平坦であり壁の立上がりは緩やかである。遺物は頁岩製の剥片が３点出土したのみであり所属時期、機能ともに不明である。

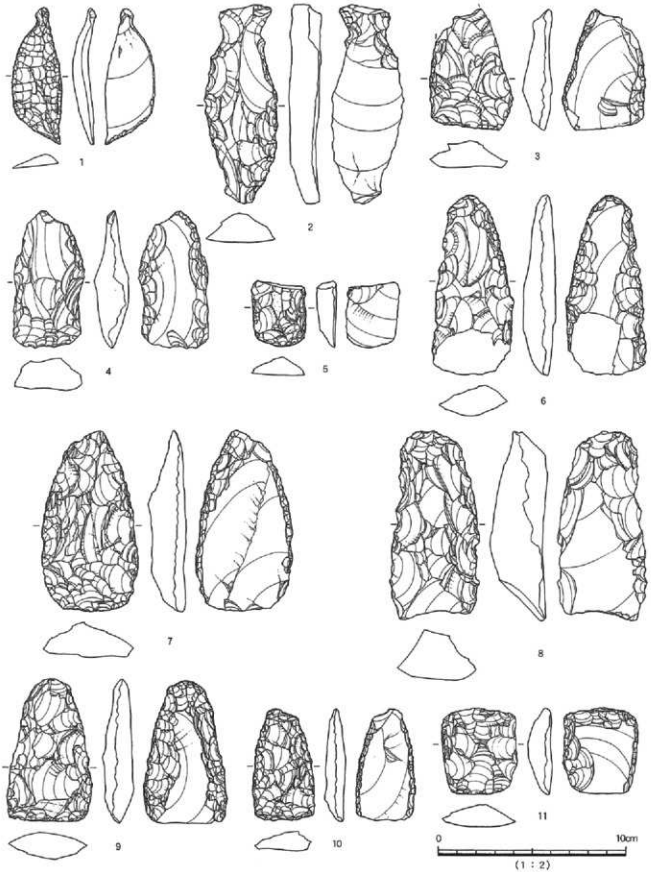
遺物

縄文土器：いずれも小破片で23点出土した。SK３出土の６点のほかは、面整理またはトレンチ内から出土した。ほとんどが地文の縄文のみまたは無文で、被熱および磨滅が著しく、器形および所属時期の詳細が把握できるものはないが、条が細く直前段多条となる可能性をもつ薄手の破片が若干みられ、これらは縄文時代晩期から弥生時代の所産と考えられる。

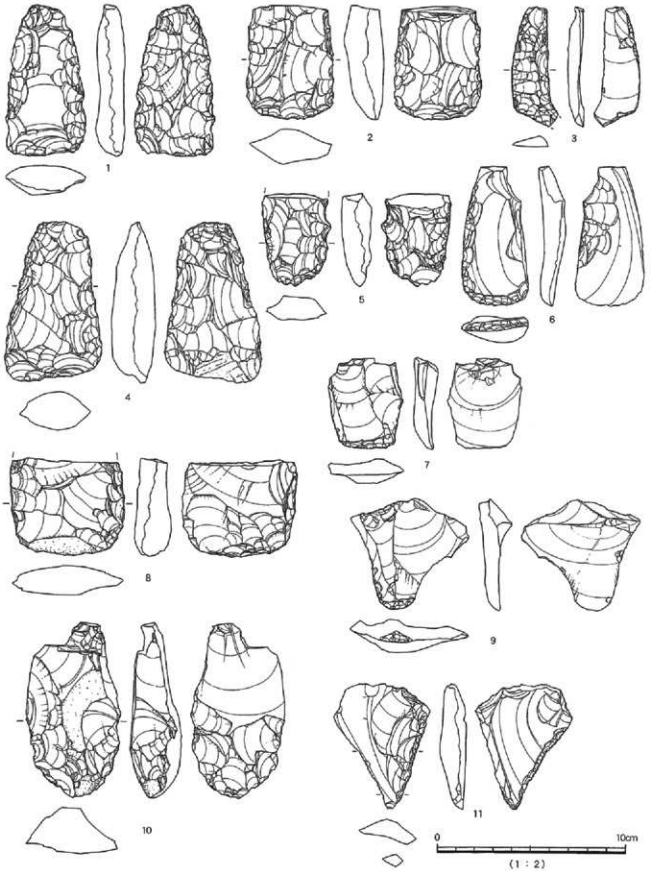
石器（第75図・第76図）：石器は図示した22点のほか、掻器、削器、toolの破砕片が22点出土した。このうち遺構内出土の石器は前述のSK３から得られた１点のみである。以下では本遺跡で出土したいわゆる定形石器の状況を概観する。

石匙は、第75図１・２の２点が出土した。１は背面に樋状剥離を多用し、主要剥離面側には右側縁から末端にかけて通常剥離を施すものである。２は２次調整が背面側に集中し、主要剥離面側の調整ははつまみ部に限られる。また、第76図３は石匙の未成品または破損品とみられる。いずれも石材は頁岩を用いている。

石篦は、第75図３～11、第76図１・２・４・５・８・10の15点が出土した。製作技術の側面からみると、背面側への調整加工はほぼ全域におよぶが、主要剥離面側は、両側縁および基部に加工が集中し、中央部および刃部は素材面を大きく残しているものが第75図３～５、７～11の８点と過半を占めている。



第75図　中台５遺跡出土石器（１）



第76図　中台５遺跡出土石器（２）

Ⅶ　調査のまとめ

県営圃場整備事業担い手育成型（八敷代地区）に係って平成12年度に緊急発掘調査が実施されたの中台４遺跡および中台５遺跡は、山形県最上郡真室川町大字釜淵字中台に所在し、塩根川（真室川）の上流域に発達した河岸段丘上に立地する。遺跡の面積は、中台４遺跡が約8,000m²、中台５遺跡が約40,000m²で、今回はそれぞれ2,800m²および2,550m²を対象に発掘調査を実施した。その結果、中台４遺跡では縄文時代中期前葉から後期前葉にかけての集落跡が検出されたが、中台５遺跡では、調査区内が、先の圃場整備によって遺構確認面の大半が破壊され、若干の遺構・遺物が発見されたに留まった。出土遺物は両遺跡あわせて72箱である。以下では中台４遺跡の調査の結果を要約する。

1　検出遺構について

検出された遺構は、竪穴住居跡８棟、土坑約90基、河川跡１条である。河川跡は調査区北東部分を東から西へ横切るかたちで検出されたが、その他の遺構は調査区西半部に集中して検出されている。

竪穴住居跡は調査区北西半に集中して検出された。このうちもっとも古いと考えられるのは、石囲炉をもったST50であるが、SG1の氾濫によって、プランの大半が失われ、炉と貼床の一部が確認されたのみであった。なお付近からは第Ⅰ群土器がややまとまって出土しており、大木８a式期の所産と推定された。ST49、ST51、ST57～ST60の６棟の竪穴住居跡からは複式炉が検出された。このうちST49は、ST50と同様にSG1の氾濫による破壊を受け、ST51は北半が崖の侵蝕によって失われていた。またST58～ST60の３棟は重複関係にあるが、ST59およびST60の２棟は床面が浅かったためにプランが不明瞭となっている。ST57とST58の２棟は、水害の影響が堆積土上面にあったものの、整った円形プランが確認でき、床や炉、柱穴などの遺存状態も良好であった。特にこの２棟については、複式炉の遺存状態が極めてよく、前庭部および燃焼部が深く掘り込まれた独特な構築状況など、新知見が得られた。これら６棟の竪穴住居跡の存続時期には、重複関係などから、相当の時間幅の存在が予想されるが、概ね大木10式期の範疇で捉えられるものと考えられる。これらからやや離れて検出されたST54では、壁の周囲を巡る細い柱穴や地床炉など、ほかの竪穴住居跡とは構造的な違いがみられた。出土した遺物も第Ⅲ群土器を主体とするものであり、縄文時代後期前葉の所産と考えられる。

土坑は調査区北西部のST49～ST51の近辺および調査区西半中央から南部の遺物包含層下の２地点に密な分布が認められる。出土遺物の検証がまだ不十分であるが、北西部の土坑群は縄文時代中期、西半中央から南部の土坑群は縄文時代後期前葉をそれぞれ主体としているとの展望がたてられた。しかし、個々の土坑の機能については不明確であり、竪穴住居跡との有機的な関連も含めた各時期における集落の構造を整理・解明するためには、さらに検討をすすめる必要がある。

2　出土遺物について

縄文土器はST57およびST58の両竪穴住居跡内の堆積土を主体として、SG1、西辺部の遺物包含層からまとまった出土がみられた。

第Ⅰ群土器は縄文時代中期前葉の大木７ｂ式から大木８ａ式に至る時期を主体とするものである。最上郡内では、舟形町西ノ前遺跡、最上町水木田遺跡、新庄市中川原C遺跡などに類似例が求められる。本遺跡の場合、特に縄文原体側面圧痕文の多用が注目される。

第Ⅱ群土器は縄文時代中期末葉の大木10式に比定される一群である。今回の調査では量的に最もまとまって出土した。最上郡内での知見は現在までのところ非常に少なく、鮭川村庭月観音堂遺跡、新庄市立泉川遺跡などがある程度であるが、山形県内では、山形市熊ノ前遺跡、同山形西高敷地内遺跡などで当該期の大規模な集落の存在が知られている。なお、本群土器についてはより細分化された時期認定の検討が今後の課題となる。

第Ⅲ群土器は縄文時代後期前葉に比定されるものを一括している。第Ⅱ群土器に次いでまとまった量が出土しているが、小破片がほとんどであり、詳細は不明確な部分が多い。山形県内における門前式から宮戸Ⅰｂ式にかけての資料は少なく、遊佐町神矢田遺跡などが知られていたが、近年、寒河江市富沢Ⅰ遺跡、米沢市大樽遺跡でややまとまって出土した。また、最上郡内では最上町水上遺跡、同町楯の裏遺跡からの出土例が知られている。本群もより詳細な時期認定を今後おこなう必要がある。

第Ⅳ群土器は縄文時代晩期に比定される土器群である。２点の出土に留まっているが、１点は晩期末葉の大洞A 式期に比定されるものであり、付近では、真室川町釜淵C 遺跡が知られている。中台４遺跡では客体的なものであり、SG1の氾濫による流れ込みと考えられる。

石器は石鏃、石錐、石匙、石篦、掻器、削器などの剥片石器、凹石、磨製石斧、石錘などの礫石器ともにまとまった出土があった。これらのうち特に数量的に注目されるのは石錘である。これは、遺跡のすぐ南を流れる塩根川を対象にした漁労活動を反映した遺物と考えられる。また石核および剥片の多さも注目される。現在遺跡のそばを流れる塩根川の河床付近では、石器素材となる頁岩の原石を多くはみかけないが、これらの遺物は、中台４遺跡における剥片石器の生産活動がかなり活発であったことを物語っている。

引用・参考文献

佐々木洋治・佐藤正俊・横戸昭二（1979）「熊ノ前遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第16集
佐藤庄一・尾形與典・阿部明彦（1979）「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第17集
名和達朗・阿部明彦（1981）「水上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第40集
阿部明彦・佐々木洋治・佐藤正俊（1984）「水木田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第75集
黒坂雅人（1994）「西ノ前遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第１集
佐藤庄一・黒坂雅人（1996）「富沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
國井　修（1999）「大郷遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第67集
山形県教育委員会（2001）「分布調査報告書（27）」山形県埋蔵文化財調査報告書第201集

報告書抄録

ふりがな	なかだい４・５いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	中台４・５遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第84集
編著者名	黒坂雅人　豊野潤子
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL 023－672－5301
発行年月日	2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかだい４いせき 中台４遺跡	やまがたけん 山形県 もがみぐん 最上郡 まむろがわまち 真室川町 おおあざかまふら 大字釜淵	6364	平成10・11年度登録	38度56分57秒	140度17分9秒	20000508～20000908	2,800	県営ほ場整備事業担い手育成型（八敷代地区）
なかだい５いせき 中台５遺跡	になかだい 字中台			38度57分5秒	140度17分17秒		2,550	

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文	竪穴住居　8 複式炉　6 土壙　90 河川　1	縄文土器（深鉢・浅鉢） 土製品 石器（石鏃・石匙・石錐・石篦・磨製石斧・他） 石製品（石金鋸・磨石・凹石）	縄文時代に水害に遭った集落跡と、複式炉を持つ竪穴式住居跡が確認された。 （総出土箱数：70箱）
集落跡	縄文	土壙　4	石器（石鏃・石匙・石錐・石篦・磨製石斧・他）	縄文時代の石器が出土。 （総出土箱数：２箱）

図　　版

図版１

調査前の状況（南から）

調査区近景（西から）

図版２

トレンチ調査

重機による表土剥取

面整理作業

遺構マーキング作業

遺構精査

記録作業

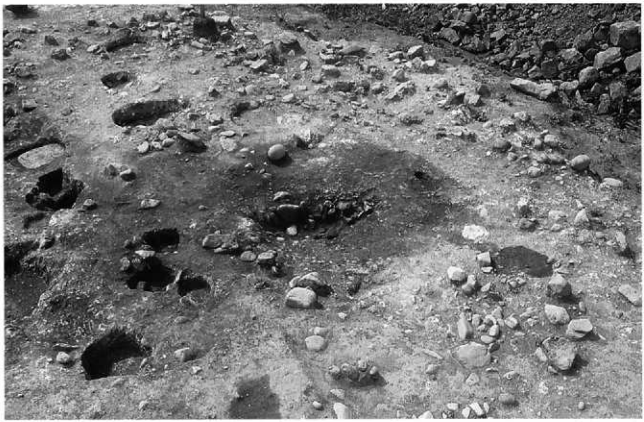
大滝小学校見学

調査説明会

図版3

遺構検出状況（↑北）

図版4



ST49（南東から）

ST49EL37（南から）

図版5

ST50（東から）

ST50炉跡（南から）

図版6

ST51調査状況（北から）

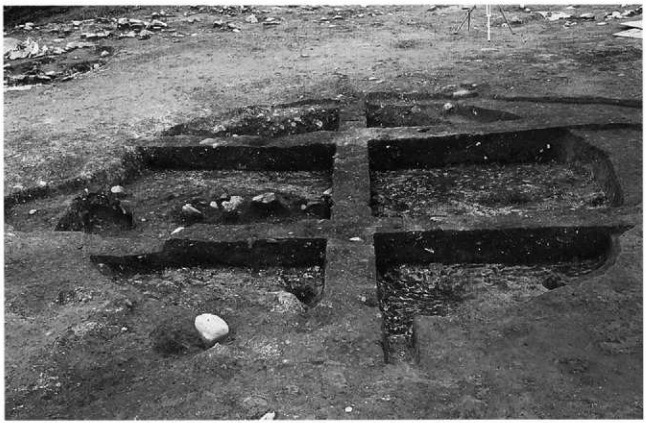
ST51調査状況（西から）

図版7

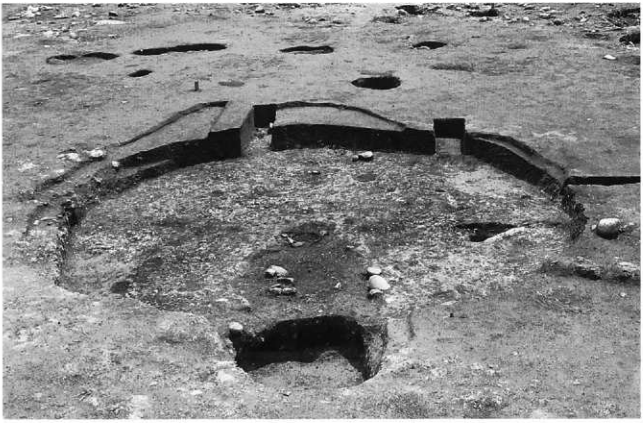
ST51EL48土層断面（南西から）

ST51EL48（北から）

図版8



ST57調査状況（西から）



ST57床面検出状況（北から）

図版9

ST57EL78土層断面（南西から）

ST57EP92（北東から）

図版10

ST58床面検出状況（南から）

ST58EL.102土層断面（南東から）

図版11

ST58EL102埋設土器内の礫（南から）

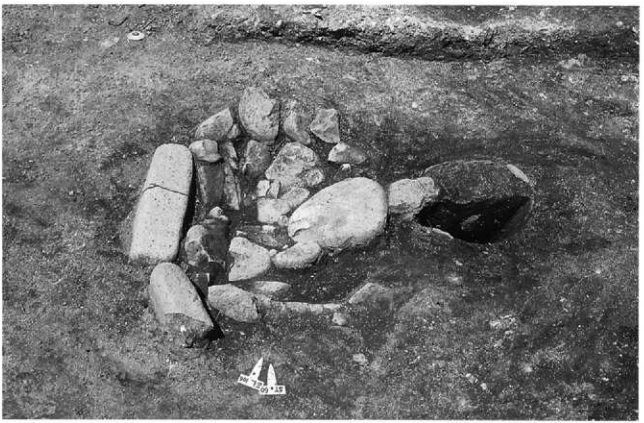
ST58完掘状況（西から）

図版12

ST59・60完掘状況（北から）

ST59EL105（東から）

図版13

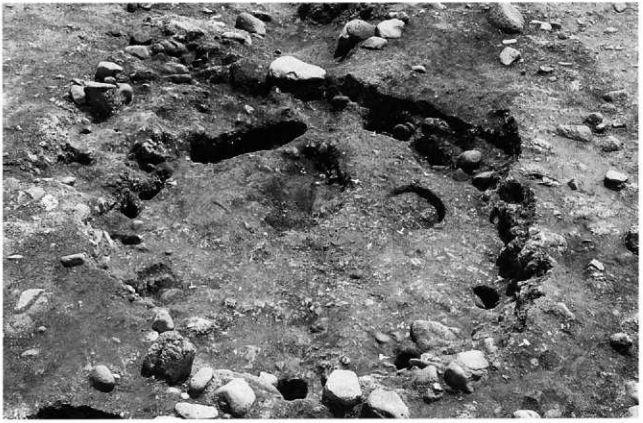


ST60EL106土層断面（南から）

ST60EL106完掘状況（北から）

図版14

ST54調査状況（北西から）

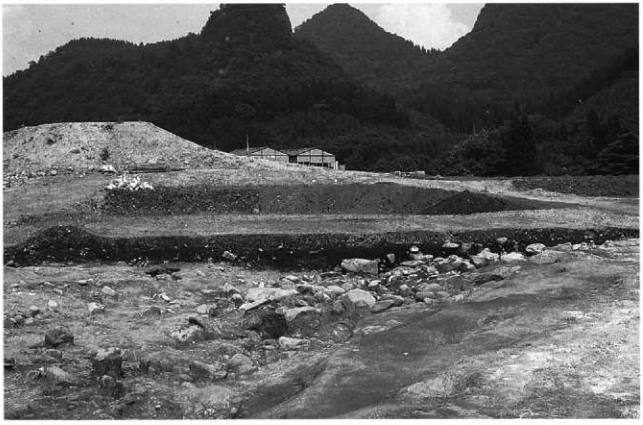


ST54完掘状況（北から）

SG 1 完掘状況（南東から）

図版16

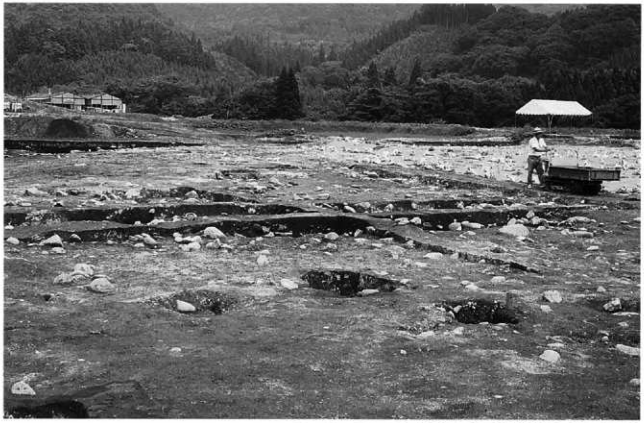
SG 1 中央ベルト土層断面（南から）



SG 1 東壁土層断面（西から）

図版17

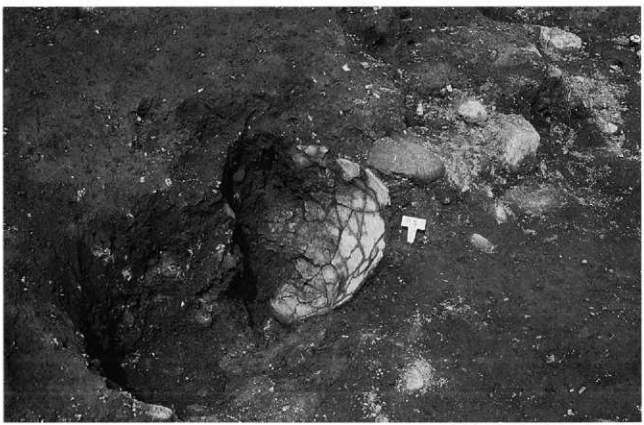
南崖遺物包含層調査状況（南東から）



18・19－30～38区遺物包含層調査状況（北西から）

図版18

EU63土層断面（西から）



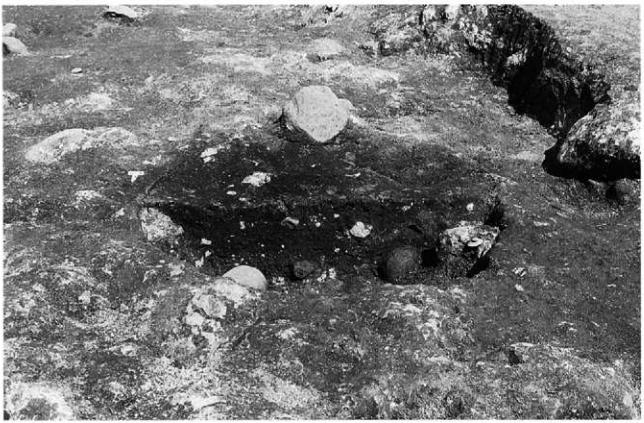
10－35区縄文土器出土状況（西から）

図版19

SK12完掘状況（南西から）

SK19土層断面（西から）

図版20



SK38土層断面（西から）

SK38完掘状況（南から）

図版21

SK43土層断面（南東から）

SK43完掘状況（東から）

図版22

SK53土層断面（南西から）

SK56完掘状況（西から）

図版23

SK55土層断面（西から）

SK55完掘状況（東から）

図版24

SK125土層断面（南西から）

SK125完掘状況（北東から）

図版25

SK129土層断面（西から）

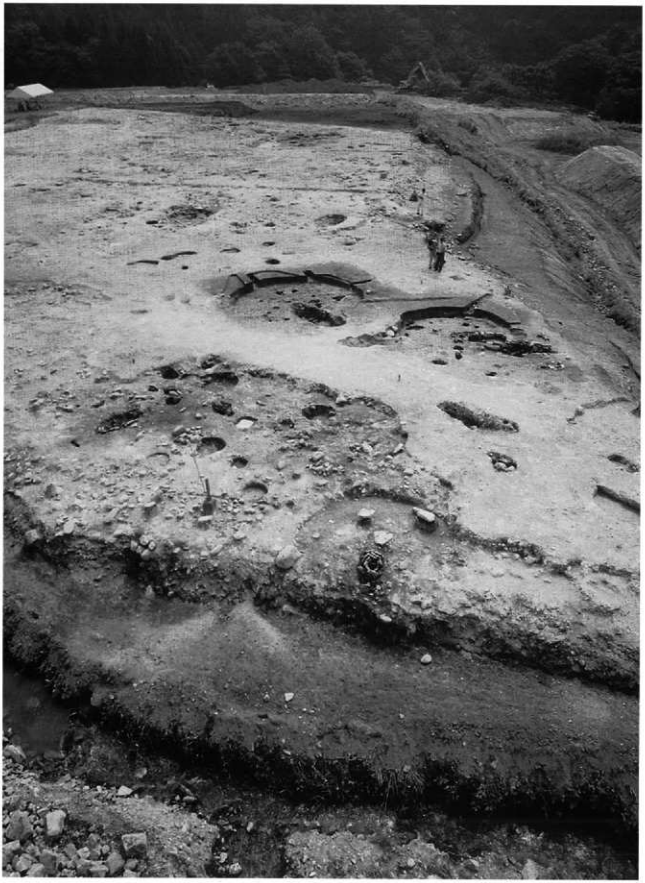
SK129完掘状況（西から）

図版26

SK137土層断面（南東から）

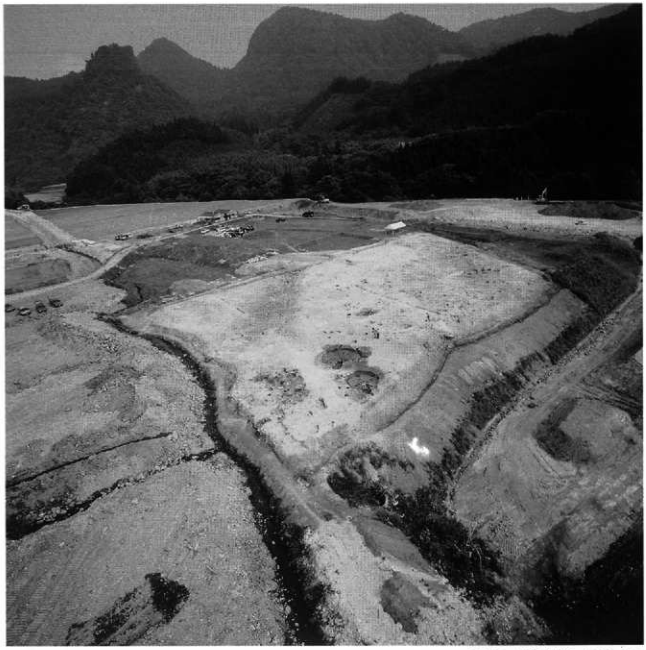
SK137完掘状況（南から）

図版27



遺構集中区域完掘状況（北から）

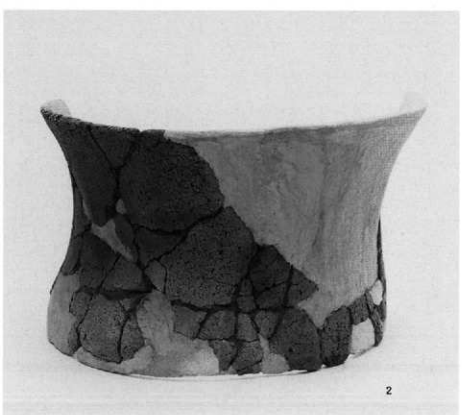
図版28



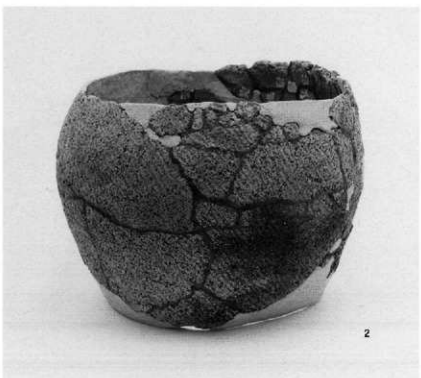
調査区完掘状況（西から）

縄文土器（1）

図版30



縄文土器（２）



縄文土器（3）

図版32

縄文土器（４）

縄文土器（5）

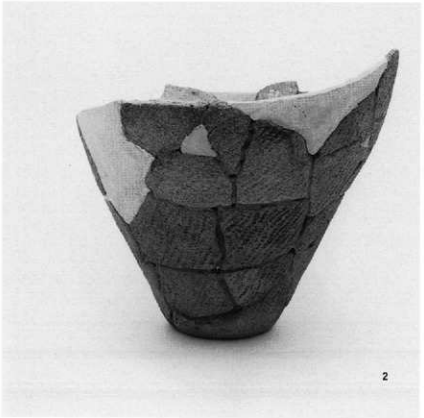
図版34

縄文土器（６）

縄文土器（7）

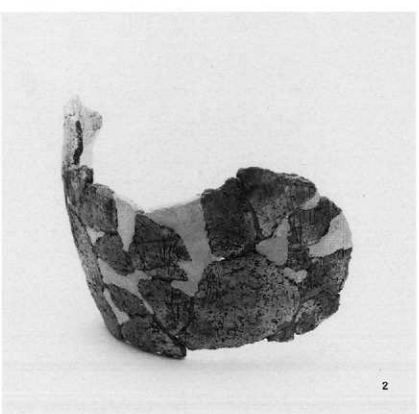
図版36

縄文土器（８）



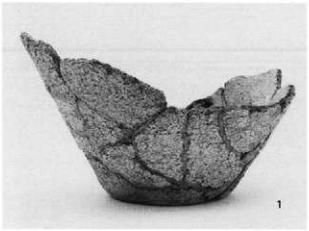
縄文土器（9）

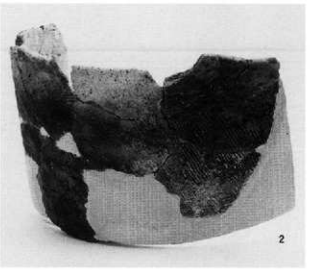
図版38



縄文土器（10）

図版39


1


2

3

4

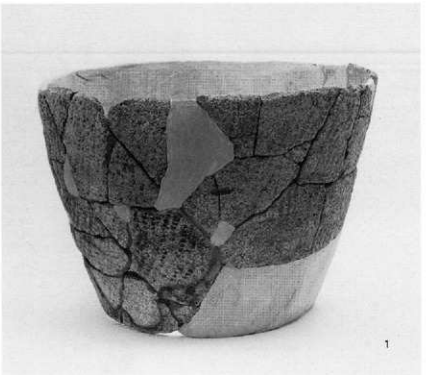
5

6

7

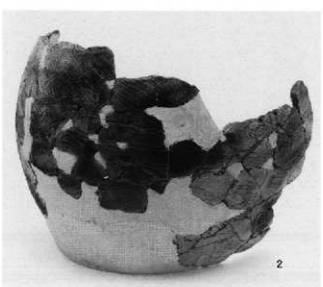
縄文土器（11）

図版40



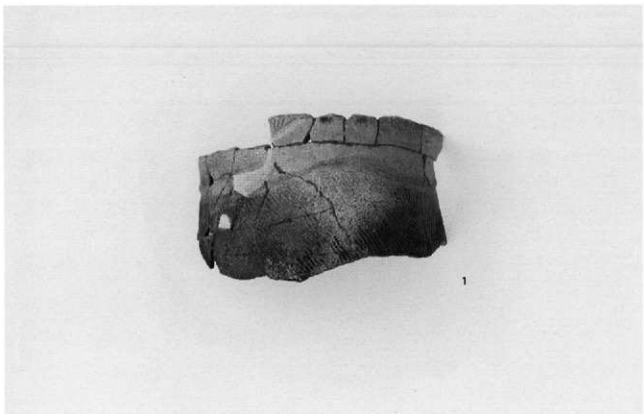
縄文土器（12）

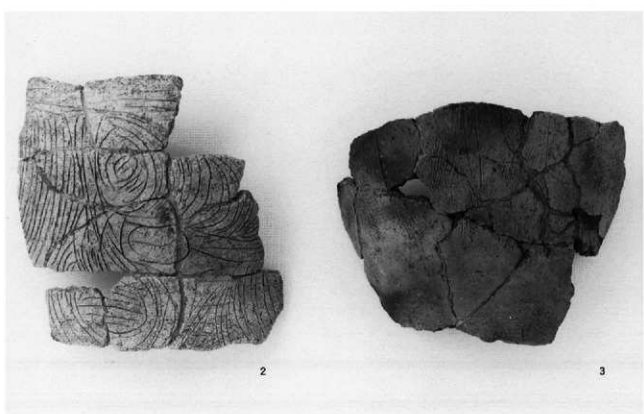
図版41



縄文土器（13）

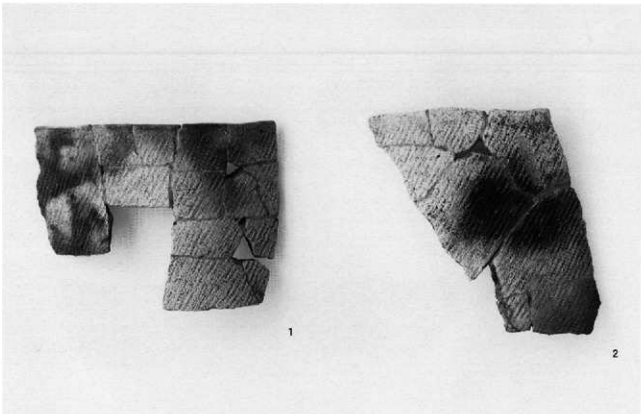
図版42

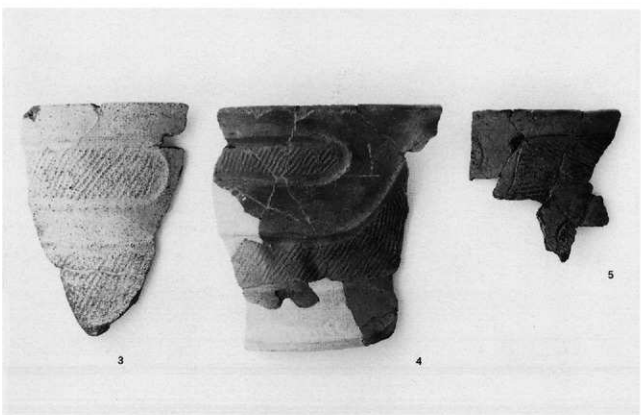




縄文土器（14）

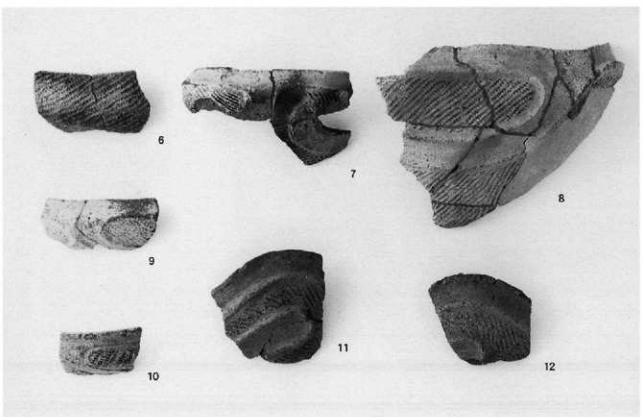
図版43





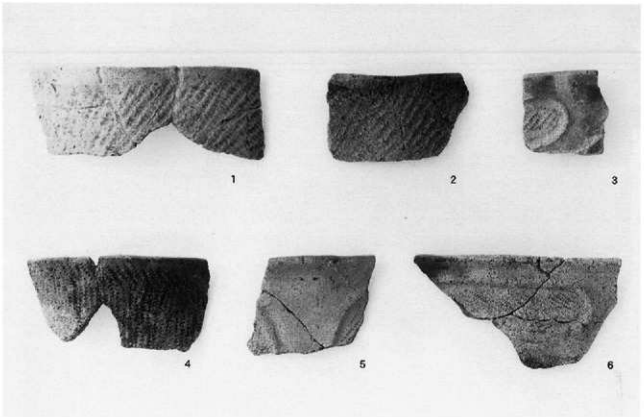
縄文土器（15）

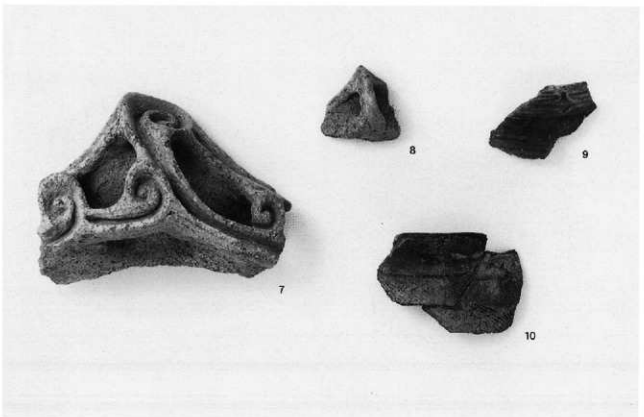
図版44



縄文土器（16）

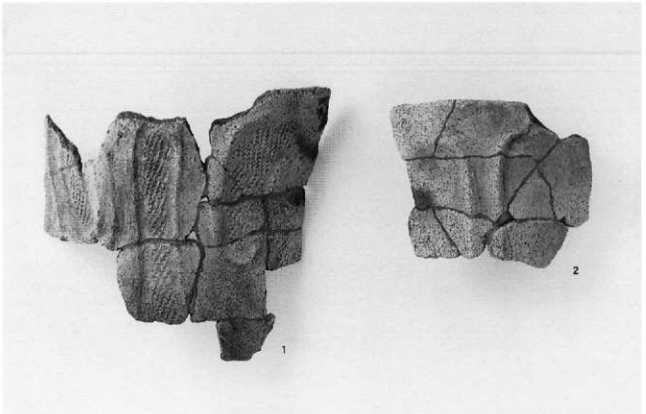
図版45

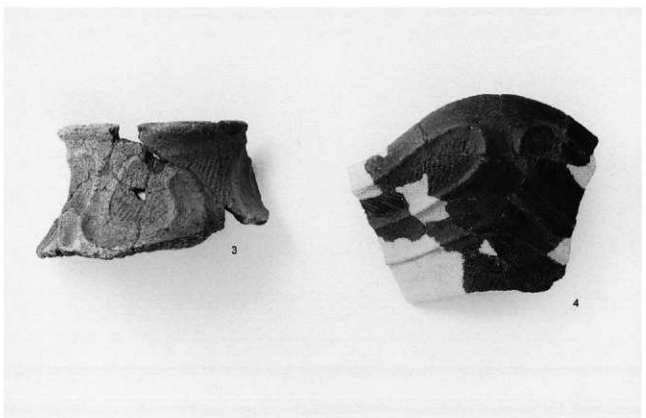




縄文土器（17）

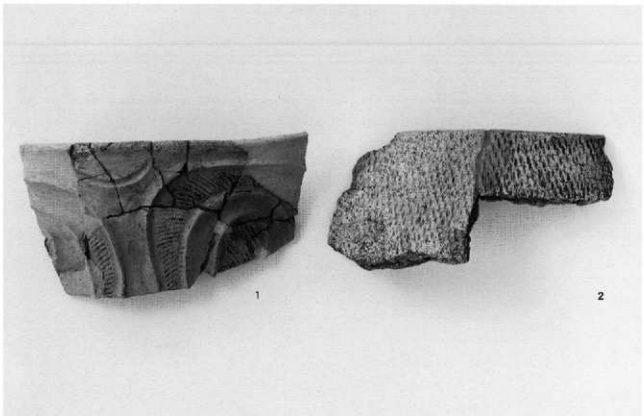
図版46

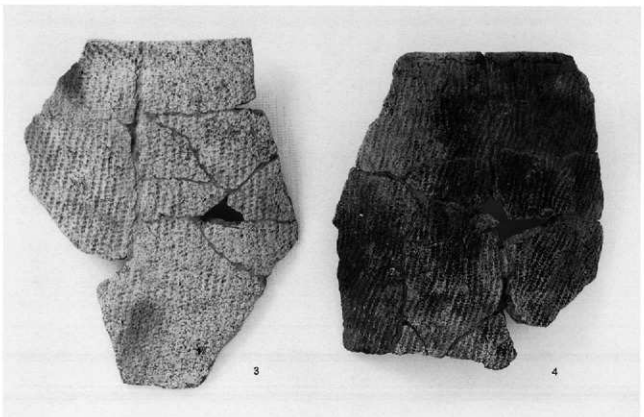




縄文土器（18）

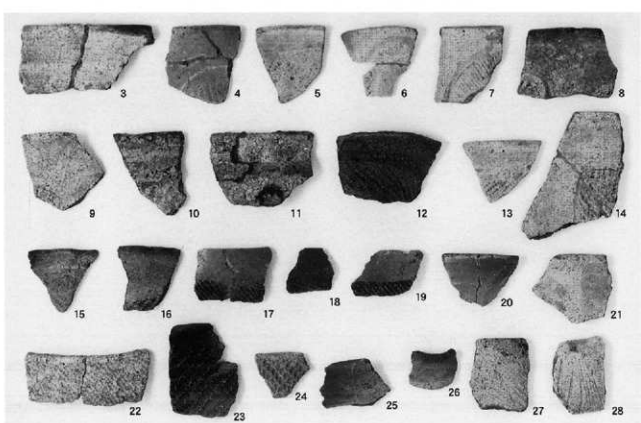
図版47





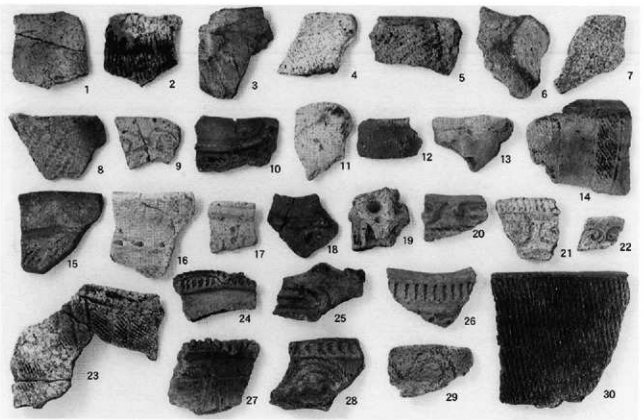
縄文土器（19）

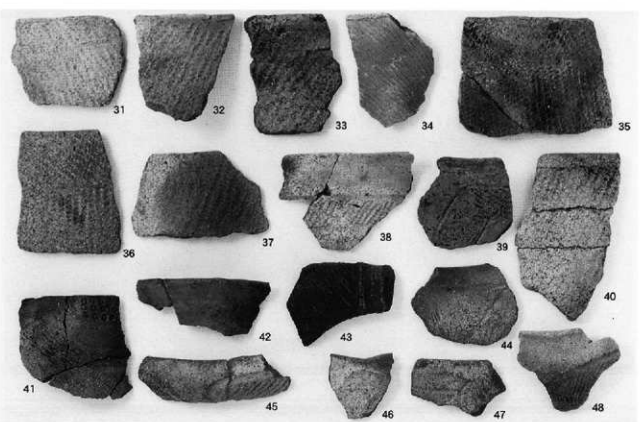
図版48



縄文土器（20）

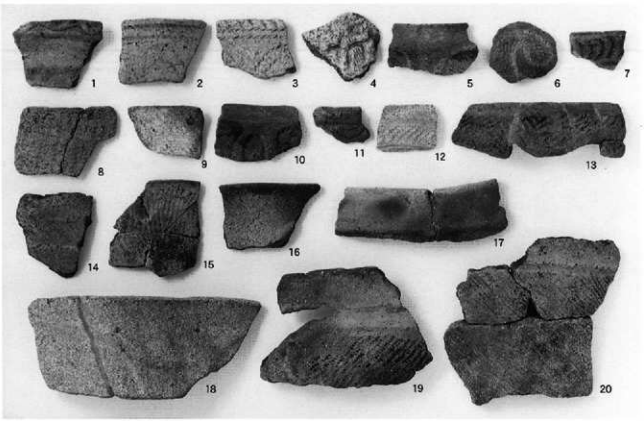
図版49

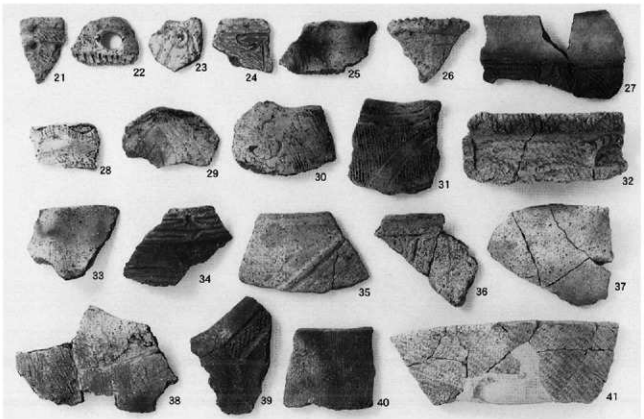




縄文土器（21）

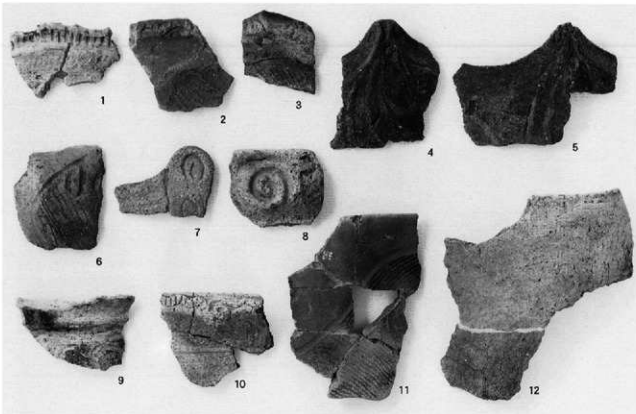
図版50

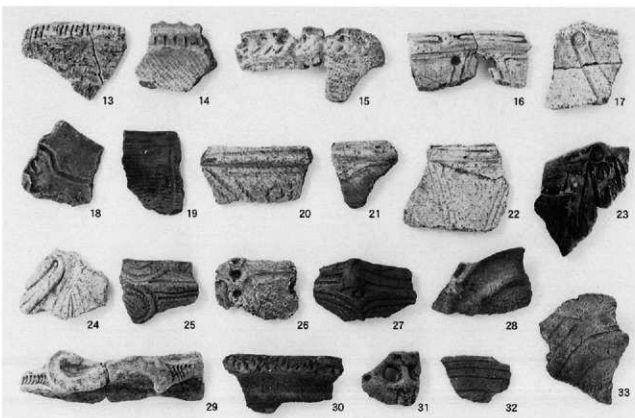

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20


21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41

縄文土器（22）

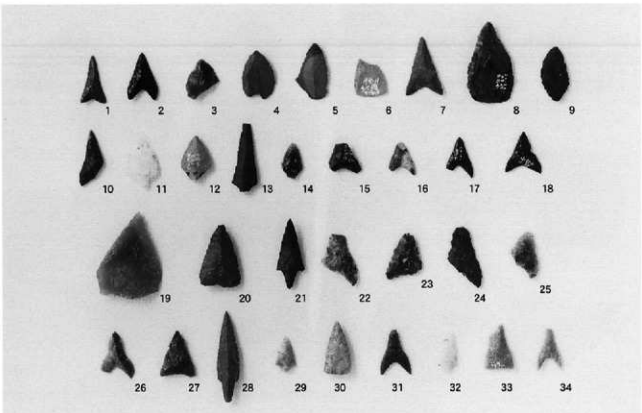
図版51


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12


13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

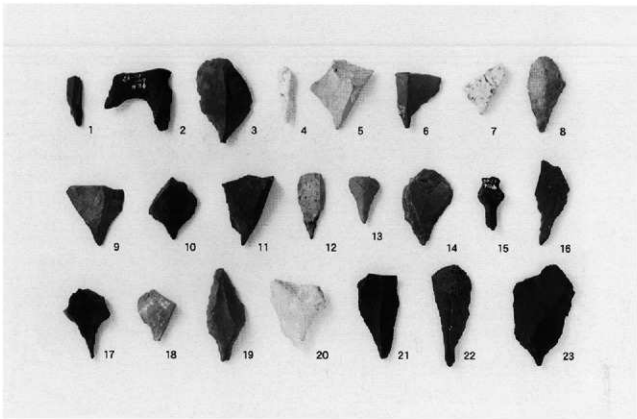
縄文土器（23）

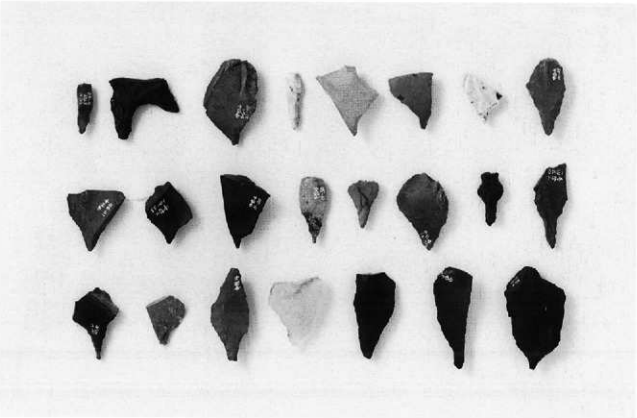
図版52


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

石鏃

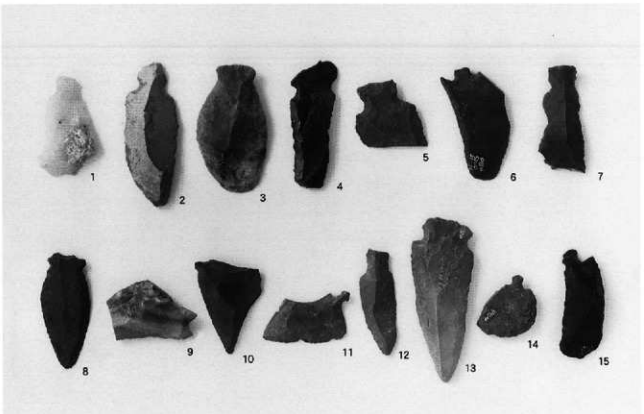
図版53





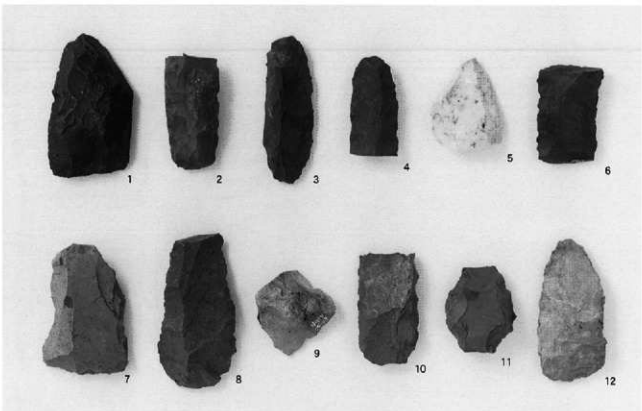
石錐

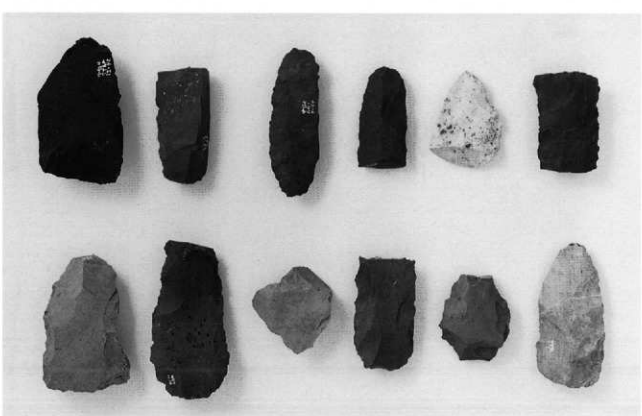
図版54



石匙

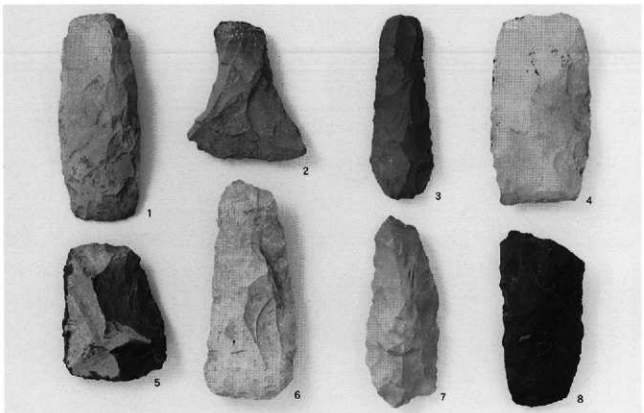
図版55

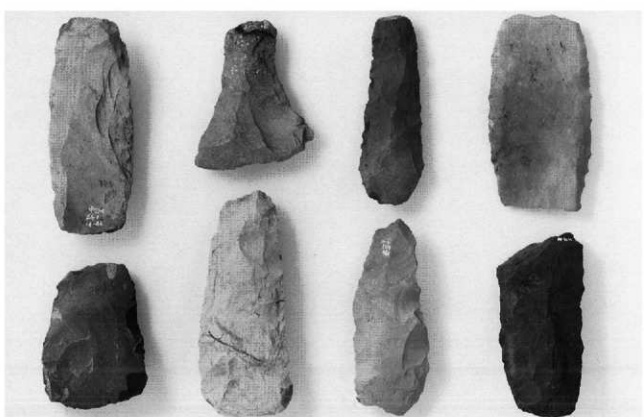




石箆（1）

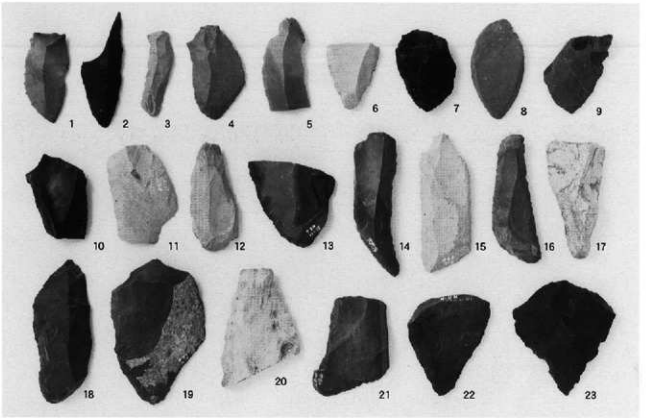
図版56

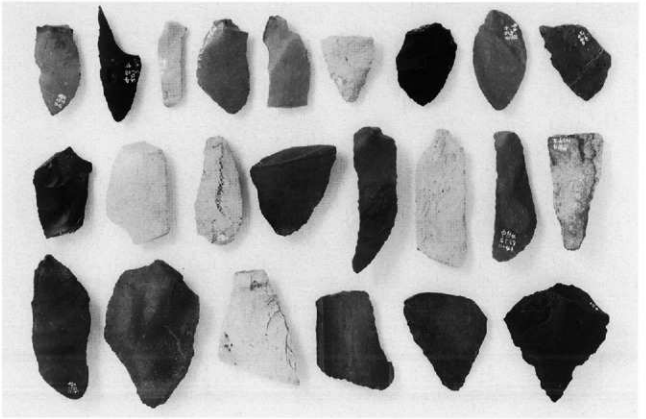




石匙（2）

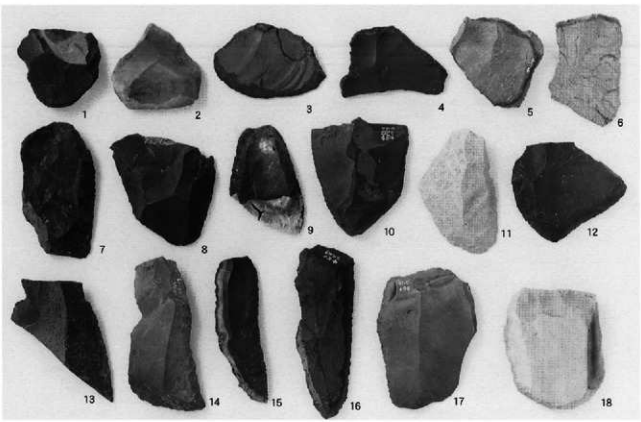
図版57

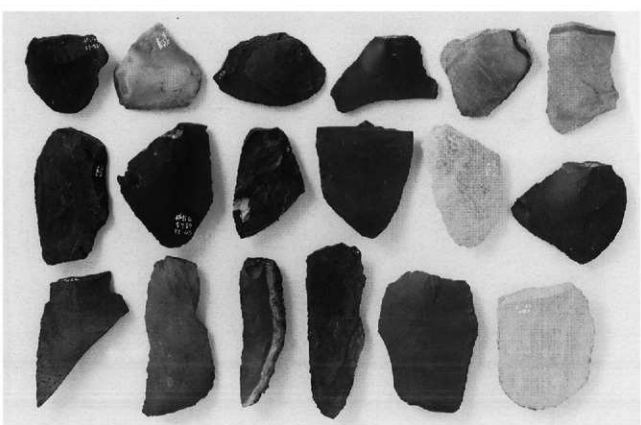




掻・削器（1）

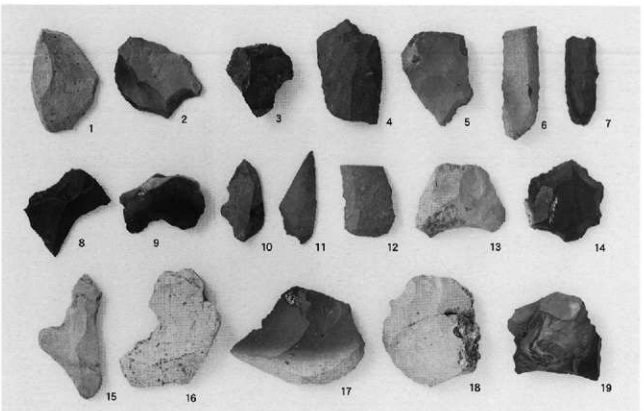
図版58

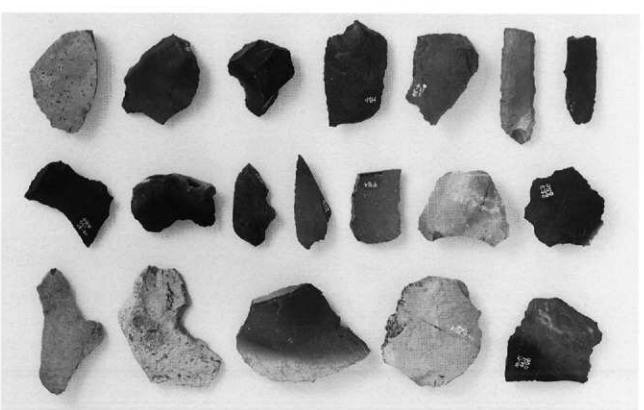




掻・削器（２）

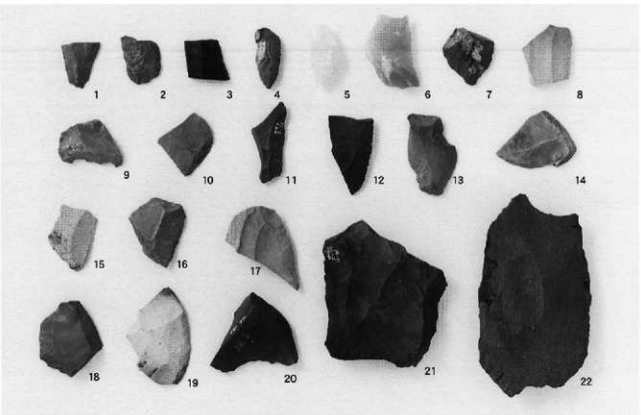
図版59

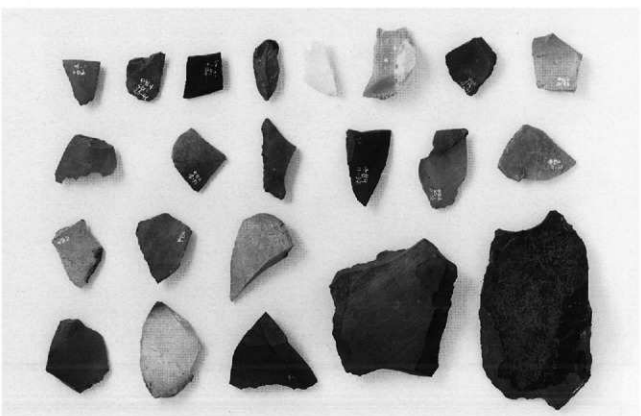




掻・削器（3）

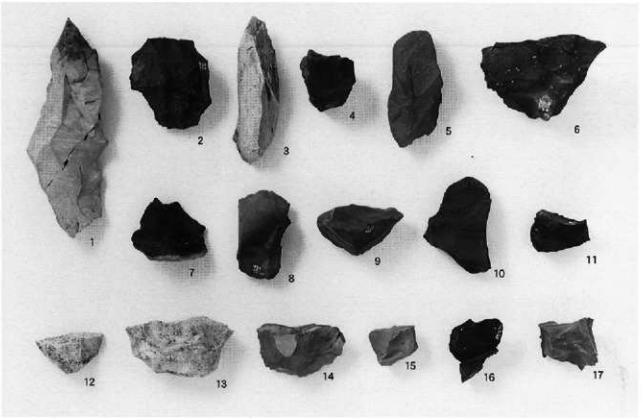
図版60

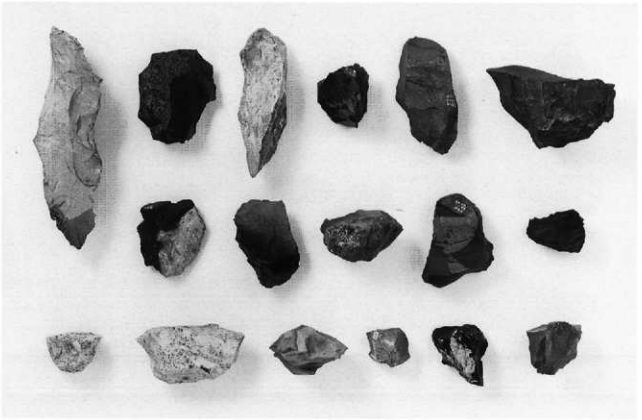




掻・削器（４）

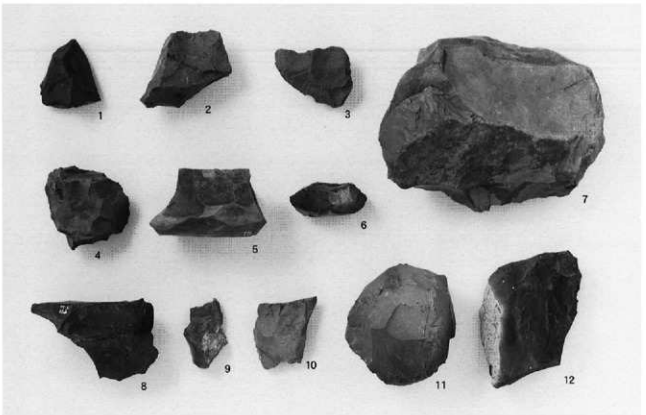
図版61

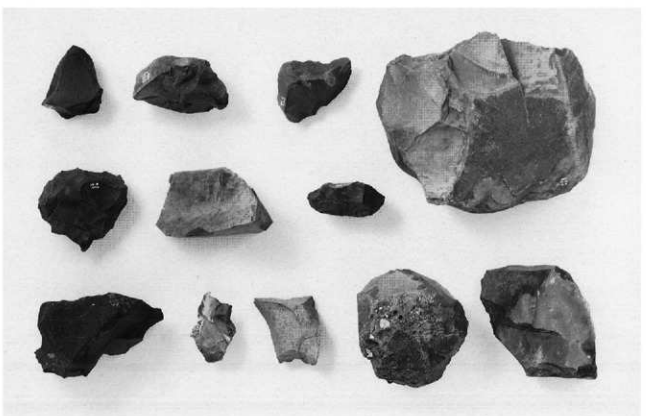




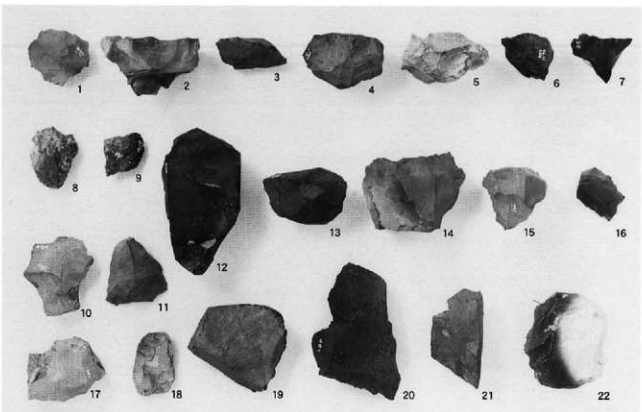
石核（１）

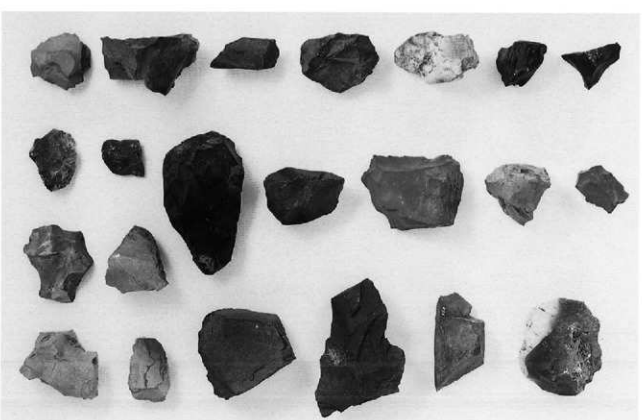
図版62





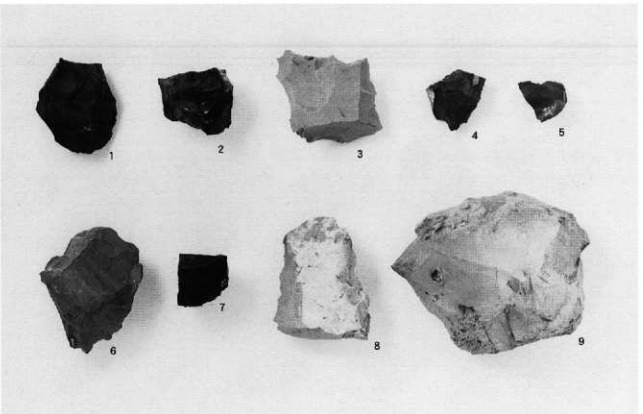
石核（2）

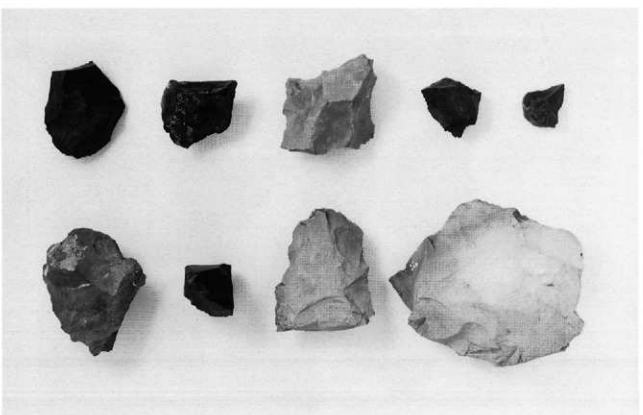




石核（3）

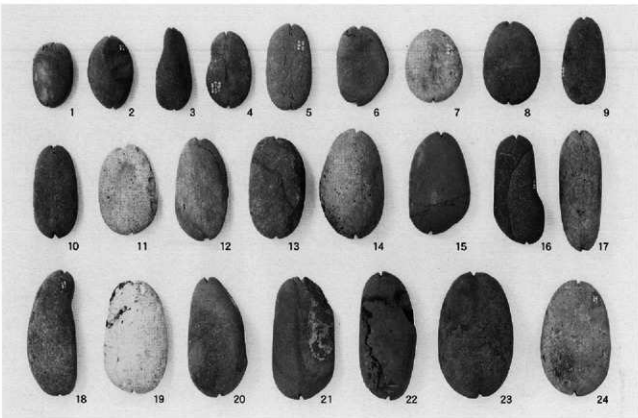
図版64





石核（4）

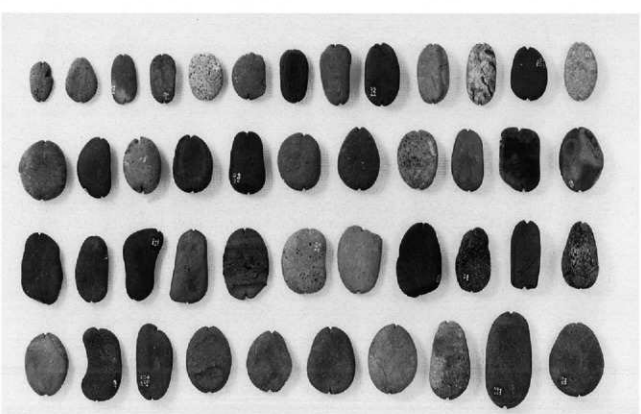
図版65



石錘（1）

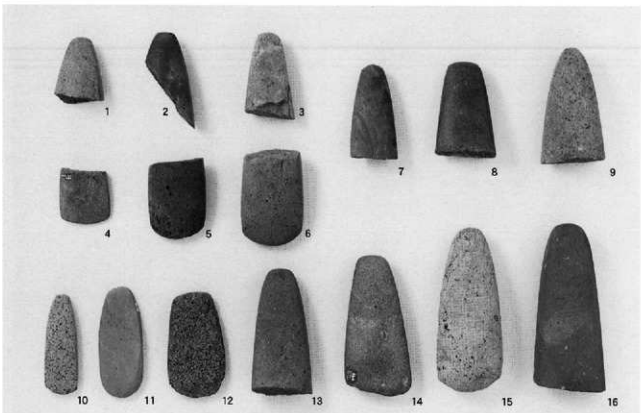
図版66

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45



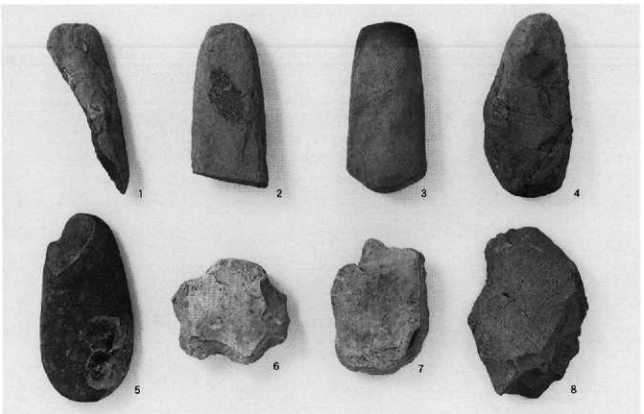
石錘（2）

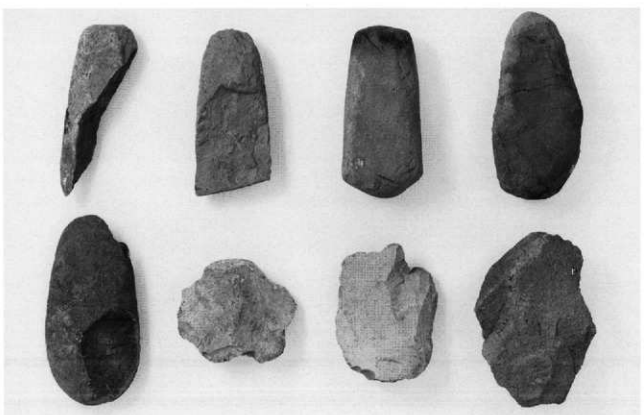
図版67



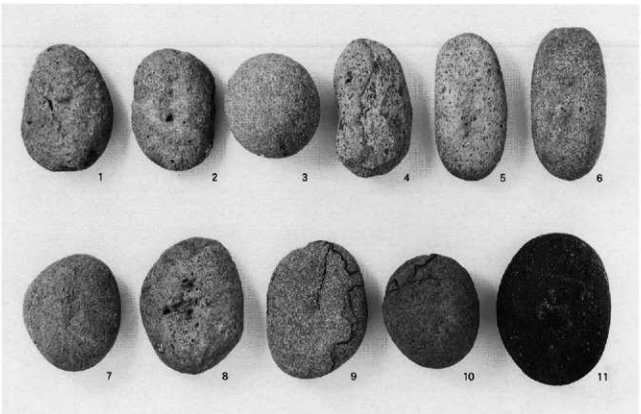
磨製石斧

図版68



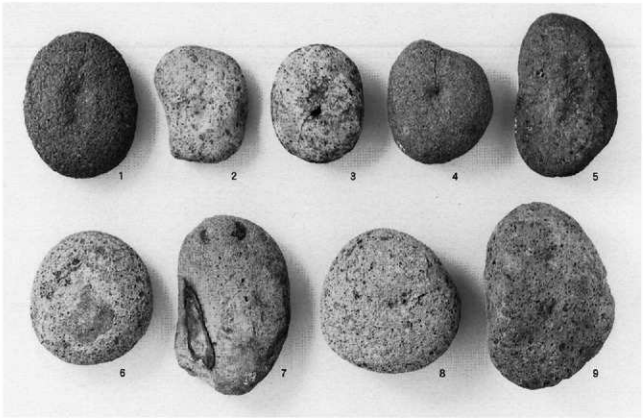


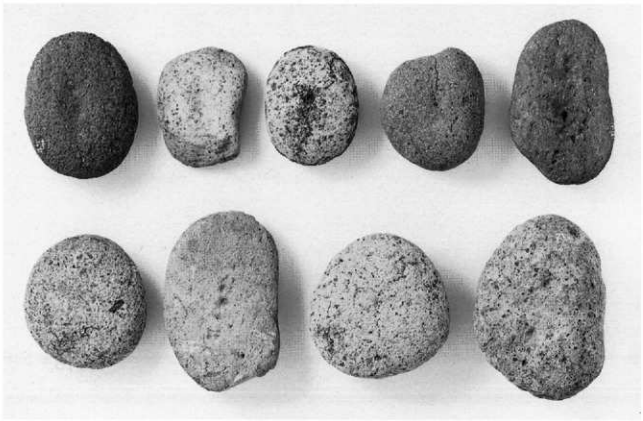
打製石斧・敲石



凹石（1）

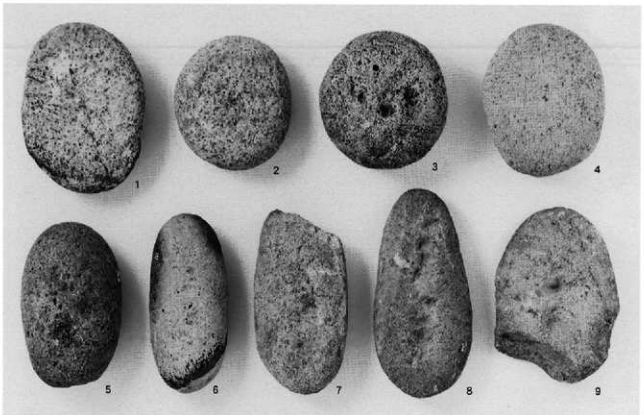
図版70





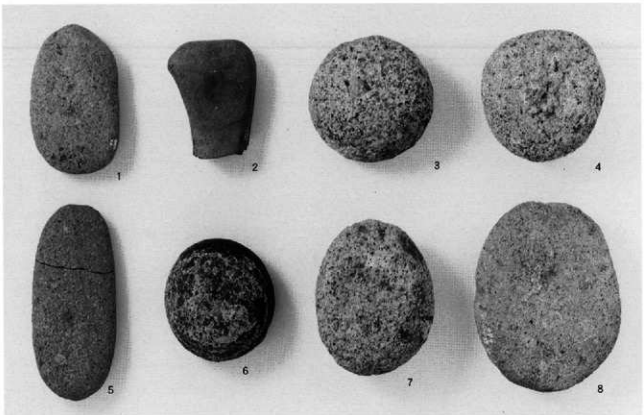
凹石（2）

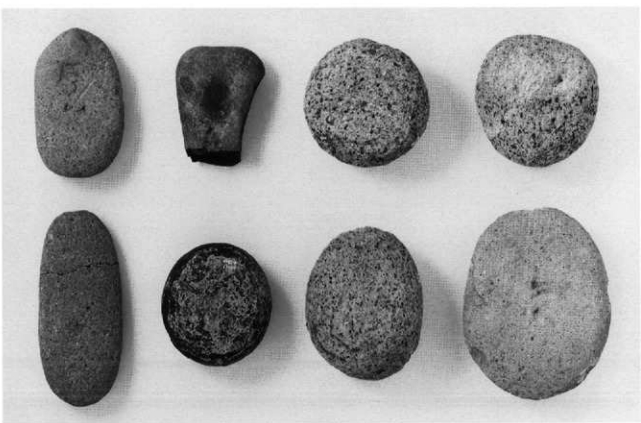
図版71



凹石（3）

図版72





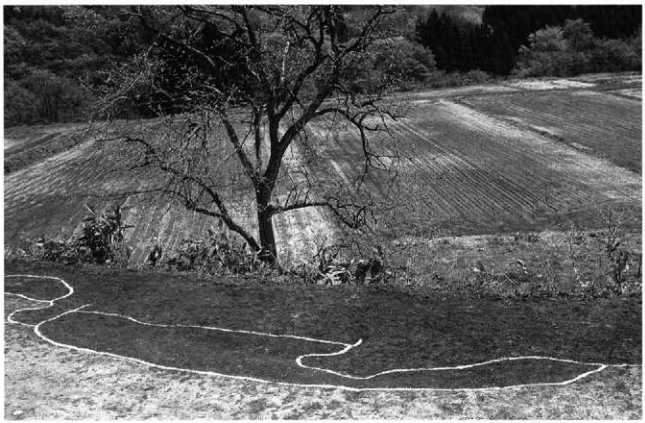
凹石（4）

図版73

調査前の状況（北西から）

遺構検出状況（↑南東）

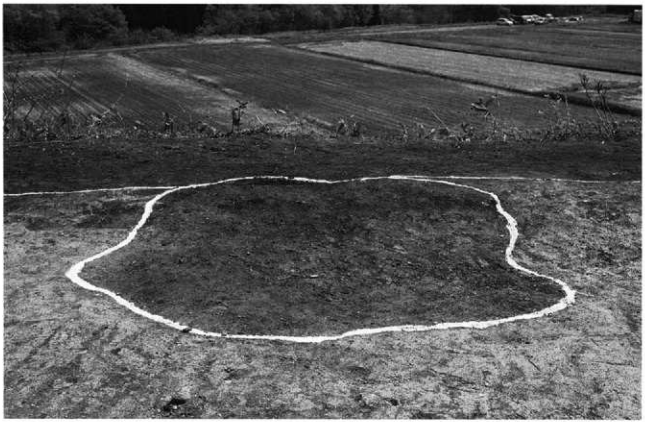
図版74



SK２検出状況（北西から）

SK２土層断面（西から）

図版75



SK 3 検出状況（北西から）

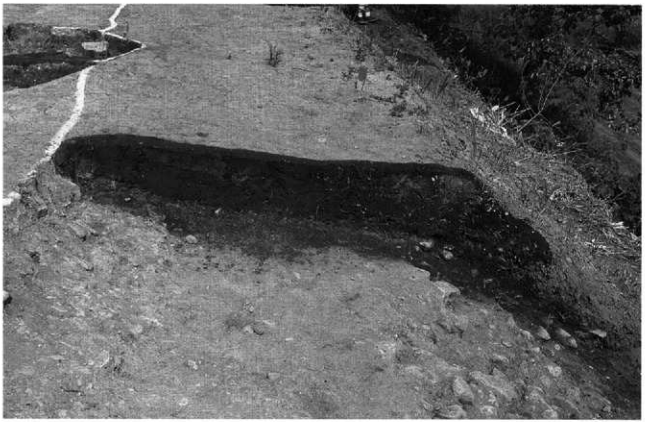
SK 3 土層断面（西から）

図版76

トレンチ２西壁土層断面（北西から）

トレンチ３東壁土層断面（西から）

図版77



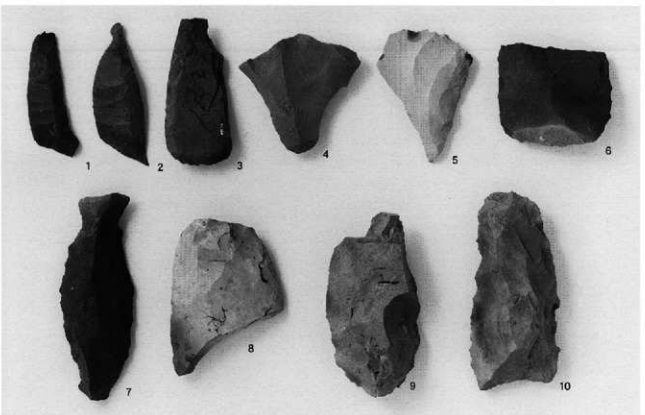
トレンチ５東壁土層断面（南から）

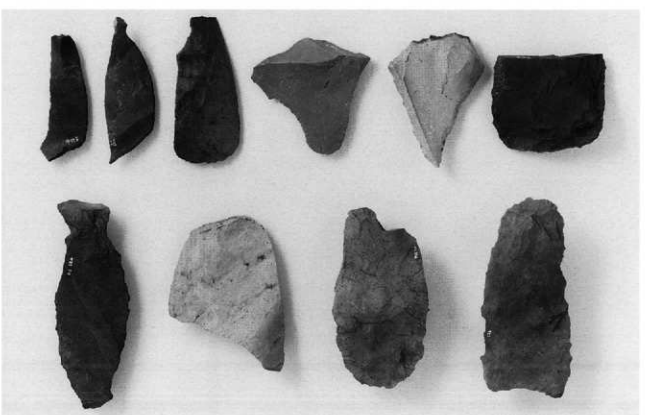
トレンチ７東壁土層断面（北西から）

図版78

調査区完掘状況（北東から）

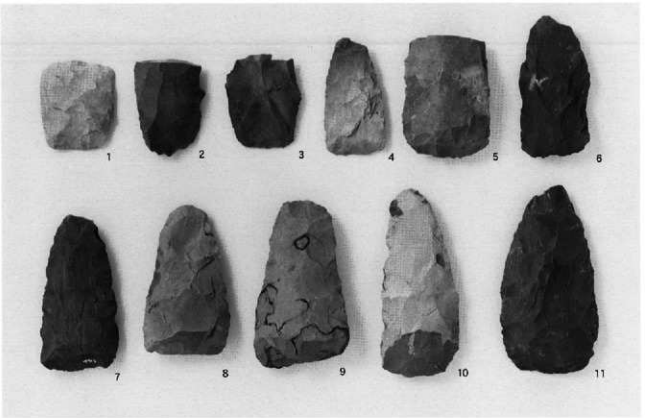
図版79

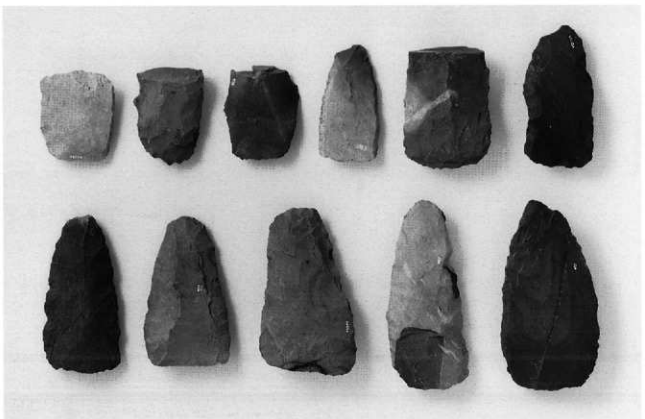




出土遺物（１）

図版80





出土遺物（２）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第84集

中台（なかだい）4・5発掘調査報告書

2001年3月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161
山形県上山市弁天二丁目15番1号
☎023－672－5301
印刷　株式会社大風印刷